京都市内遺跡発掘調査報告

平成19年度

2008年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

例　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成19年度の京都市内遺跡発掘調査報告である。

2　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。

Ⅰ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡（文化財保護課番号　06K670）
京都市上京区竹屋町通千本東入主税町1155番
2007年6月6日～2007年6月28日　80.13㎡　西森正晃

Ⅱ　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡（文化財保護課番号　07K259）
京都市中京区聚楽廻西町80
2007年8月31日～2007年10月5日　176㎡　西森正晃・内田好昭

Ⅲ　平安宮西雅院跡（文化財保護課番号　06K677）
京都市上京区日暮通丸太町上る西入西院町747-12他
2007年2月26日～2007年3月17日　84㎡　布川豊治

Ⅳ　平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡（文化財保護課番号　07H263）
京都市中京区小川通六角下る元本能寺町391-1
2007年8月22日～2007年9月14日　100㎡　山本雅和

Ⅴ　平安京西寺跡・唐橋遺跡（文化財保護課番号　06H624）
京都市南区唐橋西寺町35-12
2007年2月16日～2007年3月2日　31.4㎡　能芝妙子

Ⅵ　法勝寺跡・岡崎遺跡（文化財保護課番号　07R098）
京都市左京区岡崎南御所町10、10-4、9-4、9-6、9-15、9-26
2007年7月9日～2007年7月27日　112.5㎡　綱　伸也

Ⅶ　中臣遺跡84次調査（文化財保護課番号　06N422）
京都市山科区勧修寺西金ヶ崎390、391
2006年12月18日～2007年1月17日　260㎡　西森正晃

Ⅷ　妙満寺窯跡（文化財保護課番号　07S056）
京都市左京区岩倉幡枝町743-28、743-29、1215-3、1215-6番地
2007年6月25日～2007年7月27日　152㎡　上村和直

Ⅸ　植物園北遺跡1（文化財保護課番号　06S753）
京都市左京区松ヶ崎芝本町4番地1
2007年5月29日～2007年7月2日　120㎡　山本雅和

X　植物園北遺跡２（文化財保護課番号　07Ｓ328）
京都市北区上賀茂豊田町26番、39番
2007年11月19日～2007年12月15日　183㎡　柏田有香

XI　寺戸大塚古墳
京都市西京区大枝南福西町２丁目
2007年１月22日～2007年３月20日　62.9㎡　吉崎　伸

3　本書の執筆分担は、下記のとおりである。
I　西森正晃
II　西森正晃
III　布川豊治
IV　山本雅和
V　能芝妙子
VI　綱　伸也
VII　西森正晃
VIII　上村和直
IX　山本雅和
X　柏田有香
XI　吉崎　伸

4　整理作業および本書の作成には、上記の執筆者のほかに以下の者が参加した。
出水みゆき（遺物彩色）、村上　勉（遺物復元）、竜子正彦（保存処理）

5　本書に使用した写真の撮影は、主に村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は現場担当者が行った。

6　本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

7　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は宮原健吾が行った。本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。

8　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「二軒茶屋」「鞍枝」「植物園」「聚楽第」「吉田」「壬生」「中河原」「梅小路」「勧修寺」「中山」「石見」「寺戸」「粟生」「向日町」を調整したものである。

9　本書の編集は、柏田有香・児玉光世・近藤章子・山口　眞が行った。

本 文 目 次

Ⅰ 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1．調査経過 …… 1
（1）調査経過 …… 1
（2）位置と環境 …… 2
2．遺　構 …… 4
（1）基本層序と遺構の概要 …… 4
（2）古墳時代の遺構 …… 4
（3）平安時代の遺構 …… 4
（4）江戸時代の遺構 …… 8
3．遺　物 …… 8
（1）瓦類 …… 8
（2）土器類 …… 12
（3）石製品 …… 13
4．ま と め …… 13
（1）昌福堂の規模 …… 13
（2）緑釉瓦について …… 14
（3）基壇の構築順序について …… 15
（4）昌福堂の廃絶年代について …… 15

Ⅱ 平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

1．調査経過 …… 18
2．位置と環境 …… 20
（1）位置と歴史的環境 …… 20
（2）周辺の調査 …… 21
3．遺　構 …… 22
（1）基本層序と遺構の概要 …… 22
（2）平安時代以前の遺構 …… 22
（3）平安時代の遺構 …… 22
（4）江戸時代の遺構 …… 30
4．遺　物 …… 32
（1）遺物の概要 …… 32
（2）土器類 …… 33

（3）瓦類 …… 35
5．まとめ …… 40
（1）清暑堂の立地 …… 40
（2）清暑堂の規模 …… 40
（3）清暑堂・北廊の成立について …… 41
（4）北廊について …… 42

Ⅲ　平安宮西雅院跡
1．調査経過 …… 46
2．遺　構 …… 48
（1）基本層序 …… 48
（2）遺構 …… 48
3．遺　物 …… 50
（1）土器類 …… 50
（2）瓦類 …… 52
4．まとめ …… 53

Ⅳ　平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡
1．調査経過 …… 54
2．遺　構 …… 56
（1）基本層序 …… 56
（2）第1面の検出遺構 …… 57
（3）第2面の検出遺構 …… 60
3．遺　物 …… 61
（1）遺物の概要 …… 61
（2）土器類 …… 61
（3）瓦類 …… 67
（4）その他の出土遺物 …… 68
4．まとめ …… 71

Ⅴ　平安京西寺跡・唐橋遺跡
1．調査経過 …… 74
2．遺　構 …… 76
（1）基本層序 …… 76
（2）検出した遺構 …… 76

3．遺　物 …… 78
（1）遺物の概要 …… 78
（2）出土遺物 …… 78
4．まとめ …… 80

Ⅵ　法勝寺跡・岡崎遺跡
1．調査経過 …… 81
2．遺　構 …… 84
3．遺　物 …… 84
4．まとめ …… 87

Ⅶ　中臣遺跡84次調査
1．調査経緯 …… 89
2．遺　構 …… 90
（1）基本層序と遺構の概要 …… 90
（2）検出遺構 …… 93
3．遺　物 …… 93
4．まとめ …… 94

Ⅷ　妙満寺窯跡
1．調査経過 …… 95
（1）調査経過 …… 95
（2）遺跡の位置と環境 …… 95
（3）周辺の調査 …… 97
2．遺　構 …… 98
（1）層　序 …… 98
（2）第1面の遺構 …… 99
3．遺　物 …… 100
（1）遺物の概要 …… 100
（2）土器類 …… 100
（3）瓦　類 …… 103
（4）窯　壁 …… 104
4．まとめ …… 104

Ⅸ 植物園北遺跡１
1．調査経過 …… 106
2．遺　構 …… 108
（1）基本層序 …… 108
（2）飛鳥時代から平安時代 …… 108
（3）古墳時代前期 …… 111
3．遺　物 …… 114
（1）飛鳥時代から平安時代 …… 114
（2）古墳時代前期 …… 115
4．ま と め …… 120

Ⅹ 植物園北遺跡２
1．調査経過 …… 121
2．遺　構 …… 122
（1）基本層序 …… 122
（2）遺構 …… 125
3．遺　物 …… 130
（1）土器類 …… 130
（2）瓦類 …… 135
（3）石器 …… 136
4．ま と め …… 136

Ⅺ 寺戸大塚古墳
1．調査経過 …… 138
2．古墳の概要 …… 139
3．既往の調査 …… 140
4．遺　構 …… 142
5．遺　物 …… 146
6．ま と め …… 148

報告書抄録 …… 151

図 版 目 次

図版1	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺構	1 全景（北から）
			2 北拡張区全景（北西から）
図版2	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺構	1 昌福堂基壇延石（北から）
			2 昌福堂基壇延石（西から）
図版3	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺構	1 延石地山掘り下げ（東から）
			2 延石地山掘え置き（西から）
			3 延石嵩上げ（南から）
			4 地覆石抜き取り痕瓦出土状況（北西から）
			5 昌福堂基壇盛土断面（西から）
図版4	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺構	1 化粧土掘り下げ（西から）
			2 化粧土断面（西から）
			3 裏込め土断面（南西から）
図版5	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺物	出土遺物
図版6	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 調査区全景　平安時代（東から）
			2 調査区全景　江戸時代（東から）
図版7	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 北廊縦断面（溝２西壁）（北東から）
			2 落込み51北肩と北廊（南東から）
図版8	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 清暑堂基壇と西階段（南西から）
			2 西階段（東から）
			3 西階段延石・踏石（西から）
図版9	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 西階段断面（北西から）
			2 西階段断面（南東から）
図版10	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 清暑堂中央間　北廊取り付き部（東から）
			2 土坑49（北から）
			3 北廊Ⅰ期側面瓦貼り付け状況（西から）
図版11	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 塼敷きと北廊版築状況（西から）
			2 塼敷きと史跡豊楽殿北廊跡（北から）
			3 北廊断割断面（南西から）
図版12	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	遺物	出土遺物
図版13	平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	遺物	出土遺物

図版14	平安宮西雅院跡	遺構	1	調査区全景（北から）
			2	北壁断面（南から）
			3	流路断ち割り（北西から）
図版15	平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡	遺構	1	北壁断面（南東から）
			2	第1面全景（東から）
図版16	平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡	遺構	1	土坑17・98・49・46、溝28（東から）
			2	溝28（南から）
			3	土坑6遺物出土状況（西から）
図版17	平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡	遺構	1	第2面全景（東から）
			2	土坑87(南から)
			3	柱穴109（南から）
			4	柱穴23（南から）
図版18	平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡	遺物	土坑6・土坑15出土土器、土坑26出土焼瓦・焼土塊	
図版19	平安京西寺跡・唐橋遺跡	遺構	1	調査区全景（北から）
			2	柱穴2（東から）
			3	拡張部東壁（北西から）
図版20	平安京西寺跡・唐橋遺跡	遺物	出土遺物	
図版21	法勝寺跡・岡崎遺跡	遺構	1	調査区全景（南西から）
			2	SD9（北から）
図版22	法勝寺跡・岡崎遺跡	遺物	瓦類	
図版23	法勝寺跡・岡崎遺跡	遺物	土器類	
図版24	中臣遺跡84次調査	遺構	1	調査区全景（西から）
			2	落込み6断面（北から）
図版25	妙満寺窯跡	遺構	1	調査地（南東から）
			2	第1面全景（南から）
図版26	妙満寺窯跡	遺構	1	落込全景（北から）
			2	調査区北壁断面（南東から）
図版27	妙満寺窯跡	遺物	土器類1	
図版28	妙満寺窯跡	遺物	土器類2	
図版29	妙満寺窯跡	遺物	1	瓦類
			2	窯壁類
図版30	植物園北遺跡1	遺構	1	全景（北から）
			2	竪穴住居10（東から）

図版31　植物園北遺跡1　　遺構　1　竪穴住居20（北北西から）
2　竪穴住居25（東から）
3　土坑23（北から）
4　溝38・溝39（東から）
図版32　植物園北遺跡1　　遺構　1　竪穴住居30（北から）
2　竪穴住居30炭化材検出状況（北から）
3　竪穴住居30北西側壁溝（北東から）
図版33　植物園北遺跡1　　遺物　竪穴住居30・包含層出土土器
図版34　植物園北遺跡2　　遺構　1　調査区全景（北から）
2　建物1（北から）
図版35　植物園北遺跡2　　遺構　1　建物2（北から）
2　礫敷15（東から）
3　拡張区全景（南から）
図版36　植物園北遺跡2　　遺物　1　土坑30出土土器
2　遺物包含層出土土器
図版37　寺戸大塚古墳　　遺構　1　1トレンチ断面（南から）
2　4トレンチ断面（北から）
3　2トレンチ葺石及び断面の状況（南西から）
図版38　寺戸大塚古墳　　遺構　1　5トレンチ南東断面（西から）
2　5トレンチくびれ部基底石検出状況（南西から）
3　6トレンチ断面（西から）

挿　図　目　次

Ⅰ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡
図1　調査位置図（1：2,500）……1
図2　調査区配置図（1：200）……2
図3　調査前全景（北から）……3
図4　作業風景……3
図5　凝灰岩検出状況（南から）……3
図6　凝灰岩修復作業……3
図7　埋め戻し状況（西から）……3
図8　埋め戻し状況（南西から）……3

図9　遺構実測図（1：100）…… 5
図10　北拡張区実測図（1：40）…… 6
図11　軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図（1：4）…… 9
図12　丸瓦拓影・実測図（1：4）…… 10
図13　平瓦拓影・実測図（1：4）…… 11
図14　記号瓦・鬼瓦・面戸瓦・塼拓影・実測図（1：4）…… 12
図15　土器実測図（1：4）…… 13
図16　石製品 …… 13
図17　朝堂院遺構検出位置図 …… 13
図18　陽明文庫本『宮城図』に描かれた昌福堂 …… 14
Ⅱ　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡
図19　調査位置図（1：2,500）…… 18
図20　調査区配置図（1：500）…… 19
図21　調査前全景（西から）…… 19
図22　作業風景 …… 19
図23　土層剥ぎ取り状況 …… 20
図24　凝灰岩修復作業 …… 20
図25　埋め戻し状況（東から）…… 20
図26　埋め戻し状況（東から）…… 20
図27　北廊縦断面図（1：50）…… 23
図28　遺構平面図　平安時代（1：100）…… 24
図29　落込み51・北廊・清暑堂断面模式図（1：40）…… 25
図30　凝灰岩小口工具痕跡拓影（1：5）…… 26
図31　西階段・溝21実測図（1：50）…… 27
図32　柱穴47実測図（1：40）…… 28
図33　北廊断割断面図（1：50）…… 29
図34　北廊Ⅰ期側面実測図（1：40）…… 30
図35　北廊西側断面図（1：40）…… 31
図36　遺構平面図　江戸時代（1：150）…… 32
図37　平安時代の土器実測図（1：4）…… 34
図38　江戸時代の土器実測図（1：4）…… 34
図39　軒丸瓦拓影・実測図（1：4）…… 36
図40　軒平瓦拓影・実測図（1：4）…… 37
図41　丸瓦・平瓦拓影・実測図（1：4）…… 38
図42　鴟尾拓影・実測図（1：4）…… 38

図43　塼拓影・実測図（1：4）…… 39
図44　清暑堂・北廊復元図（1：400）…… 43
Ⅲ　平安宮西雅院跡
図45　調査位置図（1：2,500）…… 46
図46　調査区配置図（1：1,000）…… 47
図47　調査前全景（北から）…… 47
図48　調査風景（北から）…… 47
図49　遺構実測図（1：100）…… 49
図50　出土遺物拓影・実測図（1：4）…… 51
図51　出土遺物…… 52
Ⅳ　平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡
図52　調査位置図（1：2,500）…… 54
図53　調査区配置図（1：300）…… 55
図54　調査前全景（東から）…… 55
図55　作業風景…… 55
図56　西壁断面図（1：40）…… 56
図57　遺構平面図（1：100）…… 58
図58　土坑46・土坑49・土坑98・土坑17実測図（1：40）…… 59
図59　溝28実測図（1：40）…… 60
図60　土坑97・土坑18・土坑27・土坑60・土坑29・土坑87出土土器実測図（1：4）…… 63
図61　土坑6・土坑26・土坑46・土坑17出土土器実測図（1：4）…… 64
図62　土坑53・土坑54出土土器・土製品実測（1：4）…… 65
図63　土坑15出土土器・土製品・石製品実測図（1：4）…… 66
図64　土坑26出土瓦拓影・実測図1（1：4）…… 68
図65　土坑26出土瓦拓影・実測図2（1：4）…… 69
図66　土坑26出土瓦拓影・実測図3（1：4）…… 70
図67　井戸12・土坑52出土塼実測図（1：4）…… 71
図68　遺構変遷図（1：200）…… 72
Ⅴ　平安京西寺跡・唐橋遺跡
図69　調査位置図（1：2,500）…… 74
図70　調査区配置図（1：250）…… 75
図71　調査前全景（南から）…… 75
図72　作業風景…… 75
図73　遺構実測図（1：50）…… 77
図74　古墳時代の土器実測図（1：4）…… 78

図75　平安時代の土器実測図（1：4）…… 78
図76　軒瓦拓影・実測図（1：4）…… 79
Ⅵ　法勝寺跡・岡崎遺跡
図77　調査位置図（1：2,500）…… 81
図78　調査区配置図（1：300）…… 82
図79　調査前全景（北西から）…… 82
図80　作業風景…… 82
図81　遺構平面図（1：100）…… 83
図82　北壁断面図（1：50）…… 83
図83　軒瓦拓影・実測図1（1：4）…… 85
図84　軒瓦拓影・実測図2（1：4）…… 85
図85　SD9および土壇西側落ち部出土土器実測図（1：4）…… 86
図86　「天明六年京都洛中洛外絵図」…… 88
Ⅶ　中臣遺跡84次調査
図87　調査位置図（1：5,000）…… 89
図88　調査区配置図（1：400）…… 90
図89　調査前全景（南西から）…… 90
図90　作業風景…… 90
図91　遺構平面図（1：150）…… 91
図92　南壁断面図（1：80）…… 92
図93　土器実測図（1：4）…… 93
Ⅷ　妙満寺窯跡
図94　調査区配置図（1：1,000）…… 95
図95　周辺の調査位置および関連遺跡（1：2,500）…… 96
図96　調査前全景（南から）…… 97
図97　作業風景…… 97
図98　基本土層図（北壁東部、1：40）…… 98
図99　遺構実測図（1：100）…… 99
図100　土器実測図1（1：4）…… 101
図101　土器実測図2（1：4）…… 102
図102　瓦類拓影・実測図（1：4）…… 103
Ⅸ　植物園北遺跡1
図103　調査位置図（1：2,500）…… 106
図104　調査区配置図（1：400）…… 107
図105　調査前全景（北から）…… 107

図106 作業風景 …… 107
図107 東壁断面図（1：40） …… 108
図108 遺構平面図（1：100） …… 109
図109 竪穴住居10実測図（1：40） …… 110
図110 溝39断面図（1：40） …… 111
図111 竪穴住居20実測図（1：40） …… 111
図112 竪穴住居30実測図（1：40） …… 112
図113 溝38断面図（1：40） …… 113
図114 溝39・竪穴住居10・溝24・包含層出土土器実測図（1：4） …… 114
図115 竪穴住居20出土土器実測図（1：4） …… 115
図116 土壙23出土土器実測図（1：4） …… 116
図117 竪穴住居30出土土器実測図（1：4） …… 117
図118 溝38・竪穴住居25・包含層出土土器実測図（1：4） …… 119
X 植物園北遺跡2
図119 調査地と周辺調査位置図（1：5,000） …… 121
図120 調査前全景（北から） …… 122
図121 作業風景 …… 122
図122 調査区配置図（1：400） …… 122
図123 調査区断面図（1：50） …… 123
図124 調査区平面図（1：150） …… 124
図125 建物1実測図（1：50） …… 125
図126 建物2実測図（1：50） …… 126
図127 建物3実測図（1：50） …… 127
図128 柱列1実測図（1：50） …… 128
図129 柱列2実測図（1：50） …… 129
図130 礫敷15実測図（1：20） …… 129
図131 建物1・3、柱列1・2出土土器実測図（1：4） …… 131
図132 土坑30出土土器実測図（1：4） …… 132
図133 遺物包含層出土土器実測図（1：4） …… 133
図134 瓶子49 …… 133
図135 瓦拓影・実測図（1：4） …… 135
図136 軒平瓦61 …… 136
図137 石鏃66 …… 136
図138 石鏃実測図（1：1） …… 136
図139 平安時代の遺構変遷図（1：400） …… 137

XI　寺戸大塚古墳
図140　調査位置図（1：15,000）…… 138
図141　調査前全景（南から）…… 139
図142　作業風景…… 139
図143　調査トレンチ配置図…… 141
図144　1トレンチ断面図（1：60）…… 142
図145　2トレンチ実測図および3・4トレンチ断面図（1：60）…… 143
図146　5トレンチ実測図（1：60）…… 145
図147　6・7トレンチ断面図（1：60）…… 146
図148　遺物実測図（1：4）…… 147
図149　出土遺物…… 147
図150　墳丘復元図（1：800）…… 148
図151　墳丘断面模式図（1：150）…… 149
図152　墳丘の仮保存処置状況…… 149

表　目　次

I　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡
表1　遺構概要表…… 4
表2　遺物概要表…… 8
II　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡
表3　遺構概要表…… 22
表4　遺物概要表…… 33
表5　清暑堂復元規模一覧表…… 41
表6　北廊変遷表…… 42
III　平安宮西雅院跡
表7　周辺の主な調査一覧表…… 47
表8　遺構概要表…… 48
表9　遺物概要表…… 50
IV　平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡
表10　遺構概要表…… 57
表11　遺物概要表…… 62

Ⅴ　平安京西寺跡・唐橋遺跡
表12　周辺の主な調査一覧表 …… 75
表13　遺構概要表 …… 76
表14　遺物概要表 …… 79
Ⅵ　法勝寺跡・岡崎遺跡
表15　遺構概要表 …… 86
表16　遺物概要表 …… 86
Ⅶ　中臣遺跡84次調査
表17　遺構概要表 …… 93
表18　遺物概要表 …… 93
Ⅷ　妙満寺窯跡
表19　遺構概要表 …… 100
表20　遺物概要表 …… 100
Ⅸ　植物園北遺跡1
表21　遺構概要表 …… 113
表22　遺物概要表 …… 114
Ⅹ　植物園北遺跡2
表23　遺構概要表 …… 125
表24　遺物概要表 …… 130
表25　土坑30出土土器比率表 …… 131
表26　掲載土器一覧表 …… 134
Ⅺ　寺戸大塚古墳
表27　調査概要表 …… 140
表28　遺構概要表 …… 144
表29　遺物概要表 …… 146

Ⅰ　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1．調査経過

（1）調査経過

今回の調査は、民家の新築工事に伴う発掘調査で、平成19年度の国庫補助事業である。調査地は、京都市上京区竹屋町通千本東入主税町1155番に位置し、古墳時代の集落跡である聚楽遺跡と平安宮朝堂院昌福堂跡に相当する。昌福堂は朝堂十二堂中、東第一堂であり、太政大臣・左大臣・右大臣の座とされる。朝堂院の復元図[1]では、調査地は昌福堂の北西部にあたることから、関連する遺構の検出が予想された。

調査地は掘削前の状況が典型的な町屋であったことから、敷地南側には坪庭が存在した。また中程には深さ３ｍの防空壕と考えられる地下室も存在し、地山まで達していた。地下室は遺構の有無を確認したあと排土の置き場とした。

調査では、浅いところでは地表下0.5mで地山であるにぶい黄褐色粘質土や暗褐色砂礫を確認し

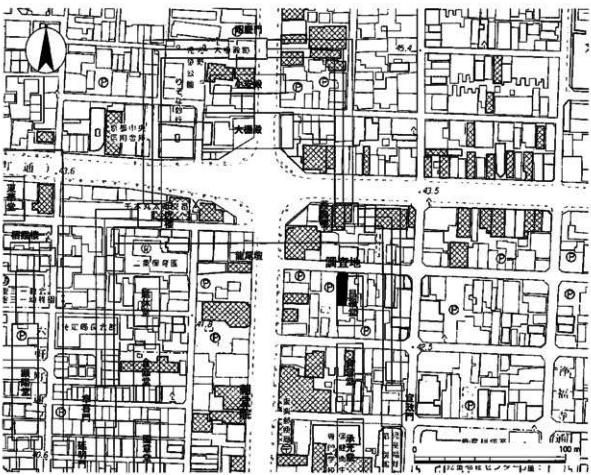


図１　調査位置図（１：2,500）

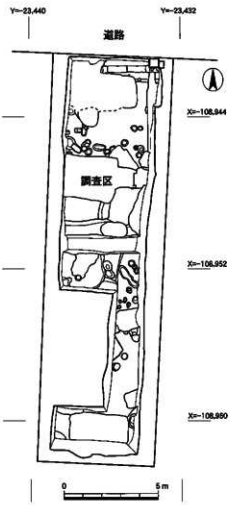


図2　調査区配置図（1：200）

た。この黄褐色粘質土は「聚楽土」と呼ばれ、壁土に適した土であることから、近世以降、土取りが行われており、今回の調査でも土取りの穴を多数検出した。また、古墳時代、江戸時代の遺構も検出したが、当初設定した調査区では平安時代の遺構は確認できなかった。そのため敷地の北端までサブトレンチを設けた。このトレンチで凝灰岩の切石を検出したため（図5）、さらにこの部分を東西に拡張した。検出した切石は昌福堂の北端にあたる壇上積基壇の延石と考えられた。確認できたのは、合計4石分、東西約3mにわたる。昌福堂の遺構を検出したのは今回の調査が初めてであることから、広報発表を行った。調査区が狭少なため、一般の現地説明会はできなかったが、平成19年6月21日に地元を対象にした説明会を実施した。

また、作業途中に西端の延石に亀裂が見つかったため、エポキシ樹脂によって接合し修復した（図6）。

なお、京都市文化財保護課の指導により、昌福堂基壇は現地保存となったことから、埋め戻しの際は延石、盛土の周囲を土嚢で保護し、延石には不織布を掛けたうえで真砂土で埋め戻した（図7・8）。下水管の埋設も、既存の管路を踏襲することで、新たな破壊を行わないよう配慮していただけることとなった。

（2）位置と環境

平安宮朝堂院は、宮の中央南部を占有している。長岡京からの遷都後、内裏に続いて建設が急がれ、延暦十五年（796）正月には桓武天皇が大極殿において元日の朝賀を受け、翌年に朝堂院で射礼を行っていることから、延暦十五年中には完成していたと考えられる。

朝堂院は儀式（朝議）や政務（朝政）を行う場所であり、官司ごとに座るべき場所（朝座）が定められていた。朝堂院は八省院とも呼ばれ、官人たちが政務を行う場所として認識されていたことがわかる。しかし、平安京では宮内に官衙の整備がすすみ、大極殿を含む朝堂院は儀礼的な面が強くなったと考えられる。

調査地が該当する昌福堂は、東一殿とも呼ばれ[21]、前述したように太政大臣・右大臣・左大臣の座とされる[33]。また、朝堂院で行われる仏教儀式の一つである御斎会では布施堂として使用されて

いた[4]。朝堂院は二度火災で焼失した後再建されたが、治承元年（1177）の火災（太郎焼亡）で大極殿と共に全焼し、以後再建されなかったとされている。

調査地周辺は鎌倉時代後半以降、内野と呼ばれ荒れ野となり、室町時代には度々戦場となった。当地が再び注目されるのは、豊臣秀吉によって聚楽第が築かれて以降である。江戸時代には、調査地を含む一帯は京都所司代の屋敷が存在していた。

図3　調査前全景（北から）

図4　作業風景

図5　凝灰岩検出状況（南から）

図6　凝灰岩修復作業

図7　埋め戻し状況（西から）

図8　埋め戻し状況（南西から）

2．遺　構

（1）基本層序と遺構の概要（図9、表1）

基本層序は上から現代盛土が約20～30cm、近世整地層が約20cm、以下部分的に粗砂を含むにぶい黄褐色粘質土、暗褐色砂礫が堆積している。その下に聚楽土と呼ばれるにぶい黄褐色粘質土、黒褐色粘質土、黄褐色粘質土と続く。一部、昌福堂基壇の盛土が現代盛土直下まで残存していた。建物に伴う柱の痕跡は見出せなかった。遺構は地山である粗砂を含むにぶい黄褐色粘質土、聚楽土と呼ばれるにぶい黄褐色粘質土の面で検出している。また、当初設定した調査区の北半で、礫を多く含む固く締まった層が認められ、昌福堂北端部まで分布することから、基壇盛土の一部と判断した。

その他、確認した主な遺構は、古墳時代の土坑、江戸時代の瓦溜、土取穴、溝などがある。昌福堂関連の遺構を除けば、大半が江戸時代の遺構である。

（2）古墳時代の遺構（図9、図版1）

土坑45　調査区南半で検出した土壙である。西側は調査区外であるため、全容は不明である。当初、遺構の平面形状から竪穴住居の可能性を考えて掘削を開始したが、底が不整形であり、壁溝の痕跡も確認できなかったことから、土壙と判断した。遺物は布留式期の高杯が出土している。

土坑64　調査区南端で検出した。東側は調査区外であるため、全容は不明である。平面形は楕円形で深さは約40cmある。遺物は土師器細片が出土している。

（3）平安時代の遺構

昌福堂基壇（図10、図版1～4）　北拡張区で検出した。確認したのは、壇上積基壇の一部である延石と内側の基壇盛土、裏込め土、地覆石掘形、地覆石抜き取り痕、延石外側の整地層、化粧土である。基壇は現状保存することとなったため、延石内側にはサブトレンチを設けて、断面観察を行った。

延石は全て凝灰岩で、1石の長さ約100cm、幅34～38cm、厚さ11～21cmで4石分確認した。凝灰岩は黒色の砂粒を含むもので、二上山産と推測される。東端の延石は、下水管敷設の際に一部

表1　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
古墳時代	土坑45・64	
平安時代	昌福堂基壇	朝堂院昌福堂の基壇北縁
江戸時代	瓦溜16・20、溝17	

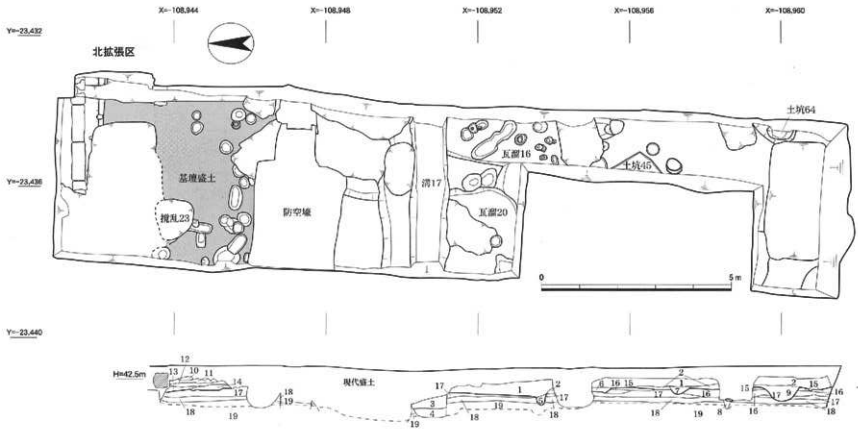


図9 遺構実測図（1：100）

1 10YR3/2 黒褐色砂質土、3cm以下の礫・平安瓦多量含（瓦溜16）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土、炭化物微量含（近世整地層）
3 10YR3/3 暗褐色砂質土、3cm以下の礫少量含（溝17）
4 10YR3/3 暗褐色粘質土（溝17）
5 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土（近世遺構）
6 10YR3/3 暗褐色砂質土、明黄褐色シルトブロック状に含（近世遺構）
7 10YR2/2 黒褐色粘砂質土、5mm以下の礫中量含（近世遺構）
8 10YR3/2 黒褐色粘質土、明黄褐色シルトブロック状に含（遺構）
9 10YR2/1 黒色粘質土、炭化物微量・5mm以下の礫中量含（土坑64）
10 10YR2/2 黒褐色砂質土、黒褐色粗砂を帯状に含・3cm以下の礫少量含（基壇盛土）
11 10YR2/2 黒褐色粘質土、非常に固く締る・φ1cm以下の礫少量含（築堤盛土）
12 10YR3/2 黒褐色粘質土、非常に固く締る・φ1cm以下の礫少量含（築堤盛土）
13 10YR3/3 暗褐色砂質土、暗褐色砂礫をブロック状に含・φ3cm以下の礫中量含（築堤盛土）
14 10YR3/3 暗褐色砂礫、暗褐色粘質土をブロック状に含・φ3cm以下の礫多量含（築堤盛土）
15 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、粗砂少量含（地山）
16 10YR3/3 暗褐色粗砂～砂礫（地山）
17 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（地山）
18 10YR2/2 黒褐色粘質土（地山）
19 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、2cm以下の礫中量含（地山）

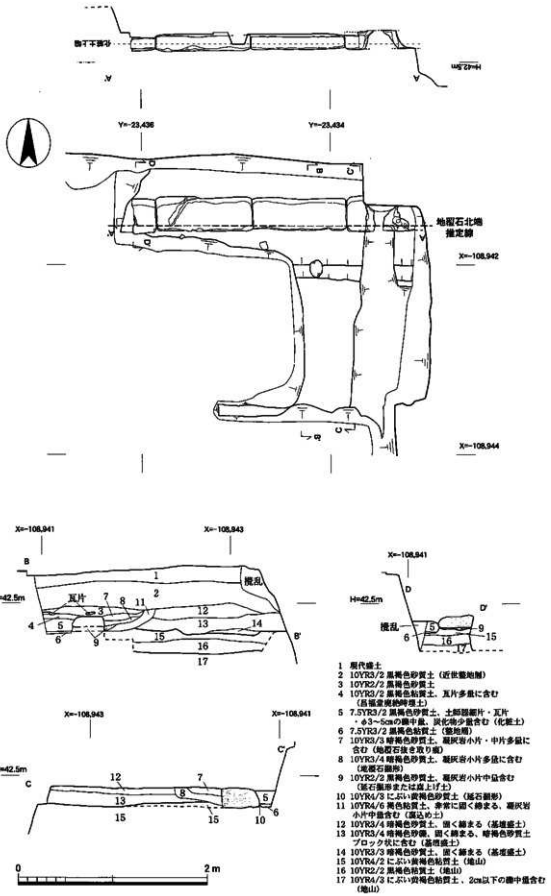


図10　北拡張区実測図（1：40）

破壊されていたが、元位置を保っていた。西端の延石は東西の軸線からわずかにふれているため、元位置から少し動いている可能性がある。延石は厚みに違いがあるため、据え方がそれぞれに違い、地山を掘り込んで据えているもの、ほぼ地山に据え置くもの、石の下に嵩上げのための土を入れているものがある。地覆石を乗せることを目的に、上面を揃えたと考えられる。実際に延石の南端は約10cmの幅で風化が進んでおらず、地覆石を乗せていた痕跡と見られる。異なる厚みの凝灰岩を使用していることは、別の場所から転用した可能性を示している。また断面観察では、東端の延石の裏面端部が凸状を呈していることを確認している。延石や地覆石には組み合わせるために切り込みや溝を入れる例が多くあることから、これも転用を示す根拠と考えられる。

基壇盛土（層12・13）は、固く締まっており、地山の上に厚さ約10cmを一単位として積み上げられている。基壇の盛土の例は平安宮では豊楽殿にある。[81]豊楽殿の基壇盛土は、版築によって築造されており、盛土の単位が0.5～2.0cmと非常に薄い。今回確認した盛土は約10cmと非常に厚く、かなり粗い版築といえる。

裏込め土（層11）は黍楽土と呼ばれる褐色粘質土で構成されている。基壇建物は盛土を行い、建物を建てた後に基壇の外装を行うことから、外装を行うまで間が存在する。そのため、仮の外装として層11が入れられた可能性がある。また、基壇を作り替えたと仮定するならば、以前の延石掘形とも考えることができる。しかし、固く締まった褐色粘質土で構成されていることから、裏込め土と判断した。

地覆石掘形（層８）、地覆石抜き取り痕（層７）は、凝灰岩の破片を多量に含んでいることで判断した。地覆石掘形と抜き取り痕の土はよく似ていたが、上層に含まれる凝灰岩の破片が大きく目立ったことから、抜き取った痕跡と考えた。裏込め土、地覆石掘形に凝灰岩片が含まれるのは、現場で調整を加えながら据え付けていたことを表している。

延石外側の土層（層６）は、地山を掘り込んで形成されている。この層は、遺物をほとんど含まないため、成立年代は不明であるが、延石を据えた後に埋めもどされていることを確認している。礫もほとんど含まず、土も締まっていることから、基壇構築に伴う整地層と考えられる。

化粧土（層５）は、微量の炭化物とともに礫、瓦片を含んでいる。過去に行われた調査[82]で東第三堂承光堂と朝堂院東回廊との間に玉石敷きの空間が確認されており、同様の空間を想定したが、確認した面積も狭く、断定はできない。また、炭化物も含まれていることから、火災後の整地層の可能性も残しておきたい。なお、この層には、土師器の細片も含まれており、９世紀後半から10世紀初頭の年代が与えられる。これは、基壇を作り替えている可能性を示唆するが、断面観察では、明確な作り替えの痕跡は確認できなかった。ただし、基壇外装は凝灰岩で形成されており、凝灰岩は加工しやすい分、浸食も進みやすい。また、建物とは独立していることから、修築も容易であると考えられる。延石は本来大部分が地中に埋まっていることから、浸食の度合いも少ないため、今回確認した延石も創建当初のものが残っていると考えられる。

なお、先述した立会調査で調査区北側道路の南端にて底が礫敷きの東西方向の溝が検出されており、昌福堂北縁の雨落ち溝と考えられる。

（4）江戸時代の遺構（図9、図版1）

瓦溜16　瓦の廃棄土壙である。西肩の一部しか確認できないため全容は不明であるが、南北3m以上の大きさである。埋土には少量の国産施釉陶器、瓦とともに、大量の平安時代の瓦が含まれていた。

瓦溜20　瓦の廃棄土壙である。確認できた大きさは東西約2.2m、南北約1.7mである。埋土に大量の平安時代の瓦が含まれていた。遺物の出土状況、遺構の形状なども瓦溜16と類似していることから、一連の作業で2つの瓦溜が作られたと考えられる。

溝17　調査区ほぼ中央で検出した東西方向の溝である。水が流れた形跡はなかった。東西とも調査区外に続いている。確認した長さは約4m、幅約1m、深さ約0.8mである。溝の断面形は深いU字型であり、丁寧に作られていることから、土地を区画する溝と考えられる。

3. 遺　物

遺物は整理箱にして16箱出土した。古墳時代、平安時代、江戸時代の遺物であるが、大半は江戸時代の瓦溜から出土した平安時代の瓦である。土器類は少量である。また、延石を覆う埋土からは緑釉瓦の出土も目立つ。

（1）瓦類（図11～14、図版5）

平安時代の瓦は前期から後期の瓦が出土しているが、中期のものが最も多い。

軒丸瓦（1）　蓮華文軒丸瓦である。磨耗が進んでいるが、中房は平坦で連子は不明である。子葉は盛り上がり、間弁を有する。調整は不明である。胎土は粗い砂粒を少量含む。瓦溜16出土。

軒平瓦（2～8）　2は、唐草文軒平瓦である。文様は周縁と珠文、わずかに界線が確認できるのみである。瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部粘土を貼り付け。側面はケズリ。平瓦部凹面は細かい布目痕、凸面は縄タタキ後ケズリ。胎土は砂粒を微量含む。上ノ庄田瓦窯産か。平安時代中期。

表2　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器		土師器1点		
平安時代	土師器・須恵器・瓦		須恵器1点、土師器2点、瓦類25点		
江戸時代	焼締陶器・輸入磁器・瓦・石製品		石製品1点		
合　計		17箱	30点（1箱）	3箱	14箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

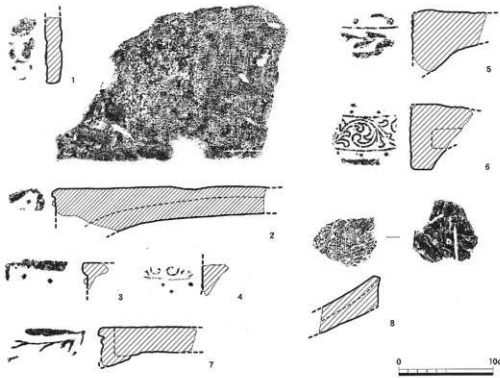


図11　軒丸瓦・軒平瓦拓影・実測図（1：4）

3は、唐草文軒平瓦であるが、文様は周縁と珠文しか残存していない。瓦当部成形は不明。瓦当部凹面、側面はケズリ。胎土は砂粒を少量含む。平安時代前期から中期。

4は、均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字形と思われる。曲線顎。瓦当部片のみであるため、成形、調整は不明。胎土は少量の砂粒含む。深草寺跡で類似の製品が採集されている。[7] 奥海印寺瓦窯産。平安時代中期。

5は、均整唐草文軒平瓦である。文様はほとんど巻きのない幅広の小葉を配する。外区には粗い珠文が巡る。瓦当部成形は不明。瓦当部凹面ナデ、顎部裏面ケズリか。平瓦部凹面布目。胎土は砂粒を少量含む。平安宮内裏内郭回廊で同笵瓦が出土している。[8] また、「オカイラの森」小野瓦窯跡でも同様の瓦が採集されている。[9] 平安時代中期。

6は、均整唐草文軒平瓦である。主葉は複線で連続し、大きく反転する。支葉は巻き込む。外区には小粒の珠文が巡る。曲線顎。瓦当部凹面ナデ、顎部凸面ナデ、平瓦部凹面布目。胎土はやや粗い砂粒含む。河上瓦窯跡で同笵瓦が採集されている。[10] 平安時代中期。

7は、小型の唐草文軒平瓦と思われる。瓦当部成形は平瓦部凸面に顎部粘土貼り付け。平瓦部凹面の粗い布目は瓦当部凹面まで続く。顎部裏面オサエ。平瓦部凸面縄タタキ。胎土は砂粒を多量に含む。地方産か。平安時代後期。

8は、緑釉軒平瓦の平瓦部である。平瓦部凸面、側面に緑釉。凹面は粗い布目。瓦当部は平瓦凸面に顎部粘土を貼り付けたと考えられる。胎土は粗い砂粒を多量に含み、焼成も悪い。平安時代中期か。

2～6は江戸時代の瓦溜16から、7は撹乱23から、8は包含層から出土している。

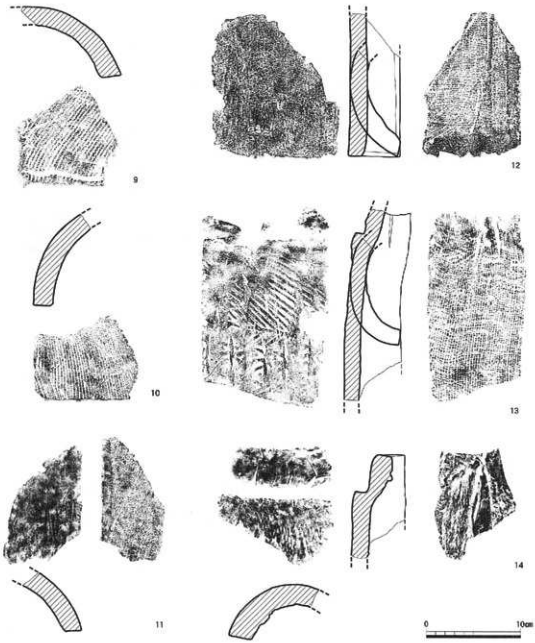


図12　丸瓦拓影・実測図（1：4）

丸瓦（9～14）　9～11は平安時代前期の大型緑釉丸瓦である。凹面は布目。9・10は糸切り痕が明瞭に残る。10の糸切り痕は途中で方向が変化している。9・10とも緑釉の発色は良い。11は、凸面に縄タタキがわずかに残る。緑釉の発色は悪い。胎土は全て砂粒を少量含んでおり、焼成はやや軟質である。

13は九州系の丸瓦である。凹面粗い布目、凸面は丁寧なヨコナデ。側面はケズリ。九州系の瓦は凸面に斜格子状のタタキが施されていることが多いが、平行斜線文のタタキである。凸面中程には「未」字のタタキが見られる。また、成形台から半裁する際に刃物の引き上げ痕と割り放しの痕跡が側面に見られるのも九州系瓦の特徴である。胎土は長石を多く含んでいる。平安時代中期。

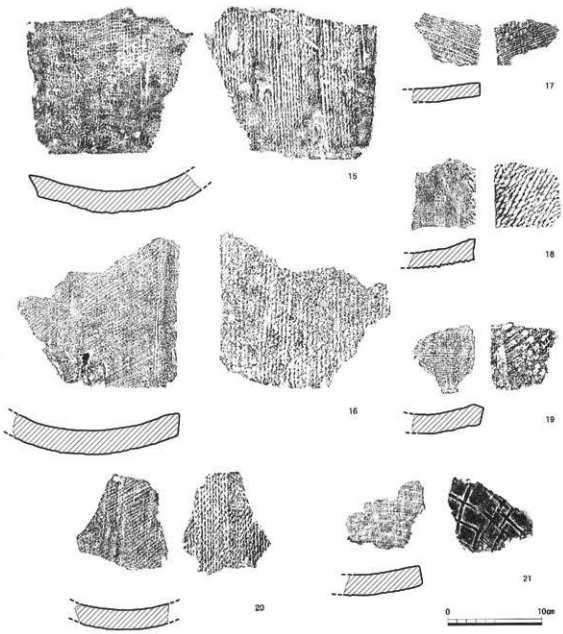


図13　平瓦拓影・実測図（1：4）

14は小型の丸瓦である。凹面はやや粗い布目で、継ぎ目がある。凸面縄タタキ後ヨコナデ。玉縁部はナデ、側面ナデ。

9・12は延石直上の埋土から、10・11・14は瓦溜16から、13は包含層から出土している。

平瓦（15～21）　15は凹面やや粗い布目、凸面縄タタキ。凸面には指の跡がいくつか見られる。側面はケズリ。16は凹面は布目、糸切り痕が明瞭に残る。凸面は縄タタキで離れ砂が付着している。側面ケズリ。今回の調査では15・16の平瓦が最も多く出土している。15・16とも胎土には少量の砂粒を含むも緻密である。

17は凹面に糸切り痕が明瞭に残。凸面は斜格子状のタタキ・側面はケズリ。胎土はほとんど砂を含まず、焼成も良好である。18は凹面は細かい布目、凸面は粗い斜め縄タタキ。胎土は砂粒をほとんど含まず、焼成も良好である。19は、地覆石抜き取り痕から出土した平瓦である。凹面は

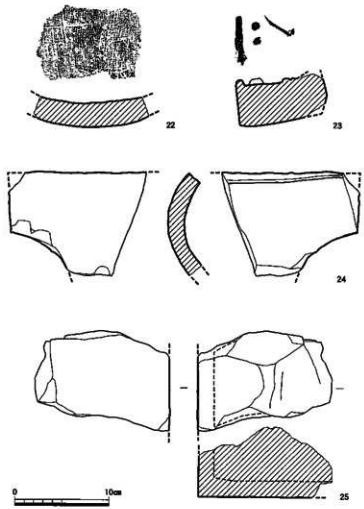


図14　記号瓦・鬼瓦・面戸瓦・塼拓影・実測図（1：4）

やや粗い布目、凸面は斜格子文のタタキ、側面はケズリ。胎土は極細砂粒を少量含んでいる。焼成はやや軟質である。平安時代中期の瓦と考えられる。

20は、凹面細かい布目で糸切り痕が明瞭に残る。凸面縄タタキ。胎土は粗い砂粒を少量含む。21は、凹面細かい布目、凸面は粗い斜格子文タタキである。側面はケズリ。胎土には粗い長石粒を多く含む。九州系瓦か。平安時代中期。

15・16・21は包含層から、17は延石裏込め土から、18は瓦溜16から、20は延石外側の化粧土から出土している。

記号瓦（22）　22は平瓦で凹面布目、凸面はヘラケズリ。胎土は砂粒をほとんど含んでいない。凹面にヘラで「＋」と記されている。包含層から出土した。

鬼瓦（23）　23は鬼瓦で、脚部の左珠文帯である。唐草文がわずかに残る。側面はハケ目とケズリ、裏面はナデ。胎土は砂粒を少量含むが緻密。平安時代前期。瓦溜16から出土。

面戸瓦（24）　24は面戸瓦である。焼成後の丸瓦を打ち欠いている。現場で調整しながら成形したものと考えられる。凹面には粗い布目、凸面には平行斜線文のタタキ後、ケズリ。凹面右端は面取りがされている。側面には刃物の引き上げ痕と割り放しの痕跡が見られ、胎土には長石粒が多量に確認できることから九州系瓦である。瓦溜16から出土している。

塼（25）　25は型作りの塼である。片面と側面の一部に平坦な面が残っている。型に沿って粘土を詰め、その中に粘土塊を入れている。表面、側面ともにヘラケズリ。延石直上の埋土から出土している。

（2）土器類（図15）

26は古墳時代の土坑45から出土した布留式期の高杯である。脚部外面ケズリ。27は平安時代前期の須恵器甕口縁部である。瓦溜16から出土した。

28・29は土師器皿の細片である。延石外側の化粧土内に礫、瓦片とともに含まれており、昌福堂の変遷を探るうえで重要な資料となる。それぞれ小破片のために口径は復元できないが、口縁部が外上方に湾曲しながら立ち上がり、端部は肥厚し、上方に立ち上がる。9世紀後半から10世紀初頭に比定できるものである。

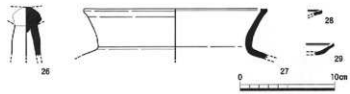


図15　土器実測図（1：4）

（3）石製品（図16）

30は火打ち石である。包含層から出土した。石材はチャートで角は磨耗し、稜部分に擦痕が多数認められる。長辺4.0cm、短辺3.4cmである。江戸時代のものと考える。

図16　石製品

4．ま と め

今回の調査では、初めて平安宮朝堂院昌福堂の遺構を確認できた。確認したのは壇上積基壇の最下部を構成する延石、裏込め土、地覆石掘形、地覆石抜き取り痕、基壇盛土、整地層、化粧土である。延石は全て凝灰岩である。延石は厚みが幅々に違い、上面を揃えるために地山を掘り込んで据えるもの、延石の下に土を入れるもの、ほぼ地山に据え置くものとがある。延石の厚みが違うことは、別の場所（長岡宮か）から転用しているものと考える。

朝堂十二堂の内、基壇を確認したのは延禄堂、修式堂、承光堂、明礼堂、暉章堂に次いで6堂目であるが（図17）、発掘調査で確認したのは今回が初めてである。

ここでは、今回の調査で判明したことと、今後の課題について述べる。

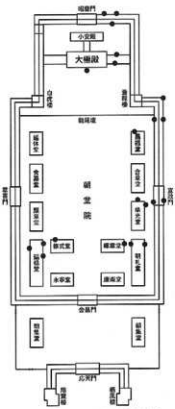


図17　朝堂院遺構検出位置図

（1）昌福堂の規模

これまでの調査成果から、朝堂院の復元案も示されているが、[11] 陽明文庫本『宮城図』（図18）が示す昌福堂の建物規模を表す数値は柱間の数であって、具体的な数値はわからなかった。

これまでの調査で、朝堂院十二堂の建物の内、基壇の北縁を確認しているのは、東西方向の西第五堂修式堂北縁、南北方向

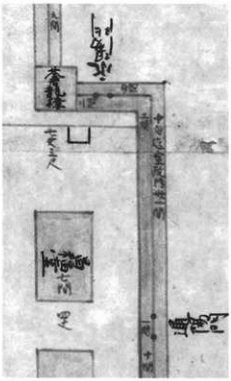


図18　陽明文庫本『宮城図』
に描かれた昌福堂（陽明文庫所蔵）

の東第三堂承光堂北縁の２箇所である（図17）。しかし、『宮城図』に延禄堂・修式堂・暉章堂・明礼堂の北縁が一直線上にそろって表現されていることから、修式堂の延長線上に位置する東第四堂明礼堂北縁の位置が推定できる。また、『宮城図』には南北方向の堂の間が四丈との記載があることから、承光堂の北縁と明礼堂の北縁から四丈分を引くことによって承光堂の南北幅がわかる。さらに、承光堂と同じ九間とされる東第二堂含章堂の北縁も推定できる。同様の手順で、昌福堂の基壇が南北十丈九尺（約33m）であることがわかった[12]。昌福堂の北縁を確認できたことによって、西第一堂である延休堂の北縁も確定できる。また、『宮城図』には、昌福堂北縁より、龍尾壇に至るまでが七丈三尺との記載があることから、龍尾壇のより正確な位置を推定できる。

七間の建物である昌福堂の規模は南北十丈九尺（約33m）とした。ここに一つの疑問が生ずる。昌福堂の南に位置し、九間の建物と記載される含章堂、承光堂は、計算上では南北が十二丈九尺（約39m）となる。各堂とも基壇端から建物までの控えが同じであるとすれば、柱間の距離に違いが見られるのである。つまり、昌福堂の建物の柱間が広くなる可能性が高くなる。ここで注目したいのが、前期難波宮朝堂院と、平城宮第二次朝堂院地区の下層遺構である。前期難波宮では、東西第一堂・第二堂の梁行が他の堂より一間分長い。また、平城宮では、東西の第一堂のみ四面庇の建物であり、庇がない他の堂と違いが見られる。つまり、朝堂院の建物の中でも第一堂の建物には明確な区別が存在していたのである。

昌福堂の柱間が広いとするならば、東西第一堂のみ建物に違いがある可能性も指摘できる。しかし、平安宮へと続く長岡宮、後期難波宮、平城宮第二次朝堂院地区上層遺構では、第一堂と他の諸堂とに柱間と建物構造に違いは見られない。また、今回の調査で建築部材を転用していることが明らかになっており、凝灰岩とともに建物部材も転用していると考えられる。

これまでに平安宮朝堂院の調査で建物の痕跡は見つかっていない。さらに基壇の長辺の両側を発掘調査で確認できていないことから、推測の域を出ない。今後の調査の検討課題としたい。

（２）緑釉瓦について

今回の調査では、緑釉瓦が多量に出土した。最も多く出土した場所は延石の直上の埋土である。破片の点数でみると149点中22点が緑釉瓦であった。瓦は大量で重量があるために、離れた場所に廃棄することは少ないと考えられることから、使用していた場所は近辺に求められる。総瓦葺きであった朝堂院内の調査では、大量の瓦の廃棄土坑が確認されている。では、昌福堂に緑釉瓦

が使用されていたのだろうか。

現在、緑釉瓦が朝堂院内で確実に使用されていると判断されているのは、大極殿のみである。大極殿周辺が最も緑釉瓦の出土量が多いことが明確に示している。1979年に、丸太町通から南に街路一筋ずつのガス管埋設に伴う立会調査が行われている[13]。それによると、調査区の前面道路の瓦溜には緑釉瓦が多量に含まれているが、二筋目以南で検出した瓦溜には緑釉瓦の出土例は報告されていない。以上のことを踏まえると、今回出土した緑釉瓦は大極殿で使用された瓦であると判断される。

(3) 基壇の構築順序について

断面観察から、昌福堂基壇の構築順序を考えると、1．基壇の盛土。2．延石裏込め。3．延石を据えるために地山の掘り込みや土を入れて嵩上げ等を行う。4．延石を据える。5．地覆石掘形。6．延石外側整地層となる。延石の裏込め土は固く締まった褐色粘質土である。裏込め土と地覆石掘形には凝灰岩片が多数含まれ、現地で調整しながら延石、地覆石を据えていることがわかる。また、延石を据えた後に外側の地山を掘り込んで整地し、さらに礫を含んだ化粧土を入れている。今回の調査からは、基壇を作り替えた明確な痕跡は確認できなかったが、延石外側に9世紀後半から10世紀初頭の土器を含んだ土で化粧していることから、同時に作り替えが行われた可能性は十分考えられる。

(4) 昌福堂の廃絶年代について

延石より上部は存在しなかったが、地覆石の抜き取りの痕跡は確認できた。抜き取り痕からは瓦が出土しているが小破片であるために、詳しい年代は不明であるが平安時代中期の瓦と考えている。しかし、延石と地覆石抜き取り痕を覆う埋土には瓦が多量に含まれており、平安時代前期と中期の瓦しか出土していない。後期の瓦は認められなかった。このことは重要な意味をもっていると思われる。

では、文献で昌福堂の消長を見てみたい。大極殿を含む朝堂院は、平安宮内で最も重要な建物であり、国家の中枢であることから、内裏に次いで建設が急がれた施設である。前述したように延暦十五年（796）正月には、大極殿において桓武天皇が朝賀を受け[14]、翌延暦十六年（797）に朝堂院にて射礼を行っている[15]ことから同年中には完成していたと思われる。昌福堂が文献に初めて見えるのは朝堂院東一殿と記される大同三年（808）であろう[16]。また、昌福堂は宮廷儀式を記した『貞観儀式』にその名が見え、天皇即位の儀式の際などに使用されていたことがわかり[17]、西面に三箇所の階段があり、西面に土庇があったことも記されている。その後、貞観十八年（876）に朝堂院が火災を受けるが、昌福堂は焼け残ったと思われる[18]。

また、正月に朝堂院で行われた御斎会では昌福堂は重要な役割を果たしている。御斎会では昌福堂は布施堂として使用されていた[19]。また、雨天の際は布施堂は大極殿の後殿である小安殿が使用されたとある[20]。平安時代中期以降の昌福堂関連の記載は、ほとんどが御斎会に関わるものであ

る。11世紀前半に記された『北山抄』においても御斎会にて布施堂は昌福堂であるとの記載がある。[21]

しかし、12世紀初頭に記された御斎会の記事では、雨天の記載がないにも関わらず、小安殿が布施堂として使用されている。[22]12世紀後半に描かれたとされる『年中行事絵巻』巻七「御斎会」においても、昌福堂は描かれていない。12世紀の御斎会に昌福堂が使用されない理由は不明であるが、理由として考えられることは、昌福堂が既に廃絶していた可能性が挙げられる。『北山抄』に書かれていても、建物は既に廃絶していることも考えられるが、長元七年（1034）に大風で東三堂承光堂、東第六堂康楽堂が倒壊した際、諸国に割り当てて修繕が命ぜられていることから、[23]11世紀前半には昌福堂も維持管理されていたと考えてよい。

その後、朝堂院は天喜六年（1058）に火災で焼失する。この火災で大極殿を始め、朝堂院は残すところ応天門と左右の楼閣のみであるとされるものである。[24]

これは先述したように、昌福堂延石の直上埋土から後期の瓦が出土していないことに当てはまる。また、出土した瓦には二次焼成熱を受けて変色しているものも多く見られた。つまり、延暦十六年以降、朝堂院第一堂として存在した昌福堂は天喜六年（1058）をもって廃絶した可能性が高い。その後大極殿や回廊などは再建され、治承元年（1177）の太郎焼亡まで存続するが、朝堂院十二堂は再建されなかったと考えられる。

今回の調査では、これまでの調査成果と合わせ朝堂院十二堂の建物配置、規模がより明確になったといえるが、今後の検討課題も多い。市街地化している京都の調査では、調査面積は狭く点と点を繋ぐものである。そのためにも詳細な調査と記録が必要であることを痛感する。

なお、遺構は京都市文化財保護課の指導と地権者の御理解によって現地保存できることとなった。また、今回の調査では多くの方のご指導を受けた。末筆ながら併せて謝意を示したい。

註

1） 辻　純一「朝堂院の復原」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

2） 『日本後紀』大同三年十月廿二日条

3） 『貞観儀式』巻九　朝堂儀条　『延喜式』巻一八　式部上朝堂座条

4） 『延喜式』巻三八　掃部寮御斎会条、『貞観儀式』巻五　正月八日講最勝王経儀

5） 鈴木久男「平安宮豊楽院（1）」『平安宮跡発掘調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年

6） 『平安宮・平安京跡　ガス管工事に伴う立会調査』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所1979年

7） 『木村捷三郎収集瓦図録』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

8） 「平安宮内裏内郭回廊推定地の調査」『平安博物館研究紀要』第3輯　1971年

9） 註7に同じ

10） 註7に同じ

11） 註1参照

12) 註6の調査で朝堂院東第四堂明礼堂の東西縁の延石を確認しており、基壇の東西幅は五丈八尺（約18m）であることが判明している。

13) 註6参照

14) 『類聚国史』巻七一　延暦一五年　正月条

15) 『日本後紀』延暦十六年　正月十七日条

16) 『日本後紀』大同三年　十月廿二日条

17) 『貞観儀式』巻五　天皇即位儀式条

18) 『三代実録』貞観十八年　四月十日条
この夜12時頃、大極殿、小安殿、蒼龍・白虎楼、延休堂及び北門、北・東・西面の回廊百余間が焼けて、火は数日消えなかったとある。

19) 『延喜式』巻三八　掃部寮御斎会条、『貞観儀式』巻五　正月八日　講最勝王経儀

20) 『西宮記』恒例第一　正月御斎会・勘物

21) 『北山抄』巻第一　年中要抄上正月御斎会終事

22) 『江家次第』巻第三　正月丙御斎会

23) 『左経記』長元七年　八月条

24) 『定家記』天喜六年　二月廿六日条

参考文献

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

『平安京提要』　角川書店　1994年

福山敏男『大極殿の研究』　平安神宮　1955年

『大極殿関係史料（稿）（一）儀式書編』　独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所　2003年

Ⅱ　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

1．調査経過

今回の調査は、京都市中京区聚楽廻西町80番地に所在した建物が解体され更地になったことを機に、対象地南側に史跡平安宮豊楽殿跡が存在することから、遺跡の確認を目的として行った発掘調査である。調査地は、平安宮豊楽院清暑堂と豊楽殿北廊（以下北廊）跡に相当する。1987年の豊楽殿跡の調査で、北廊は豊楽殿北面中央階段を壊して造られていることがわかり、豊楽殿創建当初には存在していなかったことが明らかになっている。今回の調査では、清暑堂と北廊の取り付き部分を明らかにすることを主眼の一つとした。また、古墳時代から奈良時代の集落跡である鳳瑞遺跡の範囲内でもある。なお、対象地は調査前から道路路面よりも数十cm盛り上がった状態が観察できたことから、遺構が良好に残存していることが予想された。

調査区は、清暑堂南縁と北廊の残存状況と取り付き部分を確認することを目的に、最大東西幅約23m、南北幅約11mのL字形に設定した。面積は約176㎡である。始めに重機で遺構面まで掘削を行い、浅いところでは地表下約5cm、深いところは約40cmで江戸時代と平安時代の遺構を確認できたため、人力掘削に切り替えて調査を行った。調査の結果、江戸時代の土取穴で一部削平を受けていたが、清暑堂南面西階段の凝灰岩、壇上積基壇南縁の凝灰岩抜取溝、北廊の基壇盛土、

図19　調査位置図（1：2,500）

図20　調査区配置図（1：500）

雨水受けと考えられる塼敷きなどを確認した。都市化が進む平安宮跡において、遺構の残存状況が良好であることから、広報発表を行い、平成19年9月22日に現地説明会を開催（参加者約400名）し成果の公表に努めた。

これらの遺構は京都市文化財保護課の指導により、保存することとなった。写真撮影・測量などの記録作業を行った後、北廊基壇盛土の堆積状況の確認などを行うため、3箇所に断割を入れ、土層の観察・記録作業を行った。北廊基壇盛土は版築による堆積が一部に観察できたことから、ポリウレタン系接着剤による断面の剥ぎ取りを行った（図23）。また、凝灰岩の一部には風化による剥離が見られたため、シアノアクリレート系接着剤と硬化促進剤によって接着を行った（図24）。埋め戻しの際は、壁面と断面は土嚢で覆い、凝灰岩と塼には不織布を敷いて砂嚢で覆った。また、

図21　調査前全景（西から）

図22　作業風景

図23　土層剥ぎ取り状況

図24　凝灰岩修復作業

図25　埋め戻し状況（東から）

図26　埋め戻し状況（東から）

清暑堂と北廂の基壇盛土が残存している場所は真砂土で覆って保護して埋め戻しを行い（図25・26）、全ての調査を終了した。

2．位置と環境

（1）位置と歴史的環境

平安宮は京都盆地の中でも、最も高燥な場所に立地している。船岡山から延びる台地の先端であり、数十万年前に堆積した地層で構成されている。また、数万年間河川の影響を受けておらず、洪水の心配がない最も地盤の安定している場所でもあった。[2]

古代都城の中でも、豊楽院は平安宮特有のもので天子の宴会の場とされ、[3] 朝堂院の西側に造営された。ここで行われた儀式には正月元日の節会、七日白馬の節会、十六日踏歌の節会、十七日大射の節会、十一月新嘗祭・大嘗祭の際の豊明節会などがある。清暑堂は、豊楽殿後房、後堂、豊楽殿小安殿とも呼ばれ、平安時代前期には豊楽殿に天皇が出御する際の控えの場として使用されていた。中期以降、儀式の整備が進むにつれ、多用な機能を持つようになり、大嘗祭の巳の日には天皇は清暑堂に出御し、夜通し神楽が行われている（清暑堂御神楽）。北廂は清暑堂神楽の際には公卿の座が設けられたとされる。[4]

豊楽院の完成については判然としない。延暦十八年（799）に渤海使を臨見した白馬の節会の際に、豊楽院が未だ完成していないため大極殿前に仮殿を造ったとある[5]。豊楽院が使用された事が初めて文献に現れるのは平城天皇の大嘗會、大同三年（808）である[6]から、この年までには完成していたことがわかる[7]。その後、大嘗會を除く儀式は内裏などで行われるようになり、康平六年（1063）の大火により焼失、その後再建されることはなかった[8]。豊楽院を含む平安宮域は鎌倉時代後半以降、内野と呼ばれ荒れ野となり、室町時代には度々戦場となった。今回の調査区でも中世の遺構は存在せず、生活の痕跡は見受けられなかった。周辺一帯の土地利用が再開されるのは豊臣秀吉によって聚楽第が築かれて以降である。当地では江戸時代に至り、土取のために穴が掘られ、その後京都所司代関連の建物の一角として近世を迎えたものと見られる。

（2）周辺の調査

豊楽院は、朝堂院が建物配置や規模が明らかになってきていることと比べれば、不明な点が多い。調査地周辺ではこれまでに発掘調査・試掘調査・立会調査が実施されている。大半の調査報告は当研究所から刊行された『平安宮Ⅰ』に掲載されているため、ここでは、今回の調査に関連する主な調査成果のみを取り扱うこととする。

発掘調査で初めて豊楽院跡を確認したのは古く、1928年のことである。丸太町通の市電敷設工事に伴う緊急発掘調査で、建物基壇化粧と考えられる凝灰岩列を２箇所確認している。当時は資料が少なく、豊楽院に関連した凝灰岩であるとの認識はあったが、殿舎の特定はできなかった[9]。しかし、後年当時の地籍図から、基壇跡は不老門南東角延石・地覆石と清暑堂北縁延石と推定されている[10]。また、1976年には豊楽殿の基壇ならびに礎石根固め跡を確認し、豊楽殿の遺構が良好に依存していることが明らかとなった[11]。この調査を踏まえ、1987年に豊楽殿跡で実施された発掘調査（図20）では、豊楽殿北西部の基壇盛土と凝灰岩切石を用いた壇上積基壇、礎石根固めを５箇所、豊楽殿に取り付く北廊部分などが確認された[12]。北廊は豊楽殿北面中央階段を壊して造られており、豊楽殿創建当初に存在しなかったことがわかった。1976年の調査成果と照らし合わせると、豊楽殿の建物規模は桁行９間、梁行４間で、柱間寸法は身舎桁行１間15尺、梁行１間14尺、庇の出が13尺、基壇端から建物までの控えは11尺であることがわかった。また、豊楽院の中軸線を割り出すことが可能となり、豊楽院の規模もほぼ明らかとなった。1988年には豊楽殿の北に位置する清暑堂跡の発掘調査（図20）が実施され、後世にかなりの削平を受けていたものの、わずかに基壇版築土層と礎石の根固め跡を確認している[13]。

3．遺　構

（1）基本層序と遺構の概要（図27、表3）

当調査地は、調査前の状況が周辺道路よりも盛り上がっており、調査地南側では、厚さ数cmの現代整地層を剥ぐと北廊基壇盛土が残存していた箇所もある。基本層位は、調査区全体に5～50cmの現代整地層がある。調査地北側の清暑堂基壇盛土が残存している場所では、現代整地層は10～30cmである。以下一部に近世整地層が存在するが、GL-20～40cmで基壇盛土最下層である黒褐色粘質土があり、GL-35～50cmで聚楽土と呼ばれる黄褐色粘質土の地山である。調査地南側では、北廊盛土下層に西から東へ開析谷が存在し、南肩は調査区外に広がっている。

遺構は平安時代以前、平安時代、江戸時代の大きく3時期があるが、中世の遺構が見られないのは、周辺の調査結果と同様である。

（2）平安時代以前の遺構

落込み51（図28、図版7－2）　調査区南側、北廊の下層で確認した。平安京造営以前から存在した旧地形の谷である。調査区北側では黄褐色粘質土の地山を確認しており、西から東に開析する。江戸時代の溝、土取穴の壁から北肩は確認できたが、南肩は確認できなかった。しかし南側で行われた豊楽殿跡の調査では確認されていないことから、南側に接する道路（旧丸太町通）下に南肩が位置するものと思われる。平安時代の遺構の保存が決定したことから、底は確認できなかったが、掘削した最も深い場所で約1.8mであった。幅は6m以上あるものと思われる。埋土からは遺物がほとんど出土していないが、断面観察から自然堆積ではなく、全て人為的な埋土であり、豊楽院造営の際に埋め立てられて整地されたと考えられる。この周辺から古墳時代後期の須恵器が数点出土していることから、この頃にはすでに存在していたと考えられる。

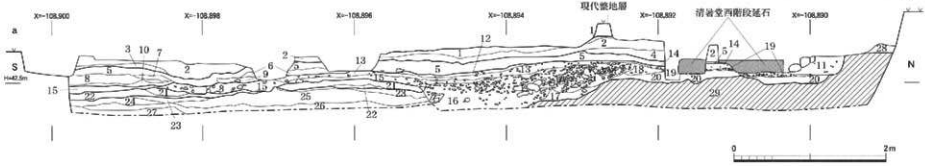
（3）平安時代の遺構（図28、図版6－1）

調査地が豊楽院の一部として活用されていた時期である。

調査の結果、清暑堂と北廊の遺構が江戸時代の土取穴に破壊されているものの、遺存していることを確認した。清暑堂の遺構としては、基壇盛土、壇上積基壇南縁の凝灰岩抜き取り溝である

表3　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代以前	落込み51	谷状地形
平安時代	基壇盛土、階段、凝灰岩列、壇敷き、溝21、柱穴47、溝48、土坑49・50	豊楽院清暑堂、北廊に伴う遺構
江戸時代	柵1、溝2、土坑1・7・15・17 土坑24・25・31・32など	柵1、溝2は京都所司代組屋敷に関連する遺構の可能性あり



※江戸時代の溝２の西壁面を投影した図

北廂Ⅲ期盛土	1	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土。白色砂粒多量に含む、φ1～3cm礫少量含む
	2	10YR3/3 暗褐色粘質土。φ3～5cmの礫中量含む
	3	10YR5/2 灰黄褐色粘質土。φ3cm以下の礫少量含む
	4	10YR2/2 黒褐色粘質土。黄褐色粘質土をブロック状に少量含む、φ3cm以下の礫少量含む
北廂Ⅱ期盛土	5	10YR6/6 明黄褐色シルト。黒褐色粘質土をブロック状に微量含む
	6	10YR5/2 灰黄褐色粘質土。黄褐色粘質土をブロック状に含む
	7	10YR3/3 暗褐色粘質土。黄褐色粘質土をブロック状に少量含む
	8	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土。φ5cm以下の礫少量含む
	9	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土。凝灰岩片中量含む
	10	10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土。黒褐色粘質土をブロック状に少量含む
土坑50	11	10YR3/1 黒褐色粘質土。凝灰岩片中量に含む、φ3～5cmの礫少量含む、黄褐色粘質土をブロック状に少量含む
北庭Ⅰ期整地層	12	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土。凝灰岩片少量含む
	13	10YR4/2 灰黄褐色砂質土。凝灰岩片少量含む
	14	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土。凝灰岩小片少量含む
	15	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土。黄褐色粘質土をブロック状に中量含む、凝灰岩片中量に含む
凝灰岩ゴミ捨て穴	16	10YR2/3 黒褐色粘質土。凝灰岩大小片極めて多量に含む、黄褐色シルトブロック状に含む
	17	10YR5/6 黄褐色シルト。黒褐色粘質土をブロック状に中量含む、凝灰岩片少量含む
延石抜形	18	10YR3/2 黒褐色粘質土。黄褐色粘質土をブロック状に少量含む
	19	10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土。凝灰岩片極めて多量に含む、黒褐色粘質土ブロック状に少量含む
延石根固め	20	10YR4/4 褐色粘質土。黒褐色粘質土をブロック状に少量含む
調査直前整地層	21	10YR2/3 黒褐色粘質土
	22	10YR2/3 黒褐色粘質土。黄褐色粘質土をブロック状に少量含む、φ5cm以下の礫少量含む
落込み51（客土）	23	10YR2/2 黒褐色粘質土。φ3cm程度の礫中量含む
	24	10YR3/3 暗褐色粘質土。φ3cm以下の礫中量含む
	25	10YR3/3 暗褐色粘質土。φ0.5～3cmの礫中量含む
	26	10YR2/2 黒褐色シルト
	27	10YR2/2 黒褐色シルト
清浄堂基壇盛土	28	10YR3/1 黒褐色粘質土
地山	29	10YR5/6 黄褐色粘質土

図27　北廂縦断面図（1：50）

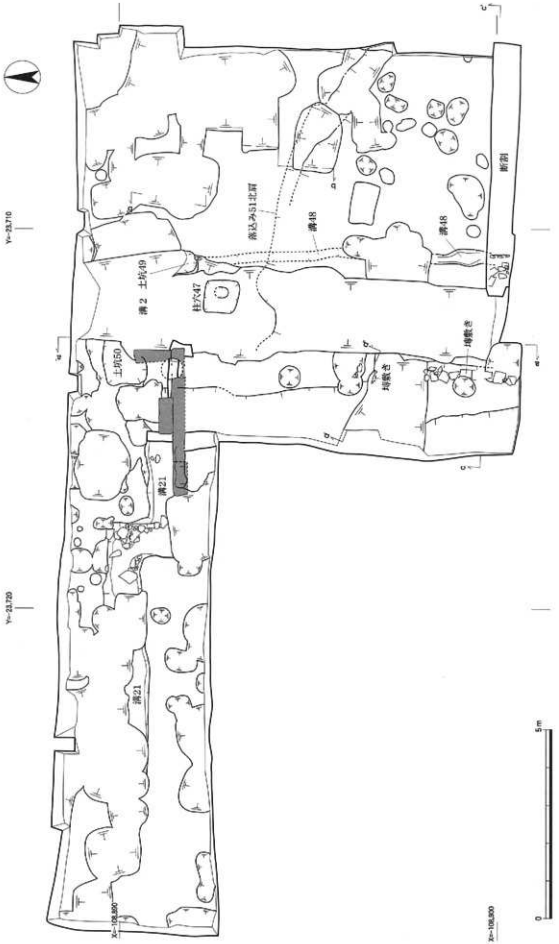
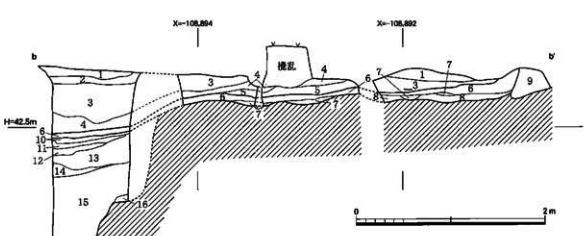


図28　遺構平面図　平安時代（1：100）



北廊盛土	1	10YR2/3 黒褐色粘質土、φ5cm程度の礫少量含む
	2	10YR4/4 褐色粘質土、凝灰岩片・φ3～5cmの礫中量含む
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫、φ1～3cmの礫多量に混じる、凝灰岩片少量含む
	4	10YR4/4 褐色粘質土、凝灰岩片中量含む
	5	2.5Y3/1 黒褐色粘質土、黄褐色粘質土を帯状に含む
創建直前整地層	6	10YR2/3 黒褐色粘質土
	7	10YR4/2 灰黄褐色シルト、黄褐色シルトをブロック状に少量含む
	8	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
清暑堂基壇盛土	9	10YR3/1 黒褐色粘質土、非常に固く締まる
落込み51（客土）	10	10YR3/4 暗褐色シルト、黄褐色シルトブロック状に中量含む
	11	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、φ3～5cmの礫中量含む
	12	10YR3/3 暗褐色シルト
	13	10YR2/1 黒色シルト、φ5cm程度の礫微量に含む
	14	10YR2/2 黒褐色シルト
	15	2.5Y2/1 黒色シルト～10YR3/1 黒褐色シルト、黄褐色シルトをブロック状に少量含む
	16	10YR3/2 黒褐色シルト質粗砂

図29　落込み51・北廊・清暑堂断面模式図（1：40）

溝21と南面西階段を確認した。北廊の遺構としては、基壇盛土、雨水受けと考える塼敷きを確認した。

1）清暑堂（図27～32・44、図版6～10）

基壇盛土　地山である黄褐色粘質土の上に固く締まった黒褐色粘質土を確認した。残存している厚さは最大で約30cmである。盛土は1988年の調査で確認されているように版築で造成されていると考えられるが、確認できた盛土は1層のみである。遺物や凝灰岩片は出土していない。溝21の外側には広がらないことから、基壇盛土と判断したが、地山の一部が残っていた可能性も考えられる。

南面西階段（図30・31、図版8・9）　凝灰岩の延石と階段1段目である踏石を確認した。延石、踏石ともに地山を掘り込んで据えられている。延石は長さ92cm以上、幅35～37cm、厚さが18～20cmで、合計5石確認した。踏石は長さ95cm、幅40cm、厚さ31cmで、1石分残っており、延石と組み合わさった状態で検出した。組み合わせの部分には切り欠きが設けられている。延石と踏石の平面に残る組み合わせ部分は風化が進んでいない。踏石には2段目の踏石を積む際の基準とするために線状の切り込みが認められる。踏石の蹴上げ高は27cm、踏面は33cmである。踏石の小

図30　凝灰岩小口工具痕跡拓影（1：5）

口には調整時に使用した工具の痕跡が明瞭に見られる。

階段の規模は、現存する凝灰岩やその抜き取り穴（溝）から推測して、東西5.2m、張り出し1.5mである。階段幅は豊楽殿と同じである。なお、基壇本体と西階段部分の盛土が一連であることから、両者は同一工程で構築されたことがわかる。

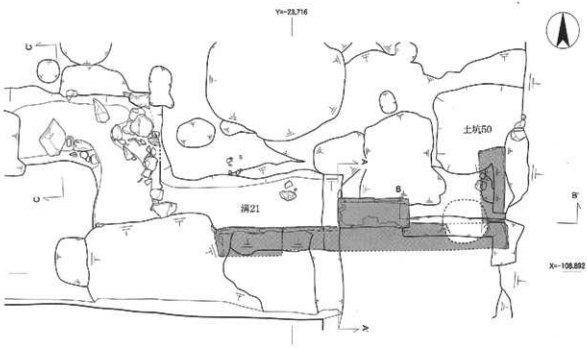
また、延石と踏石には同じ凝灰岩でも色調に違いが見られ、延石には松脂石と呼ばれる黒色のガラスを多量に含有しているが、踏石には全く見られず、綺麗な白色を呈している。ほとんどが地中に埋まる延石と露出する踏石で意識的に違いを持たせていることも考えられよう。

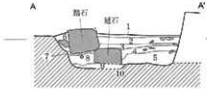
溝21（図31、図版8－1）　南面西階段の一部と壇上積基壇の化粧である凝灰岩を抜き取った痕である。確認した長さは約8.5m、深さ約0.4mで、埋土には抜き取る際に割れた大小様々な凝灰岩片を含んでいる。中には、四面に加工痕が残る切石も存在する。出土した遺物は細片が多いが土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器などがある。京都Ⅰ期新～Ⅳ期中段階までの遺物が含まれ、9世紀前半から11世紀中葉に比定することができる。これは、ほぼ豊楽院の存続期間と一致する。

土坑49（図版10－2）　清暑堂南面中央における北縁との接続部基壇の凝灰岩抜き取り痕である。江戸時代の土取穴と溝2に削平されているが、長さ0.6m以上、深さ0.3m以上ある。埋土には多量の凝灰岩片を含んでいる。西階段南端と延石掘形の底の高さが同じであることから、抜き取り痕と判断した。

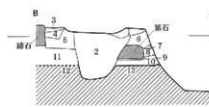
土坑50（図31）　南縁基壇の凝灰岩抜き取り痕である。掘削は行っていないが、長さは1.2m以上あり、断面観察から深さは約0.25mある。溝21の北端の延長線上に位置し、底部の高さも同じである。埋土に凝灰岩片が多量に含まれていることが確認できたことから、抜き取り痕であると判断した。詳細な年代は不明であるが、溝21とは時期差があると考えられる。北廊の構築と関わることであるので、詳細は後述する。

柱穴47（図32）　江戸時代の溝2の底部で検出した柱穴である。上部は削平されている。掘形は一辺約0.9mの隅丸方形を呈し、深さは最も遺存する東端で約0.6mある。柱痕跡は直径約0.3mの円形を呈する。遺物は出土しなかったが、形状と土層の重複関係から、平安時代前期のものと考える。清暑堂が造営される前の仮殿の掘立柱建物の柱穴の可能性もあるが、想定する清暑堂の柱筋と一致しない。清暑堂造営に伴う足場作業用の柱穴の可能性も考えられる。





1 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土，白色砂粒種めて多量に含む（北廓Ⅱ期化粧土）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土，瓦片・土師器片少量に含む，土師器細片中量含む（北廓Ⅱ期整地層）
3 10YR3/4 暗褐色粘質土，瓦片・土器片中量含む（北廓Ⅱ期整地層）
4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土，凝灰岩小片少量に含む，瓦片少量含む（新造時整地層）
5 10YR3/2 黒褐色粘質土，黄褐色シルトをブロック状に多量に含む（延石掘形）
6 10YR3/2 黒褐色シルト，凝灰岩片をブロックで含む（階石面込め）
7 10YR4/2 灰黄褐色粘質土（階石掘形）
8 10YR3/2 黒褐色シルト（延石面込め）
9 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土，黄褐色シルトをブロック状に少量含む（延石根固め）
10 10YR6/6 黄褐色粘質土（地山）



1 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質土，黒褐色粘質土を帯状に含む，凝灰岩片を少量含む（盛土造構）
2 10YR2/2 黒褐色粘質土，土師器片・凝灰岩片を少量含む（石戸柱穴）
3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土，白色砂粒種めて多量に含む（北廓Ⅱ期化粧土）
4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土，瓦片，土師器片少量に含む（北廓Ⅱ期整地層）
5 10YR3/4 暗褐色粘質土，瓦片，土師器小片中量含む（北廓Ⅱ期整地層）
6 10YR3/3 暗褐色粘質土，瓦片，土師器片中量含む（北廓Ⅱ期盛土）
7 10YR6/6 明黄褐色シルト，黒褐色粘質土をブロック状に微量に含む（北廓Ⅱ期盛土）
8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土，凝灰岩小片少量に含む，瓦片少量含む（2健時整地層）
9 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土，凝灰岩片種めて多量に含む，黒褐色粘質土ブロック状に含む（延石掘形）
10 10YR4/4 褐色粘質土，黒褐色粘質土をブロック状に少量含む（延石根固め）
11 10YR3/2 黒褐色シルト（延石面込め）
12 10YR5/6 黄褐色粘質土（地山）

1 10YR3/4 暗褐色砂質土，凝灰岩，瓦片多量含む（溝21）
2 10YR3/2 黒褐色シルト，黄褐色砂質をブロック状に少量含む（凝灰岩掘形）
3 10YR3/1 黒褐色粘質土，凝灰岩，瓦片中量含む（溝岩盤基壇盛土）
4 10YR5/6 黄褐色粘質土（地山）

図31　西階段・溝21実測図（1：50）

2）北廊（図27～29・33～35・44、図版7－1・10・11）

北廊の基壇盛土は良好に遺存していた。北廊の構築順序と年代決定のための遺物採取を目的として、調査区南端に断割を行った。その結果、遺物は瓦片、凝灰岩片を確認した。具体的な年代を表す遺物は含んでいなかったが、断面観察により、北廊には2度にわたる作り替えが行われたことを確認した。以下、順にⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期として記述する。

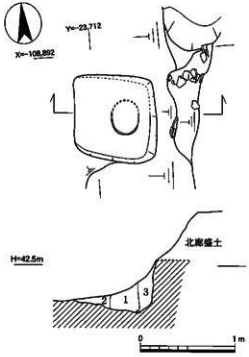
北廊Ⅰ期（図33・34）

基壇盛土　北廊創建当初の基壇である。西端を確認した。東端は調査区外であるが、豊楽院の中軸線が明らかになっていることから、幅は約6.4mの1間分であろう。高さは約0.6mである。長さは清暑堂推定南縁から、豊楽殿北縁までの間で約30mある。

断面観察から判明した構築順序は、まず、厚さ約0.1～0.3mの凝灰岩片を多量に含む層と全く含まない層との互層で蒲鉾状に土を盛り上げて、次に縁辺部に黒褐色粘質土を加えることによって、断面の形状は台形を呈する。盛土は土を盛り上げただけであり、版築で築かれてはいない。

基壇外装　台形状の盛土側面に丸瓦と平瓦を交互に貼り付けている。さらに褐色粘質土で瓦を覆っている。凝灰岩の基壇化粧石は確認できなかった。盛土の外側には瓦が堆積していた。雨水受けの可能性もあるが、敷き方に規則性は見られないことから、屋根から落ちた瓦とも考えられる。

基壇外装は、先述した土坑49壁面まで続いており、北廊Ⅰ期の基壇化粧と判断した。しかし、基壇の外装とするには貧弱な構造である。凝灰岩の痕跡はなかったが、北廊を拡幅する際に抜き取ったことも考えられ、凝灰岩化粧を施す前の仮化粧だけが残っている可能性もある。



1　10YR3/1 黒褐色粘質土、黄褐色粘質土をブロック状に中量含む
2　10YR5/6 黄褐色粘質土、黒褐色粘質土をブロック状に少量含む
3　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、黄褐色粘質土をブロック状に中量含む

図32　柱穴47実測図（1：40）

北廊Ⅱ期（図33・35、図版11）

基壇盛土　1間幅の単廊である北廊Ⅰ期を拡幅している。西端を確認した。西端は、清暑堂南面西階段の東端に接していることから、幅は約12mと考えられる。拡幅した基壇盛土は、断面図では不明瞭であるが、版築で築かれていることを確認している。版築の単位は約5～20cmとやや粗い。黄褐色粘質土と黒褐色粘質土を交互に積み重ねている。土層剥ぎ取りを行ったのはⅡ期の基壇盛土である。凝灰岩の基壇化粧石の痕跡は見られない。

塀敷き　基壇盛土西端に沿って塀が敷かれている。塀の大きさは一辺約25cm四方で厚さ約6cmある。塀は掘り込まれた溝の底に敷かれていたのではなく、盛土の端に据えられており、わずかに外

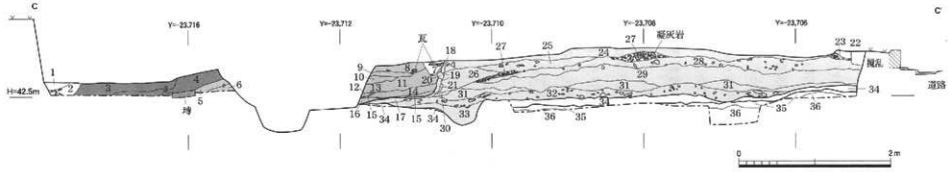


図33 北廓断面図（1：50）

溝埋土	1	10YR2/3 黒褐色粘質土
	2	10YR3/3 暗褐色粘質土、瓦片多量に含む
北廓Ⅲ期盛土	3	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、焼化物・土師器片少量含む
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
北廓Ⅱ期盛土	5	10YR3/3 暗褐色シルト
	6	10YR6/6 明黄褐色シルト、黒褐色粘質土をブロック状に散量に含む
溝48	7	7.5YR3/2 黒褐色砂質土、瓦片多量に含む
北廓Ⅱ期盛土	8	10YR4/2 灰黄褐色粘質土、黄褐色粘質土をブロック状に中量含む、凝灰岩片・瓦片少量含む
	9	10YR3/3 暗褐色粘質土、黄褐色粘質土をブロック状に少量含む
	10	10YR6/6 明黄褐色シルト、黒褐色粘質土と瓦片、凝灰岩片少量含む
	11	7.5YR3/1 黒褐色粘質土、黄褐色粘質土をブロック状に中量含む　凝灰岩片少量含む
	12	10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土、黒褐色粘質土をブロック状に中量含む
	13	2.5Y8/3 淡黄色粘土、帯状に堆積
	14	10YR3/1 黒褐色粘質土、黄褐色粘質土をブロック状に少量含む　凝灰岩片少量含む
	15	10YR5/3 にぶい黄褐色強礫砂
	16	10YR3/3 暗褐色粘質土、淡黄色粘土を帯状に含む
北廓Ⅰ期盛土	17	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
	18	10YR2/3 黒褐色粘質土
北廓Ⅰ期化粧土	19	10YR4/4 褐色粘質土
木の根跡？	20	10YR3/1 黒褐色粘質土
瓦貼り付け痕	21	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土
現代整地層	22	10YR4/2 灰黄褐色砂質土、凝灰岩片少量含む
	23	10YR3/3 暗褐色粘質土、凝灰岩片多量含む
	24	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土、凝灰岩片少量含む　5cm程度の礫中量含む
	25	10YR3/2 黒褐色粘質土、瓦片中量含む　5cm程度の礫中量含む
	26	10YR3/1 黒褐色粘質土
	27	2.5Y6/4 にぶい黄褐粘質土、凝灰岩片極めて多量に含む
北廓Ⅰ期盛土	28	10YR4/4 褐色粘質土、凝灰岩片中量含む　φ3～5cmの礫中量含む
	29	10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫、φ1～3cmの礫多量に含む
	30	10YR4/2 灰黄褐色粘質砂質土
	31	2.5Y7/4 淡黄色粘質土、凝灰岩片微量含む
	32	10YR4/4 褐色粘質土、凝灰岩片中量含む
	33	10YR4/4 褐色砂質土、φ1cm以下の礫中量含む
創建直前整地層	34	10YR2/3 黒褐色粘質土
落込み51（客土）	35	10YR2/3 黒褐色シルト、φ1～3cmの礫中量含む
	36	10YR2/1 黒色シルト、φ3cm程度の礫少量含む

北廓Ⅰ期
北廓Ⅱ期
北廓Ⅲ期

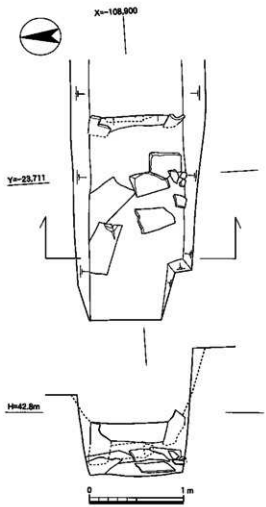


図34　北廊Ⅰ期側面実測図（1：40）

側に傾けている。墳敷きには修復の跡が見られ、割れた墳の代わりに瓦を敷いているものも見受けられる。墳の表面は風化が進んでおり、墳敷きは北廊Ⅱ期の雨水受けと考えられる。

北廊を拡幅したこの時期には、清暑堂の北廊Ⅰ期取り付き部から西階段東端までの基壇化粧は不要となることから、この時期に凝灰岩を抜き取ったもの（土坑49・50）と考えられる。

北廊Ⅲ期（図33・35）

基壇盛土　Ⅱ期の墳敷きを埋め、さらに清暑堂西階段の一部を壊して構築されている。西端を確認した。幅は約13.4mと考えられる。盛土に明確な段差は見受けられなかった。凝灰岩の基壇化粧の痕跡は見られない。この時期には、西階段の一部を埋めていることから、東西両階段の役割は果たしていなかったと思われる。

化粧土　基壇盛土の外側には白砂が敷いてあり、北廊周辺には白化粧が施されていた可能性が高い。

白砂の化粧土を掘り下げた際に出土した遺物は、京都Ⅱ期新～Ⅲ期中の古段階の遺物が含まれることから、北廊Ⅱ期の成立年代は９世紀後葉～10世紀前葉以前、北廊Ⅲ期の成立年代は10世紀中葉と考えられる。

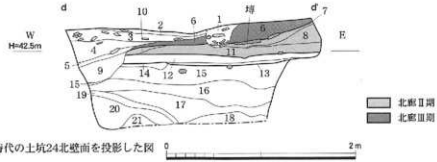
溝48（図33）　北廊盛土上面に掘られた溝である。幅は約0.2～0.4m、深さ約0.15～0.2m、確認した長さは約８mである。埋土はほぼ瓦のみで占められている。瓦には九州系の特徴を持ったものも確認している。この溝はほぼ１間の幅に相当する場所にあり、何らかの区画を表す溝である可能性がある。

整地層　清暑堂の基壇前には整地層と考えられる層を一部で確認している。削平され、ほとんど残っていなかったが、北廊Ⅲ期の化粧土である白砂を覆っている。この層から出土した遺物には京都Ⅲ期新～Ⅳ期古段階の遺物が含まれており、10世紀後葉の年代が与えられる。

（4）江戸時代の遺構（図36、図版６－２）

豊楽院廃絶後に当地の土地利用が再開される時期である。遺構はほとんどが聚楽土と呼ばれる黄褐色粘質土の採取を目的とした土取穴である。また、柵、溝も確認している。

土取穴群　黄褐色粘質土が堆積する調査区北側にある遺構はほとんどが土取穴である。どの土



※江戸時代の土坑24北壁面を投影した図　0　2m

北廂Ⅲ期化粧土	1	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、瓦片・土師器片多量に含む
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土、白色砂粒極めて多量に含む
北廂Ⅲ期整地層	3	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土、瓦片・土師器片少量に含む
	4	10YR3/3 暗褐色粘質土、瓦片・土器片中量含む
	5	10YR4/2 灰黄褐色粘質土、黄褐色・黒褐色粘質土をブロック状に含む
北廂Ⅲ期盛土	6	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
北廂Ⅱ期盛土	7	10YR3/3 暗褐色粘質土
	8	10YR6/6 明黄褐色シルト
溝埋土	9	10YR2/3 黒褐色シルト、φ3～5cmの礫中量含む
北廂Ⅱ期盛土	10	10YR4/2 灰黄褐色シルト、黄褐色粘質土をブロック状に含む
	11	10YR3/2 黒褐色粘質土、凝灰岩片少量に含む
創建直前整地層	12	10YR2/3 黒褐色粘質土、黄褐色粘質土をブロック状に少量含む、φ5cm以下の礫少量含む
	13	10YR2/3 黒褐色粘質土、黄褐色粘質土をブロック状に含む、φ5cm以下の礫を少量含む
落込み51（客土）	14	10YR3/3 暗褐色シルト、φ3cm程度の礫少量含む
	15	10YR3/3 暗褐色粘質土、φ3～5cmの礫少量含む
	16	10YR2/1 黒色シルト
	17	7.5YR3/2 黒褐色シルト
	18	10YR2/3 黒褐色シルト、層上面に鉄分付着
	19	10YR5/6 黄褐色シルト、黒褐色シルトをブロック状に少量含む
	20	10YR2/1 黒色シルト
	21	10YR1.7/1 黒色シルト

図35　北廂西側断面図（1：40）

坑も壁面はオーバーハング気味に抉られており、礫を多く含む層に至って掘削を止めている。いずれも隣の土取穴と接するものが多く、埋土は単層であることから、一連の作業で土取が行われたことを表している。17世紀中葉～後葉の遺物が出土している。

土取穴群の分布は、黄褐色粘質土の分布に左右されるものだが、今回の調査地内では、ほぼ清暑堂基壇内に限られる。基壇外側では、厚く瓦の堆積が見られることから、意識的に避けて基壇の内側を掘削していることがわかる。

土坑32　楕円形の土坑であり、南端は調査区外に延びている。東西幅約1.3m、深さ約0.15mである。埋土から大小２つの口径に分かれる土師器皿が10枚まとまって出土しており、地鎮遺構と考えられる。京都Ⅱ古～中段階の土師器皿であり、17世紀末後葉から18世紀初頭の年代が与えられる。

柵１　南北方向の柵である。約８m分の長さを確認したが、さらに調査区外に延びていくと思われる。各柱穴の平面形は円形を呈しており、規模は直径約0.5～0.6m、深さは約0.6mある。柱間は約1.5mである。遺物はほとんどが平安時代のものであるが、わずかに国産磁器片が出土した。

溝２　南北方向の溝である。一連の土取穴群を掘り込んでいる。幅は約２～2.5m、深さ約0.8～1.0mである。遺物は平安時代のものが最も多く、江戸時代の遺物はわずかではあるが、国産施釉陶器や桟瓦が出土している。遺構の埋没年代は、出土した遺物から19世紀前半である。繰り返し掘り返された痕跡が見られることから、長く維持管理されていたものと思われる。

江戸時代には当地は京都所司代組屋敷の一部であり、検出した柵１と溝２は同じ南北方向に軸

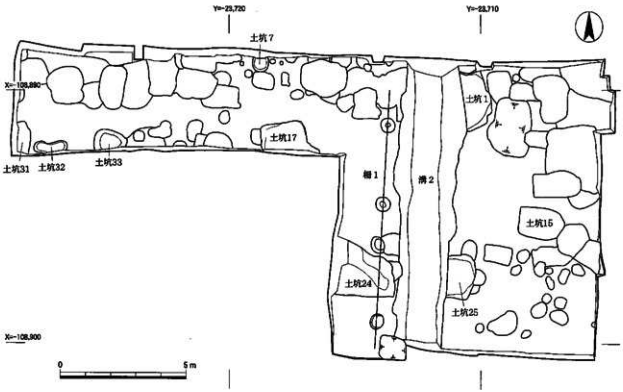


図36　遺構平面図　江戸時代（1：150）

を持つことから、屋敷地の西限を示すものと考えられる。しかし、南側の豊楽殿の調査では溝2の続きは確認されていないことから、さらなる検討が必要である。

4．遺　物

（1）遺物の概要

遺物は整理箱にして38箱出土した。古墳時代、平安時代、江戸時代の遺物であるが、平安時代の遺構は保存することとなり、掘削を限定したことから、出土した遺物の大半は江戸時代の土取穴から出土した平安時代の瓦である。南側の豊楽殿は緑釉瓦が葺かれていたとされているが、今回の調査では緑釉瓦は数点しか出土していない。遺物には凝灰岩片も多量に含まれる。

平安時代の遺物からは、宮城という特殊な環境のため、壺と甕などの貯蔵具類、及び煮炊具類はほとんど見られず、土師器皿を中心とする供膳形態の土器がほとんどである。白色土器の出土も目立つ。

細片がほとんどであるが、清暑堂と北廊の変遷を考えるうえで貴重な資料である。

（2）土器類

1）平安時代の土器（図37、図版12）

化粧土出土土器　土師器が出土している。ほとんどが細片であり、図示できるものは少ない。1～7は全て土師器皿である。外面底部をオサエ、口縁部から内面を横ナデとナデで仕上げている。器壁は薄く、口縁部はナデにより外反している。京都Ⅱ期新～Ⅲ期中段階に属する。9世紀後葉～10世紀前葉の年代が与えられる。

1は口縁部のナデによる外反がややゆるく、器高も2.0cmを超えることから、Ⅱ期新段階に属するものである。2・3は体部の開きがさらに広がり、器高も低くなる。4～7は口縁部の外反がさらに強まり、器壁は非常に薄く作られている。Ⅲ期古～中段階に属する。

整地層出土土器　土師器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器が出土している。土師器皿がほとんどであり、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器は数点で、全て椀である。白色土器は細片であるが、皿と思われる。整地層のため、細片が多く図示できるものは少ない。土師器皿は、外面底部をオサエ、口縁部から内面を横ナデとナデを施す。

8・9は器壁も薄く、口縁部の外反が目立ち、端部を上方に小さくつまみ上げている。10は器壁も薄いが、器高が高く、杯の可能性もある。8～10はⅢ期新段階に属する。11～13は器壁がやや厚くなり、器高がさらに低くなる。口径は11が10.0cm、12は10.5cm、13は11.4cmである。器高は11～13ともに0.7cmである。Ⅳ期古段階に属する。14は緑釉陶器椀である。内面、外面ともにヘラミガキ、口縁部横ナデを施す。胎土は緻密、色調は灰黄色、焼成は良好である。9世紀後葉と考える。

溝21出土土器　清暑堂基壇凝灰岩抜き取り溝である溝21から出土した土器である。土師器、白色土器、灰釉陶器、須恵器が出土しているが、凝灰岩片がほとんどである。白色土器がやや目立つ。9世紀～11世紀中葉までの遺物が含まれており、1063年に焼亡する豊楽院の存続期間にほぼ相当する状況を表す。

表4　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代以前	須恵器				
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、瓦、鴟尾、塼、凝灰岩		土師器15点、緑釉陶器1点、白色土器6点、軒丸瓦7点、軒平瓦6点、丸瓦1点、平瓦1点、鴟尾1点、塼2点		
江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、染付、石製品、瓦		土師器4点、施釉陶器1点、磁器1点、染付1点		
合　計		47箱	47点（5箱）	5箱	37箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より9箱多くなっている。

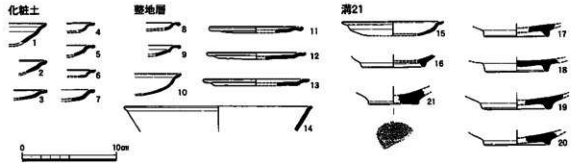


図37　平安時代の土器実測図（1：4）

15は土師器皿である。外面底部をオサエ、口縁部から内面を横ナデとナデを施す。器壁は非常に薄く、口縁部はナデにより外反している。口径は10.8cm。Ⅲ期新～Ⅳ期古段階に属する。

16～21は白色土器皿である。いずれも磨滅が進み、調整が不明瞭のものが多い。16は高台が付くが、削り出したか貼り付けたかは不明。底径は6.6cm。17は削り出し高台である。底径は6.8cm。16・17とも胎土は緻密、焼成は良好である。18は貼り付け高台か。底径は6.6cm。体部は横ナデを施す。胎土には砂粒を少量含む。焼成は良好。16～18はⅢ期古～中段階に属する。19は高台が付くが、貼り付けか削り出しか不明。底径は7.0cm。胎土には少量の砂粒を含む。焼成は良好。20は削り出し高台で、底径は7.0cm。胎土は緻密で焼成は良好である。19・20はⅢ期中～Ⅲ期新に属する。21は平高台で底径5.0cm、回転糸切り痕が残る。Ⅳ期古～中段階に属する。

2）江戸時代の土器（図38）

土坑32出土土器　江戸時代の土坑から出土した土師器皿の一群である。口径によって大小2群に分かれ、大が2枚、小が8枚出土している。いずれもほぼ完形である。Ⅻ期古～中段階に属する。

22・23とも外面オサエ、内面オサエ後ナデを施す。口径は22が5.6cm、23は5.8cm、器高は22が1.0cm、23は1.2cmである。色調はにぶい黄橙色である。24・25は外面底部から体部にかけてオサエ、口縁部には横ナデ、内面底部はオサエを施す。口径はいずれも10.2cm、器高は24が1.9cm、25は2.2cmである。

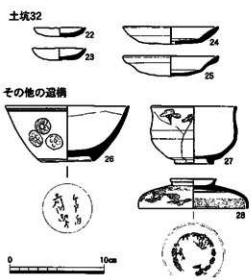


図38　江戸時代の土器実測図（1：4）

その他の出土土器　26は遺構検出中に出土した。肥前系磁器の椀である。低火度で焼成したと思われ、釉薬の発色が悪い。胎土はややにぶい黄橙色で白色釉を施す。高台畳付と内面は口縁直下部を除き無釉。見込みには多数の摩痕が見られ、乳鉢と思われる。文様は呉須で描かれ、外面口縁部と体部下半に二重圏線が巡る。外面には、一つは梅

鉢を3つ、一つは二重圏線の中に絵が描かれているようであるが、不明。もう一つは「廣口大門口□□・・・」とある。高台内面には「平戸泊三河内山より」の銘がある。江戸時代前期に属するものと思われる。

27は京・信楽焼系施釉陶器の椀である。胎土はにぶい橙色で、内面から外面口縁部まで白濁釉、外面口縁部から体部下半まで透明釉を施す。文様は外面口縁部に松文。19世紀前半。28は肥前系磁器の染付椀の蓋である。外面のつまみに二重圏線、体部には菊文、内面口縁部には四方櫂文、天井部内面には、二重圏線の内側に松竹梅繁が施される。18世紀後葉に属する。27・28は溝2から出土した。

(3) 瓦類

瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鴟尾、塼、緑釉瓦が出土している。平安時代前期から中期の瓦が出土しているが、前期の瓦が多い。緑釉瓦は少ない。瓦類は重く、廃棄後は近場に穴を掘り、埋めることが多いことから、今回出土した瓦のほとんどが清暑堂、または北廊で使用されていたものと思われる。

軒丸瓦（図39、図版12・13）　29は複弁八葉蓮華文である。凹凸が激しい。弁子が極端に大きく、一見すれば単弁に見える。輪郭線が僅かに残ることから複弁であることがわかる。瓦当部成形は接合技法。瓦当部側面横ケズリ、裏面ナデ、丸瓦部布目をナデ消し。胎土は砂粒、小石を含むが密。焼成は良好である。西賀茂角社瓦窯産で、NS156と同笵瓦である。平安時代前期。

30は単弁十四葉蓮華文である。瓦当部成形は接合技法である。瓦当部側面ヨコケズリ、裏面タテケズリ。胎土は砂粒を含む。焼成は良好。西賀茂瓦窯産。平安時代前期。

31は複弁八葉蓮華文である。蓮弁は輪郭線で囲む。瓦当部成形は一本造。瓦当部側面上半ナデ、下半横ケズリ、裏面から丸瓦部凹面には布目痕。胎土は砂粒含むが密。焼成はやや軟。栗栖野瓦窯産か。NS110と同笵瓦である。平安時代中期。

32は単弁十六葉蓮華文である。中房に「官」の銘が入る。范型がかなり摩耗している。瓦頭部成形は接合技法。瓦当部側面、裏面ケズリ。胎土は砂粒、小石を含む。焼成は軟。西賀茂角社瓦窯産。NS109と同笵瓦である。平安時代前期。

33は単弁十葉蓮華文である。蓮子は1＋5と思われるが摩耗が進みわかりにくい。瓦当部成形は接合技法。瓦当部側面、裏面はオサエ。胎土は砂粒を含む。焼成はやや軟。平安時代中期か。

34は緑釉単弁八葉蓮華文である。緑釉は瓦当部側面までかかる。瓦当部成形は不明。瓦当部側面ナデ、裏面オサエ。胎土は砂粒を含み空隙が目立つ。焼成やや軟。栗栖野瓦窯産。平安時代前期。同笵瓦は緑釉軒丸瓦の中で最も数が多い。

35は単弁蓮華文である。瓦当部成形は一本造。瓦当部裏面に布目痕。胎土は砂粒をほとんど含まず密。焼成はやや軟。平安時代中期。

29・30・32は土坑1から、31は土坑17から、33は包含層、34は北廊盛土から、35は整地層から出土している。

軒平瓦（図40、図版13）　36は均整唐草文である。中心飾りは上向きC字形が左右に分離し、中に3葉を上にした対葉花文である。瓦当部成形は一体造である。瓦当部凹面、顎部凸面横ケズリ、側面ナデ、裏面ナデ、平瓦部凹面布目痕、凸面縄タタキ。瓦当部凸面、裏面にかけて朱が付着している。胎土は5㎜程度のチャートを含むが緻密。焼成は良好である。西賀茂瓦窯産でNS202Bと同笵瓦である。平安時代前期。

37は均整唐草文である。中心飾りは上向きC字形が左右に分離し、中に3葉を上にした対葉花文である。瓦当部成形は一体造である。瓦当部凹面横ケズリ、顎部凸面横ナデ、平瓦部凹面布目後ケズリ、凸面縄タタキ後ナデ。胎土は砂粒をほとんど含まず緻密。焼成も良好である。36とNS202Bと同笵瓦であり西賀茂瓦窯産。平安時代前期。

38は唐草文である。唐草文は両端から中心に向かう。瓦当部凹面から平瓦部凹面布目痕、顎部凸面横ケズリ、裏面縦ケズリ、平瓦部凸面オサエ。顎部凸面から裏面にかけてケズリが施されて

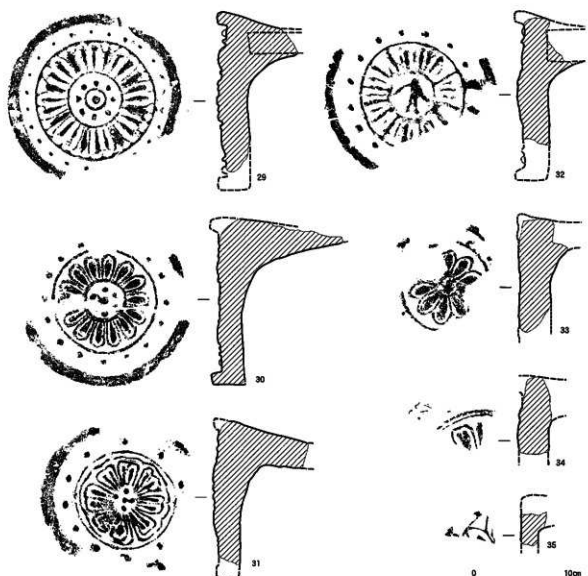


図39　軒丸瓦拓影・実測図（1：4）

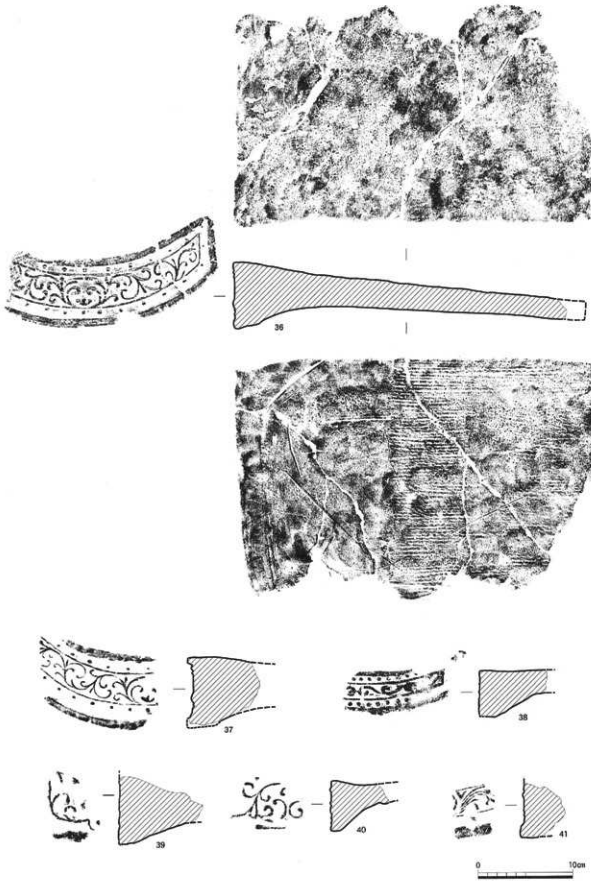


図40　軒平瓦拓影・実測図（1：4）

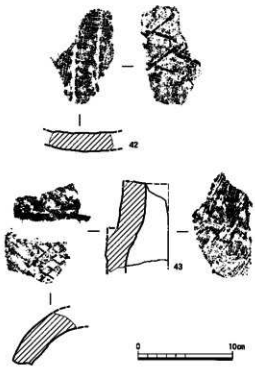


図41　丸瓦・平瓦拓影・実測図（1：4）

いない場所にはオサエ。胎土は小石を含むが緻密。焼成も良好。平安時代中期。

39は唐草文である。瓦当部成形は不明。顎部凸面、裏面ケズリ。胎土は砂粒、小石含む。焼成はやや軟。平安時代中期。

40は唐草文である。瓦当部成形は半折曲技法である。瓦当部凹面から平瓦部凹面にかけて布目痕、顎部凸面から裏面にかけてナデ。胎土は砂粒含み、空隙が多い。焼成はやや軟。平安時代中期。

41は唐草文である。瓦当部成形は不明。顎部凸面から裏面にかけてナデ。胎土は砂粒、小石を含む。焼成はやや軟。池田瓦窯産か。平安時代中期。

36・37は土坑33から出土した。38・39は土坑2から、40は土坑1から、41は包含層から出土した。

丸瓦・平瓦（図41）　溝48から出土した。斜格子の叩きを持つ瓦の一群である。

42は平瓦である。凹面布目痕、凸面斜格子タタキ。胎土は砂粒をほとんど含まない。焼成はやや軟。43は丸瓦である。凸面に斜格子タタキ、凹面布目痕、側面には刃物引き上げ痕、割放しの痕跡が残る。胎土は砂粒含むが密。焼成は良好。これらの瓦は桶巻作りの瓦群であり、九州系の瓦であるならば、平安京に搬入されるのは10世紀中頃以降である。

鴟尾（図42、図版13）　44は鴟尾の胴部右側面である。成形は粘土塊積み上げである。縦帯は突帯、内郭には珠文貼り付けであるが、剥がれている。珠文の貼り付けた跡には型によって外周を押し込んだ跡が見られる。胎土は砂粒、小石を含むが密。焼成はやや軟。平安時代前期。土坑31から出土。江戸時代の土取穴であるが、下層には瓦溜まりが存在し、清暑堂の基壇の傍であることから、清暑堂に葺かれていた鴟尾の可能性が高い。

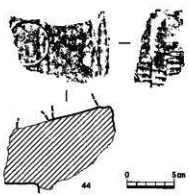


図42　鴟尾拓影・実測図（1：4）

塼（図43）　45は縦25.5cm、横の残存長25.2cm、厚さ6.1cmで形状は正方形であろう。風化が進み、表面の剥離が目立つ。土坑25から出土している。46は縦40.3cm、横の残存長25.9cm、厚さの残存長5.9cmである。形状は長方形である。溝21から出土した。

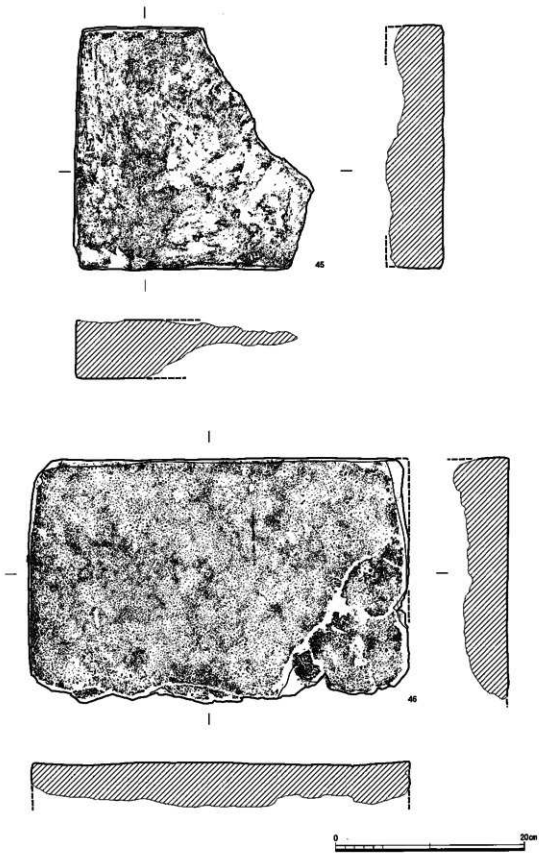


図43　墳拓影・実測図（１：４）

5．まとめ

今回の調査では、清暑堂と北廊の遺構を確認し、変遷についても明らかにすることができた。ここでは、調査で明らかになったことを踏まえて、考えをまとめてみたい。

（1）清暑堂の立地

清暑堂の基壇南縁を確認でき、豊楽殿北縁から約28m離れていることが明らかとなった。清暑堂が豊楽殿後堂、後房、小安殿と称されることは文献に記されている。この名称が示す通り、大極殿と小安殿の関係と同じく、清暑堂は豊楽殿と対になり、天皇の控えの場としての役割を果たしている。他の都城でも見られる正殿と後殿の関係に当たる。小安殿までは天皇は輿に乗るが、小安殿から大極殿へは布を敷いて歩くことから考えても、正殿と後殿の距離は近い方が良いと思われ、平安宮以前の都城でも、正殿と後殿の距離は15m以下である。[15] 平安宮大極殿と小安殿間の距離も約12mと推定されている。豊楽殿と清暑堂の間だけが、倍以上の約28mと距離がある。

原因の一つとして考えられるのが、北廊の下層から検出した谷状地形の落込み51である。落込み51の埋土は、確認した深さ約1.8mまで自然堆積層は確認できず、下層には一度に埋め戻されたと考えられる層が堆積し、上層には整地の跡が見られる。このような大規模な地業は平安宮造営に伴うものと考えられ、豊楽院創建直前まで、落込み51は存在していたと考えられる。清暑堂の基壇は、この落込み51の北肩に沿うように確認しており、落込み51を意識的に避けて造営されている可能性がある。平安宮の建物配置が自然地形に左右された例はまだ知られておらず、今後平安宮の調査を進める上で旧地形にも十分注意する必要がある。

（2）清暑堂の規模

ここでは、清暑堂の基壇規模、建物規模について触れる。規模については、これまでに何度か復元が行われている（表5）。

基壇の規模については、今回の調査によって清暑堂基壇凝灰岩の抜き取り溝（溝21）が確認できたことによって、南縁が定まった。また、西縁は江戸時代の土取穴により削平されているが、調査区西端の地山の高さと瓦の堆積状況から、Y=-23,725付近と想定できる。この結果をもとに復元を行うと、基壇東西幅は約34～35mとなる。基壇南北幅であるが、北縁の定点とする1928年の調査で確認された凝灰岩の位置が問題となる。古代學協会の復元によると、北縁凝灰岩の位置を東2間の位置としている。今回の調査で推定南面西2間の位置に階段が存在することから、北面東2間にも同規模の階段が存在することが想定される。階段延石と北縁基壇延石と判断するかで約1.5mの違いが生じる。基壇南北幅は階段延石とすれば約10.5m、基壇北縁とすれば、約12mとなる。

次に、基壇の高さについて述べる。基壇に取り付く階段の傾斜は概ね最大で45度といわれている。[16] つまり、階段の出が明らかになれば、基壇の高さ（最大高）を推測することができる。清暑

堂の西階段の出は約1.5mであるので、基壇高は、最大で約1.5mと考えられる。また、踏石の蹴上げ高が27cmであることを考えれば、階段の踏石は最大で5石と推定できる。

次に建物規模について述べる。1988年の調査では、柱の礎石根固め跡を確認しており、その位置は豊楽殿身舎の西端から東へ2間目の柱筋延長線上にあたることから[17]、清暑堂の建物規模は豊楽殿の身舎と同じであるとされてきた。今回の調査では建物の礎石根固め跡は検出できなかったが、西階段を確認したことで桁行の柱位置を推定することが可能となる。切石積階段は登葛石（耳石）の中央線または外側方を建物の柱の中心線の延長上にのるように据えるのが一般的であるとされるからである[18]。つまり、柱筋は必ず階段幅の内側に位置することになる。今回確認した西階段の幅は豊楽殿の階段の幅と同じ約5.2mである。豊楽殿の柱間は4.5m（15尺）であり、階段幅の内側に位置する。しかし、清暑堂に豊楽殿の身舎をそのまま当てはめると東西各1間目の柱筋がわずかに階段の外側に位置する。以上を踏まえると、清暑堂の建物桁行は1間14尺とするのが妥当であると思われる。梁間については、基壇南北幅が確定していないため、言及は避けたい。

（3）清暑堂・北廊の成立について

今回の調査では、清暑堂と北廊の取り付き部分の解明が主眼の一つであったことは先に述べた。当初、清暑堂は豊楽殿と時期を同じくして造営されたものと考えていた。しかし、清暑堂の南縁基壇の凝灰岩抜き取り溝を確認したが、北廊との取り付き部分である中央間には、南縁想定ラインにも、中央階段想定場所にも、東西方向に存在するはずの凝灰岩の痕跡は全く見受けられなかった。中央間付近の土坑49は東側には続いておらず、取り付き部分の南北方向断割においても、凝灰岩の痕跡は確認できなかった。

以上のことから清暑堂と北廊は同時に造営されるが、豊楽殿創建当初には存在していなかったことが明らかになった。

北廊の断割を行ったが、清暑堂と北廊の成立年代を推定させる遺物は確認できなかった。豊楽殿跡の調査では、北廊の成立年代を9世紀前半としているが、豊楽殿跡の保存が決定し、掘り下げを実施できず、北廊の変遷を認識出来なかったため、9世紀前半という年代が今回の調査の北廊Ⅰ期、またはⅡ期造営に伴うものであるか不明である。

表5　清暑堂復元規模一覧表

書　名	著　者	発行年（執筆年）	建　物		基　壇	
			桁行（間数・柱間）	梁間（間数・柱間）	東西（尺・m）	南北（尺・m）
西宮記	源高明	10世紀後半	7間	記入なし	記入なし	記入なし
陽明文庫本「宮城図」		鎌倉時代	7間	記入なし	記入なし	記入なし
大内裏圖考證	裏松固禪	18世紀末	9間・16尺	2間・13尺	154尺・46.2m	36尺・10.8m
平安遺志		1895年	同上	同上	同上	同上
平安京提要	古代學協会	1994年	7間・15尺	2間・14尺	115尺・34.5m	38尺・11.4m

清暑堂と北廊が文献に初めて登場するのは遅い。清暑堂は、弘仁十二年（821）に奏上され承和年間までに完成した『内裏式』に記載され[19]、北廊は天暦元年（947）になってからのことである[20]が、今回の調査で、清暑堂と北廊が一連の造営とわかり、さらに天皇控えの場としての清暑堂の役割を鑑みると、豊楽殿造営後間もない時期に造られたと思われる。つまり、9世紀前半のかなり早い時期に清暑堂と北廊は造営されたといえよう。

（4）北廊について（図44、表6）

今回の調査で、北廊の遺構としては基壇盛土、雨水受けの塹敷き、白砂化粧土を確認した。また、断割を行ったところ、中央部分を蒲鉾状に盛土、側面には瓦を貼り付けて土留めとし、さらに外側に黄褐色粘質土を貼り付けて外装の化粧としており、当初単廊の1間幅であったことが明らかになった（北廊Ⅰ期）。その後、粗い版築によって、清暑堂南面西階段の東端まで拡幅し（北廊Ⅱ期東端は清暑堂南面東階段の西端）、西端には雨水受けの塹が敷かれる（北廊Ⅱ期）。塹敷きを埋め、清暑堂西階段の一部を壊して埋める段階があり、基壇盛土外側には白砂を敷いて化粧している（北廊Ⅲ期）。北廊Ⅱ期、Ⅲ期時の北廊の幅は、単廊に両庇を付けた3間であったと思われる。

また、北廊Ⅰ～Ⅲ期を通して、基壇盛土上面には柱穴跡も礎石根固め跡も確認できなかったが、豊楽院北廊に鷺が集まるとの記載があること[21]から、屋根があったことは間違いない。また瓦葺きであるのが当然であることから、上部構造は根固めのない、礎石建本瓦葺の構造であったと考えられる。以上から北廊には2度にわたる作り替えが行われたことを明らかにすることができた。北廊各期の変遷をまとめたのが表6である。

では、なぜ当初単廊の幅だけで役割を果たしていた北廊が、3間幅を持つ必要があったのであろうか。理由として挙げられるのは、平安時代中期に至って儀式の整備に伴い拡幅されたことが考えられる[22]。

豊楽院は『内裏式』が制定された嵯峨朝において最も活用されているが、北廊は平安前期には文献には全く記載が見られない。清暑堂も、あくまで天皇が豊楽殿に出御する際の控えの場としての役割しか読みとれない。おそらく単廊時の北廊も天皇が豊楽殿と清暑堂の間を行き来する為の通路の役割のみを担っていたと思われる。しかし、平安時代中期に編纂された儀式書である『西宮記』や『北山抄』に北廊は突然登場するのである。記載されているのは11月大嘗祭の巳日に

表6　北廊変遷表

遺　構	造営年代	上部構造	基壇幅	備　考
北廊Ⅰ期	9世紀前葉	単廊	6.4m	清暑堂と一連の造営
北廊Ⅱ期	9世紀後葉～10世紀前葉以前	単廊＋両庇	12.0m	雨落ち塹敷き
北廊Ⅲ期	10世紀中葉	単廊＋両庇	13.4m	白砂化粧土
整地層	10世紀後葉			

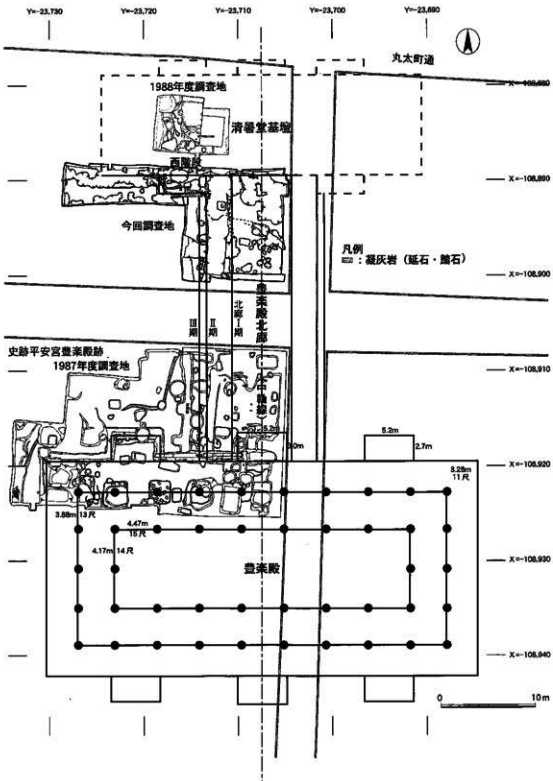


図44　清暑堂・北廊復元図（1：400）

夜通し行われる清暑堂神楽の記事である。それによると、「清暑堂の中央間に天皇が出御し、南の軒廊（北廊のこと）上に２列になって公卿の座を設け、豊楽殿北庇に侍臣が座る[29]」とある。このように、清暑堂の役割に変化が見られるのは、清和朝の貞観年間以降である[30]。拡幅が行われた北廊Ⅱ期の造営年代（９世紀後葉～10世紀前葉以前）に近いことからも、北廊に公卿の座を設ける必要が生じたことが、北廊の拡幅に繋がった可能性が考えられよう。

以上、今回の調査成果を踏まえて推論を交えながら知見を述べた。今回の調査では清暑堂、北廊の遺構を確認し、旧地形が宮殿の建物配置に影響を与えていること可能性があることを示した。豊楽院内の建物配置、規模については未だ不明な点も多い。その中で重要な定点を得ることができたことは大きな成果である。また、遺構の変遷を明らかにすることができたことは、調査面積の狭い平安宮の調査では貴重な成果といえる。また、江戸時代の遺構から、平安宮跡の遺構の解体が進んでいく様相が見て取れた。今後の調査では、遺構・遺物の検討をさらに詳細に行っていく必要があるだろう。

最後になりましたが、今回の調査では鈴木久男、中野雄二、西山良平、橋本義則（五十音順・敬称略）の方々からご教示・ご指導を得ました。記して感謝申し上げます。

註

1）鈴木久男「平安宮豊楽院（1）」『平安京跡発掘調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年
2）横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』（財）古代學協会　角川書店　1994年
3）『西宮記』巻八諸院「豊楽院天子宴会所」
4）『北山抄』巻五大嘗會事「御清暑堂有御遊事【中略】軒廊双行設王卿座其南横敷侍臣座」
5）『日本後紀』巻八延暦十八年正月壬子条「豊楽院未成功大極殿前龍尾道上構仆僧殿」
6）『日本後紀』巻十七大同三年十一月壬辰条
7）延暦二十四年（805）には有名な徳政争論があり、翌年には造宮職が廃止されていることから、この年には主要な殿舎の造営は既に終わっていたと考えられる
8）『扶桑略記』廣平六年三月二十二日条
9）佐藤虎雄「平安宮豊楽院の遺物」『古代学』第６巻第４号　（財）古代學協会　1958年
10）家崎孝治「平安宮の復元について」第11回京都市考古資料館文化財講座資料　1987年
昭和３年当時の地籍図を調べることによって、凝灰岩の発見場所を現代の地図に反映させ、豊楽院不老門と清暑堂の基壇の一部であることを明らかにされている。
11）梶川敏夫「附録１　平安宮豊楽殿跡緊急発掘調査概要」『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告1976-Ⅰ　京都市文化観光局　1977年
12）註１に同じ
13）鈴木久男・網　伸也「平安宮豊楽院（2）」『平安京跡発掘調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年
14）出土土器の年代に関しては、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年に準拠する。
15）吉田　敏「大極殿と出御方法」『ヒストリア』第201号　大阪歴史学会　2006年

16) 『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　2003年
17) 註13に同じ
18) 宮本長二郎「階段」『日本考古学事典』 三省堂　2002年
19) 『内裏式』正月七日節会条
20) 『日本紀略』後編三天暦元年七月一日条「酉時鷲集豊楽院北廊占之」
21) 註20に同じ
22) 山口大学教授橋本義則氏よりご指摘があった。
23) 『北山抄』巻五大嘗會巳日「御清暑堂有御遊事其儀堂中間設御座右立置物御机御後及両邊施屏風軒廊双行設王卿座其南横敷侍臣座」
24) 『三代実録』巻三「天皇留御豊楽殿後房文武百官侍宿親王以下参議已下侍御在所琴歌神宴終夜歓楽賜御衣」

参考文献

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1995年
『平安京提要』 角川書店　1994年
橋本義則『平安宮成立史の研究』 塙書房　1995年
山中　裕・鈴木一雄『平安時代の儀礼と歳事』 至文堂　1994年
山中　裕『御堂関白記全注釈－長和元年－』 高科書店　1988年

Ⅲ　平安宮西雅院跡

1．調査経過

本調査は、共同住宅新築工事に伴う発掘調査であり、京都市文化財保護課の国庫補助事業として財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を委託され、実施することとなった。

調査地は京都市上京区日暮通丸太町上る西入西院町747番地12他に所在する。当地は平安時代には平安宮内の東部中央、内裏の南東隣接地に位置する西雅院跡東部の推定地に当たる。中世には内野と称された地域の一角を占め、桃山時代に入ると北側隣接地に広大な聚楽第が豊臣秀吉により造営され、当地域にも大名屋敷が建てられる。江戸時代には京都所司代や大名などの屋敷地となり、上京の町屋地に連なる。これまでに西雅院推定地では、発掘調査や試掘調査が幾度か行われているが、同院に関連する遺構は検出されていない（表7）。

調査地は、南北に走る智恵光院通に面する。敷地面積約356㎡、東と南に広がるL字形を呈する。調査区は敷地西側に、東西約5.5m、南北約16m、面積約84㎡の規模で設定した。調査は2007年2月26日から開始し、3月17日には調査作業を終了した。始めに発掘器材の搬入、調査区設定を行った後、表土下1.2～1.8mほどの近・現代の盛土を機械力により除去し、排土は場内処理した。その後、手掘り作業により遺構面の調査を行い、調査区北部で近世土坑、南部で土取穴などを検

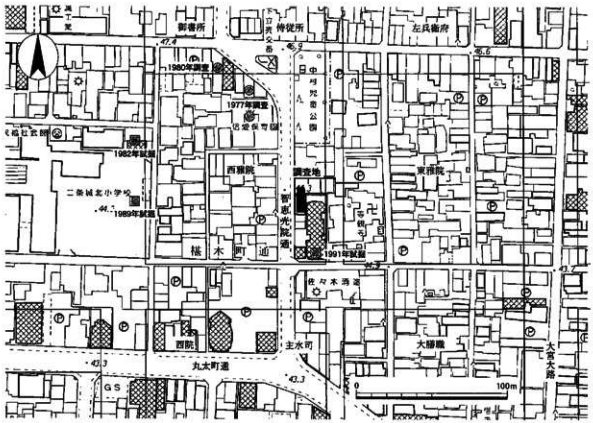


図45　調査位置図（1：2,500）

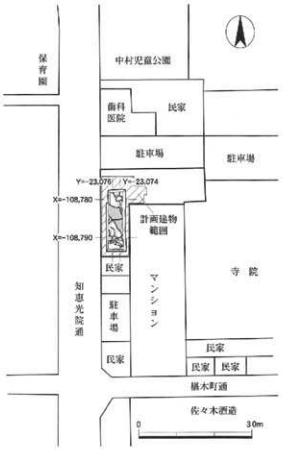


図46　調査区配置図（1：1,000）

図47　調査前全景（北から）

図48　調査風景（北から）

出し、記録作業を進めた。調査終了後、調査区の埋め戻し、器材搬出など現場作業を終了した。なお調査中に強風により倒壊した東隣マンションの金網の復旧も行った。

調査実施中には、京都市文化財保護課の指導を受けた。

表7　周辺の主な調査一覧表

調査年度	調査方法	所在地	調査期間	調査概要	文献
1977	発掘	上京区智恵光院通丸太町上る西院町（信愛保育園）	1977.07.03～07.24	平安時代中期の土坑、近世の溝、近世と考えられる盛土と削平の崖。	百瀬正恒他「平安宮西雅院跡」『平安京跡発掘調査概報 京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅱ』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1978年
1980	発掘	上京区下立売通智恵光院西入中町526	1980.09.19～10.04	平安時代の土坑1基。江戸時代の土取穴3基。近世以降の東西方向の約1.8mの段差	堀内明博「平安宮西雅院跡」『平安京跡発掘調査報告　昭和55年度』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1981年
1982	試掘	上京区浄福寺通下立売下る中務町487（出水小学校）	1982.09.17	平安時代中期の土坑1基。平安時代後期の土坑2基。近世の落込2基。	試掘・立会調査一覧表『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1984年
1989	試掘	上京区浄福寺通下立売下る中務町487（出水小学校）	1989.09.22	地表下-1.24mにて平安時代の整地層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局　1990年
1990	試掘	上京区口幕通丸太町上る西入西院町747-11	1991.03.12	地表下-0.4mで江戸時代の土坑、-1.4mで地山。	『京都市内遺跡試掘調査概報　平成3年度』　京都市文化観光局　1992年

2．遺　構

（1）基本層序（図49）

調査区の現地表面は、標高43.7m前後である。近・現代盛土が地表面から厚さ0.7～1.7m堆積する。その下に、調査区の北半では厚さ0.7～1.4mの整地土が認められた。この整地は、出土遺物から、近世後半以降になされたものと考えられる。南半ではこの整地土が認められず、削平されたと考えられ、近・現代には調査区の北半と南半では、１m前後の高低差があったようである。北半では整地土下、南半では近・現代盛土下が地山面となる。地山の標高は41.5m前後でほぼ水平である。遺構は地山面で検出した。調査区北部では近世後半の土坑、中央部では砂礫堆積層、南部では中世から近世の土取穴を検出した。

（2）遺構（図49、図版14）

検出した遺構は、近世の土坑群と中世から近世と考える土取り跡の土坑などである。平安時代や平安宮西雅院に関連する遺構は確認できなかった。

整地土　調査区北部で検出した。東西４m以上、南北3.5m以上、厚さは東側で約0.4m、西側で約1.4mを測り、西へ厚くなる整地の土層である。調査区外の北側に広がる。盛土の直下から混砂礫層と砂泥層が幾層にも重なり、桟瓦を含む近世の瓦が多く出土した。出土遺物から江戸時代後半と考えている。

土坑24・26・28・29　調査区北東部の前述した整地土の下から検出した土坑群である。平面は径0.5～1.6m、深さは0.4～0.8mを測る。埋土は黒～暗褐色や褐色の砂泥である。出土遺物から江戸時代後半と考えている。

土坑11・16・19・35　調査区南部から中央部西側で検出した土坑群である。平面は径1.4～3.4m、深さは0.1～0.5mを測る。これらの土坑は砂礫層を避け、地山のいわゆる「聚楽土」を掘り込む。埋土は褐色～暗褐色の粘性のある砂泥であり、明褐色粘質砂泥の地山土が混じる。これらの土坑からの出土遺物は中・近世の遺物が少量含むが、平安時代前期の遺物を中心としている。いずれも中世から江戸時代の土取穴であろう。

流路　調査区の中央部で北西から南東方向の砂礫堆積層を検出した。幅約3.8m、長さ約8.2mを測る。工事掘削深の関係から掘下げ調査は行わなかったが、一部分の断割り調査により検出面

表8　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
近世	土坑24、土坑26、土坑29など	
中世～近世	土坑11、土坑19など	土坑は土取り跡

1　10YR3/2 黒褐色砂泥　混炭、土師器片、小礫少量
2　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
　混径５cm以下の礫、炭、瓦片少量
3　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　混径３cm以下の礫多量
4　10YR4/4 褐色砂泥　混径５cm以下の礫中量、瓦片
5　10YR3/3 暗褐色砂泥　混径４cm以下の礫中量、炭、瓦片
6　7.5YR4/3 褐色砂泥
　混３cm以下の礫中量、炭、瓦片、土師器片
7　10YR4/4 褐色砂泥　混４cm以下の礫少量、土師器片
8　10YR4/4 褐色砂泥　混８cm以下の礫多量、瓦片
9　7.5YR4/4 褐色砂泥　混５cm以下の砂礫多量
　(１～９・遺構地土)
10　7.5YR3/4 暗褐色砂泥～7.5YR4/4 褐色粘質土
11　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　混径５cm大の礫、炭
12　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　混炭、礫砂
　～7.5YR4/3～4/4 褐色砂泥
　(10～12・土坑24)
13　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　混径３cm大の礫、炭
14　7.5YR4/4～4/6 褐色砂泥・粘質
　混径３cm大の礫、炭（土坑26）
15　7.5YR3/3 暗褐色砂泥・粘まる　混小礫、瓦片、土師器片
16　10YR3/2 黒褐色砂泥・粘まる　混径５cm以下の礫多量、瓦片、炭
17　瓦片多量
18　10YR3/3 暗褐色砂泥・粘まる
　混径３cm以下の礫少量、土師器片、瓦片、炭
19　7.5YR3/4～4/4 褐色砂泥　混径10cm以下の礫多量、土師器片、炭、下層に瓦片密集
20　7.5YR4/2～4/3 灰褐色砂泥　混小礫、瓦片、炭
21　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　混径10～15cmの礫多量、瓦片、炭
22　7.5YR3/4～4/4 褐色砂泥・粘質　混小礫、瓦片、炭
23　7.5YR3/2～4/2 灰褐色砂泥　混小礫、瓦片、炭
24　7.5YR4/3 褐色砂泥　混瓦片、炭（土坑29）
25　7.5YR4/4 褐色粗砂　混径10cm大の礫、炭
26　7.5YR3/2 黒褐色砂質　混炭
27　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　混小礫、炭
28　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　混炭（10YR2/2～2/2 黒褐色粘質土
　混土師器片、炭、瓦片少量）
29　7.5YR4/4～5/4 褐色砂質　混礫砂
30　7.5YR3/3～4/2 灰褐色砂質　混径７cm以下の礫多量
31　7.5YR3/2～3/3 黒褐色砂質　混径４cm以下の礫中量
32　7.5YR4/3 褐色礫砂　混小礫
　(25～32・遺物)

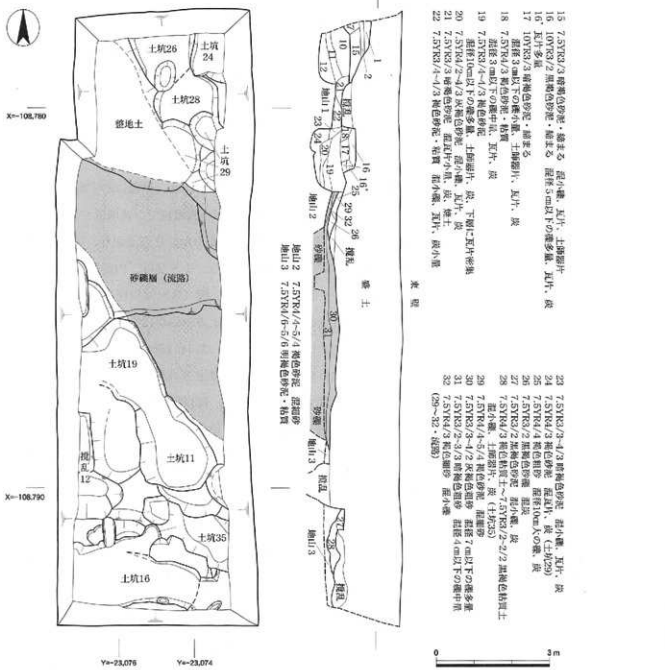


図49　遺構実測図（１：100）

から深さ0.9m前後あることを確認した。遺物が全く出土しなかったが、平安時代以前の自然流路と考える。

3．遺　物

遺物は整理箱で13箱出土した。江戸時代の遺物が10箱、平安時代の遺物が3箱、他に中世の遺物が少量ある。

（1）土器類（図50・51）

中世から近世の土器類は、染付磁器、陶器、焼締陶器、磁器、輸入磁器、瓦質土器、瓦器などがあり、中世のものは少量である。平安時代の土器類は、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器などがある。平安時代の遺物は前期から中期のものが出土しており、前期のものが多い。土器類は、遺構に伴わないものが中心であり、小片のものが多い。それらのなかから比較的残存状態の良いものを図示した。なお出土土器の年代については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」[1]に準拠した。

平安時代の土師器には椀、皿、高杯がある。椀（1）は口径13cm、体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁端部はつまみ上げられ肥厚する。胎土はにぶい黄橙色で、焼成はやや軟質である。皿（2）は口径18cm、器高1.6cmである。体部は内湾してゆるやかに立ち上がり、口縁端部はつまみあげ、肥厚する。胎土は明黄褐色、焼成はやや軟質である。1・2は、内面はナデ調整、外面はヘラケズリ調整である。平安京Ⅰ期新～Ⅱ期古に属する。椀（3）は口径14cm、体部は内湾して立ち上がり、体部上端から口縁部は外反し、口縁端部は上方へ僅かに小さく突起させるように収める。胎土は浅黄褐色、焼成はやや軟質である。皿（4）は口径15cm、器高1.4cm、体部は内湾して立ち上がり、体部上端から口縁部は外反し、口縁端部は上方へ小さく突起させるように収める。胎土はにぶい黄橙色、焼成はやや軟質である。杯（5）は口径16cm、体部上端から口縁は外反し、口縁端部が僅かに丸く突起する。胎土は浅黄橙色、焼成はやや軟質である。3～5は内面はナデ調整、外面はナデとオサエ調整である。平安京Ⅱ期中～新に属する。2は近世の整地土から、1・3～5は土坑11から出土した。高杯（6）は、脚部とわずかに杯部が残る。残存高は約

表9　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類	3箱	土師器6点、緑釉陶器1点、灰釉陶器2点、軒丸瓦1点、刻印瓦1点	1箱	2箱
中世～近世	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、輸入陶磁器、瓦類、骨製品	10箱	土師器2点、施釉陶器1点、刻印瓦1点	2箱	7箱
合　計		13箱	15点（1箱）	3箱	9箱

11cmである。脚部の断面は、径が最小径3.8cmほどであり、ヘラケズリで7角形に形成される。胎土は浅黄橙色、焼成はやや軟質である。平安時代前期のものであろう。調査区北部の整地土から出土した。

緑釉陶器椀（7）は、底部径6.2cm、蛇の目高台である。胎土は褐灰色、内外面に釉が施される。9世紀後半に比定される。調査区北部の整地土から出土した。灰釉陶器には椀、皿がある。皿（8）は、径8.9cmの貼り付け高台である。体部内面に段のあるいわゆる段皿である。胎土は灰白色で内面に釉が施される。9世紀中頃に比定される。調査区北部の整地土から出土した。椀（9）は口径17cm体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反し端部は丸く収める。胎土は灰白色で内面と外面の上端部に施される。9世紀代に比定される。攪乱坑12から出土した。

中世から近世の土師器には皿がある。皿（10）は口径11cm、器高1.8cmである。体部は内湾してなだらかに立ち上がり、口縁端部はつまみ上げ丸く収まる。内外面はナデ調整、胎土は浅黄橙色、焼成はやや軟質である。時期は16世紀末から17世紀初頭と見ている。調査区北部の整地土から出土した。皿（11）は口径11cmである。体部はやや外反し、口縁端部は丸く収まる。内面と口縁部外面はナデ調整である。胎土は灰白色、焼成は硬質である。平安京Ⅺ期に属する。調査区中部の遺構検出中に出土した。

施釉陶器椀（12）は、口径9.3cm、器高4.5cmである。体部は内湾してロクロ目が段をなし、口縁部は外反して端部は丸く収まる。高台はケズリ出す。胎土は灰白色、焼成は硬質、高台は露台

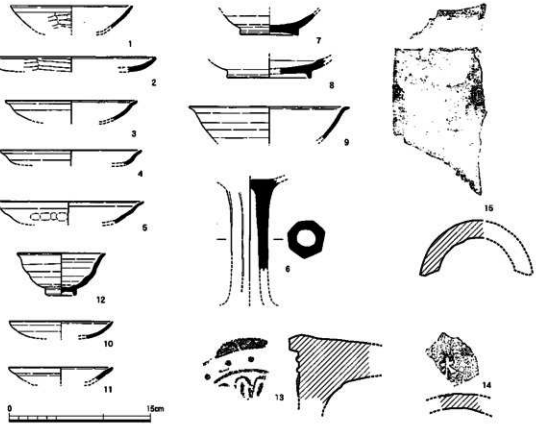


図50　出土遺物拓影・実測図（1：4）

であり、釉が内外面に施される。京・信楽産で19世紀のものである。近・現代盛土から出土した。

（2）瓦類（図50・51）

近世の瓦類は整理箱で8箱あり、平瓦、丸瓦、桟瓦、軒瓦、棟瓦などがある。また刻印をもつ瓦が1点ある。平安時代の瓦類は3箱であり、平瓦、丸瓦、軒丸瓦がある。軒丸瓦は1点である。また「木」の刻印をもつ瓦が1点ある。これらのうち残存状態のよい軒丸瓦と刻印のある瓦を図示した。

軒丸瓦（13）は土坑11から出土した小片である。内区は単弁の蓮華文、外区には界線をはさみ0.5cm前後の珠文がある。胎土は小粒が微量混じり、焼成はやや軟質である。小片のため特定できないが、時期は平安時代前期であろう。（14）は丸瓦凸面に、幅1.5cm以上、長さ約2.2cmの大きさで「木・・」の字が陰刻されている。平安時代の木工寮の「木」と考えられる。土坑19から出土した。（15）は丸瓦の凸面に、幅約1.1cm、長さ約1.6cmの隅丸方形枠内に「∧長」の陰刻がある。この刻印は、近世後半から近代の瓦窯を発見した平安京右京三条四坊十三町跡（現在の右京区山ノ内町）の調査で出土したものと同刻印[21]であろう。近世の整地土から出土した。江戸時代後半のものと考える。

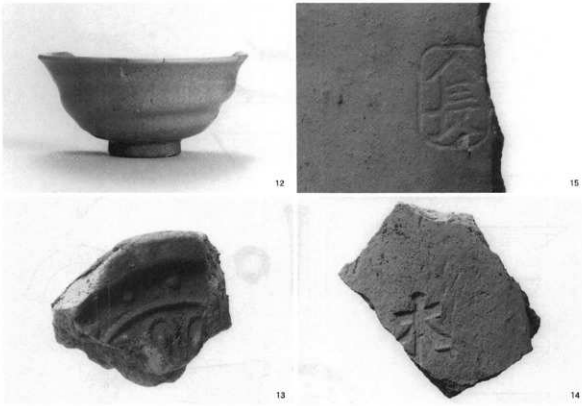


図51　出土遺物

4．まとめ

今回の調査で検出した遺構は、地山に達する土取穴跡と考えられる中世から近世の土坑が大半であり、平安時代の遺構は残存しておらず、西雅院に関連する遺構も確認することができなかった。しかし、土坑などから平安時代の遺物が出土し、平安時代前期から中期のものが多いことから、この時期の遺構が当地にも存在していた可能性を示すものと考えている。

桟瓦を含む近世瓦が多く出土した土坑などは、京都所司代や大名の屋敷地に関連する遺構であろう。

なお、流路と考える砂礫層は、わずかではあるが土取跡の土坑が砂礫層を掘り込んでいること、また遺物が全く出土しなかったが北西から南東をしめす方位などから、平安宮成立以前の自然流路と想定している。

註

1） 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第3号』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年

2） 「山之内村　長衛兵」の「ハ長」であろう。能芝　勉・モンペティ恭代『平安京右京三条四坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-1（財）京都市埋蔵文化財研究所　2004年

Ⅳ　平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡

1．調査経過

今回の調査は国庫補助事業に伴う発掘調査である。

調査地は平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡にあたっており、周辺の調査成果から遺構が良好な状態で残存していることが推測されたため、発掘調査を実施するはこびとなった。

調査区は既存建物による攪乱や排土置き場、隣接する家屋との関係を考慮して、調査地中央部やや東寄りに設定した。調査面積は約100㎡である（図53）。

調査は2007年８月24日より機械掘削を開始し、盛土および大規模な攪乱埋土を除去したのち、２面に分けて調査を行った。各遺構面では遺構検出、遺構登録を行い、各遺構面の状況が明らかになった段階で写真撮影、遺構実測を実施した。また、機械掘削土は場外へ搬出、調査に伴う人力掘削土は調査地内で処理し、９月14日に全ての作業を終了した。

なお、調査期間中の2007年９月８日に地元を対象とした見学会を開催し、調査成果の公開につとめた。

調査地周辺の歴史的環境は次のように概観することができる。

平安京左京四条二坊十五町は北を六角小路（現在の六角通）、東を西洞院大路（現在の西洞院通）、南を四条坊門小路（現在の蛸薬師通）、西を油小路（現在の油小路通）に囲まれた区画で、『拾芥抄』などによると11世紀末から12世紀初頭にかけて藤原実季の邸宅があったことがわかる。また、室町時代中期の文明十三年（1481）頃からは、京都でも有数の土倉である沢村氏により十五町の

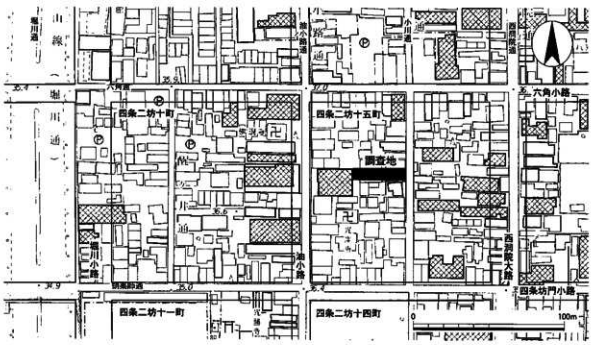


図52　調査位置図（１：2,500）

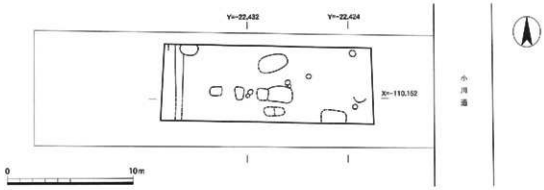


図53　調査区配置図（1：300）

土地の集中的な買得が行われ、やがて室町時代後期の天文十四年（1545）には、天文法華の乱後に帰洛した本能寺がこの地に沢村氏より土地を購入して復興された。本能寺は京都法華宗の本山の一つとして栄えたが、天正十年（1582）には明智光秀が織田信長を自刃させた歴史上著名な本能寺の変により多くの建物が火災により失われた。その後、本能寺はこの地での再建が進められるが、豊臣秀吉の政策により、天正十九年（1591）に現在の寺町御池へ移転した。本能寺跡には十五町の東西中央に南北方向の小川通が設けられ、江戸時代には町屋が建ち並ぶ市街地となったようである。

調査地は十五町の中央部北西寄りに位置している。調査地西隣接地で行われた立会調査では、平安時代後期の井戸、鎌倉時代から室町時代の土坑・水溜遺構などを検出している。[1] 2007年7月から8月にかけて十五町東部で関西文化財調査会により行われた発掘調査では、本能寺にともなう南北・東西方向の堀が発見された。南北方向の堀の内側には石垣が造られており、堀の埋土などからは「能」の異体字を刻んだ軒丸瓦をはじめとして遺物が大量に出土した。また、調査地周辺では、左京四条二坊十一町[2]・十四町[3]の発掘調査で平安時代から江戸時代に至る多様な遺構を検出している。特に十四町の調査では四条坊門小路南側で室町時代後期の幅約4mの堀を検出した。それが下京の構に関わる濠であることが判明し、本能寺が南側の十四町まで広がらないことが確認できた。

沿革や周辺の調査成果にみるように、調査地は平安時代から江戸時代の遺構が重複していることが明らかである。中でも位置的に本能寺の主要部分に当たっている可能性が考えられる。

図54　調査前全景（東から）

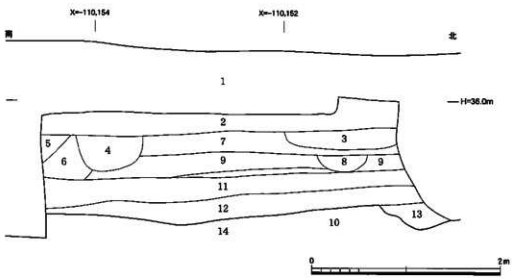
図55　作業風景

2．遺　構

（1）基本層序（図56、図版15）

調査地の層序は遺構が重複する平安京左京域特有の堆積状況を示しており、江戸時代中期以降の大規模な撹乱のため、遺物包含層が残っている部分は少ない。

地表面から厚さ約0.5mの江戸時代後期以降の盛土の下は、厚さ約0.3mの江戸時代中期の包含層である暗褐色砂泥である。調査地では江戸時代前期の包含層は認められず、暗褐色砂泥の下層は厚さ約0.2mの桃山時代の包含層であるオリーブ褐色砂泥になる。オリーブ褐色砂泥の下層は厚さ約0.3mの室町時代の包含層である褐色砂泥など（第１層）がある。第１層は撹乱のためもあり広がりは部分的である。第１層の下層には平安時代後期から鎌倉時代の包含層である黄褐色泥砂（第２層）がある。第２層の大部分は室町時代以降の遺構に削り取られており、調査区のごく一部で認めたにすぎない。よく残っている部分で厚さ約0.15mである。第２層の下層はにぶい黄褐色砂礫・黄褐色粘質土になる。堅く締まっており、遺物を含んでいないことから地山と判断した。地山検出面の標高は約35.4mで、東部よりも西部がわずかに高い。



1　盛土・撹乱
2　10YR3/4 暗褐色砂泥（江戸時代中期）
3　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（φ1～5cmの礫をわずかに含む）
4　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（φ2～8cmの礫をわずかに含む）
5　10YR4/4 褐色砂泥
6　2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂
7　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥に2.5Y4/6オリーブ褐色粘質土ブロック（φ1～3cm）が少量混
8　2.5Y4/2 オリーブ褐色砂泥（土坑41）
9　10YR4/4 褐色砂泥（φ1～3cmの礫を多量に含む　第1層）
10　2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂（φ1～3cmの礫を多量に含む　第1層）
11　2.5Y3/2 黒褐色砂泥（溝70）
12　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂（溝70）
13　2.5Y4/2 暗灰黄色泥土（中砂～粗砂を多量に含む）
14　10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫（地山）

図56　西壁断面図（１：40）

表10　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	土坑97	
鎌倉時代	土坑18	
室町時代前期～中期	土坑27・土坑29・土坑52・土坑60・土坑87、溝70、柱穴69・柱穴99・柱穴23・柱穴109・柱穴92	
室町時代後期	土坑６・土坑26・土坑17・土坑46・土坑49・土坑98、溝28	
桃山時代～江戸時代前期	井戸12、土坑５・土坑15・土坑53・土坑54	

調査では機械掘削でオリーブ褐色砂泥までを除去し、オリーブ褐色砂泥下面を第１面、第１層下面を第２面として、それぞれ遺構検出を行った。第１面では室町時代前期から江戸時代前期の遺構、第２面では平安時代中期から室町時代中期の遺構を検出した（表10）。以下では、遺跡を理解する上で重要と判断した遺構を検出面ごとに報告する。なお、検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平安京・京都Ⅰ期～Ⅻ期の編年案を準用する。[4)]

（２）第１面の検出遺構（図57、図版15・16）

第１面では井戸・土坑・溝・柱穴を検出した。

井戸12　調査区北東部で検出した。北側は攪乱を受けるが、掘形は直径約1.4mの円形に復元できる。深さは1.0m以上である。石組などの井戸側はない。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅺ期の遺物が出土した。

土坑５　調査区南東部で検出した。平面形はやや不整形な楕円形で、南北約2.5m、東西約1.7m、深さは約0.7mである。南側は約0.3m深くなる。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅺ期中段階の遺物がまとまって出土した。

土坑15　調査区中央東寄りで検出した。平面形はやや不整形な楕円形で、南北約2.7m、東西約1.6m、深さは約0.5mである。埋土は暗灰黄色砂泥で、Ⅺ期中段階の遺物がまとまって出土した。

土坑53　調査区東端で検出した。西側は土坑５と重複するが、土坑53の方が古い。平面形は南北約1.7m、東西1.4m以上の楕円形に復元できる。深さは約0.6mである。埋土は暗オリーブ褐色砂泥で、Ⅺ期古段階の遺物がまとまって出土した。

土坑54　土坑53の西側で検出した。東側は土坑５と重複するが、土坑54の方が古い。西側を攪乱されるが、平面形は南北約1.8m、東西1.2m以上の楕円形に復元できる。深さは約0.4mである。埋土は灰褐色砂泥で、Ⅺ期古段階の遺物がまとまって出土した。

土坑６　調査区南東部の壁際で検出した。南側は調査区外にある。北東側・西側を攪乱されるが、平面形は南北0.6m以上、東西1.8m以上の楕円形と推定できる。深さは約0.4mである。埋土は焼土粒・炭を含むにぶい黄褐色砂泥、オリーブ褐色砂泥などで、東から西に向けて堆積した状

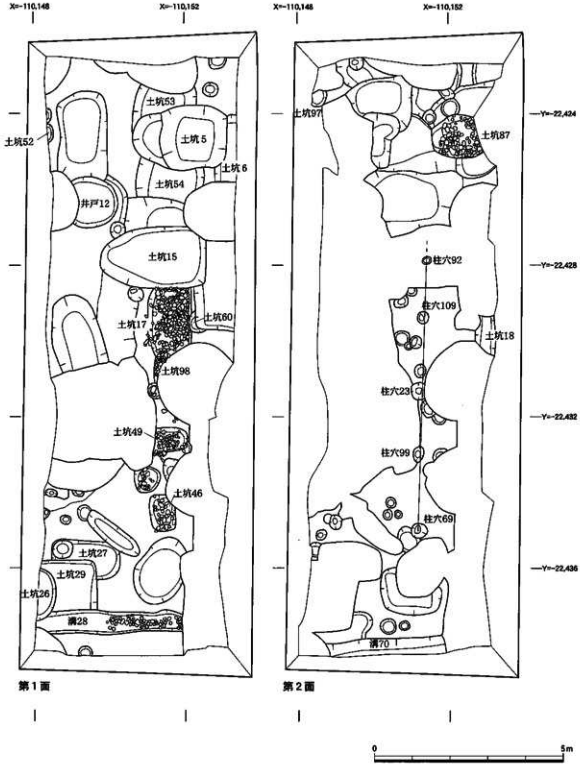


図57　遺構平面図（1：100）

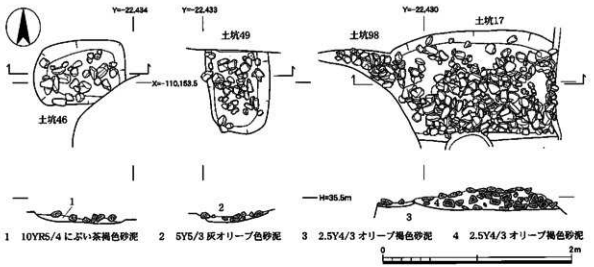


図58 土坑46・土坑49・土坑98・土坑17実測図（1：40）

況を示す。埋土からはX期新段階の遺物がまとまって出土した。大部分は積み重なった状態で出土した完形品を含む大量の土師器の皿である。

土坑26 西部北壁際で検出したため、北側は調査区外になる。平面形は直径約1.4mの円形に復元できる。深さは約0.8mである。埋土は焼土粒・炭を含むオリーブ褐色砂泥で、X期新段階の遺物がまとまって出土した。大部分は瓦が占め、焼けた壁土と考えられる焼土塊もある。瓦には「鉢」の字を刻んだ軒丸瓦や火を受けて赤く変色した平瓦・丸瓦が含まれる。

土坑17（図58） 中央部で検出した。東側は土坑15と重複するが、土坑17の方が古い。また、西端は土坑98に接するが、河原石の重なりや断面の観察から土坑17の方が新しい可能性が高い。南西側を撹乱されるが、平面形は南北約1.2m、東西1.8mの長方形に復元できる。深さは約0.2mであるが、上部が削平されているため、本来はさらに深かったと推定できる。埋土はオリーブ褐色砂泥で、大きさ5～15cmの河原石を多量に含む。河原石の並び方には規則性は見出せない。最上部でXI期中段階の遺物がわずかに出土した。

土坑46（図58） 西部で検出した。南東側を撹乱されるが、平面形は南北約0.7m、東西約0.9mの隅丸方形に復元できる。深さは約0.1mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、大きさ5～15cmの河原石を含む。河原石の並び方には規則性は見出せない。IX期からX期の遺物がわずかに出土した。

土坑49（図58） 中央部で検出した。北側を撹乱されるが、平面形は南北0.9m以上、東西約0.7mの隅丸方形に復元できる。深さは約0.1mである。埋土は灰オリーブ色砂泥で、大きさ5～15cmの河原石を含む。河原石の並び方には規則性は見出せない。IX期の遺物がわずかに出土した。

土坑98（図58） 中央部で検出した。東端は土坑17に接するが、河原石の重なりや断面の観察から土坑98の方が古い可能性が高い。大半を撹乱され、北東側の一部が残存するのみであるが、平面形は南北0.4m以上、東西0.7m以上の隅丸方形と推定できる。深さは約0.1mである。埋土はオリーブ褐色砂泥で、大きさ5～15cmの河原石を含む。河原石の並び方には規則性は見出せない。

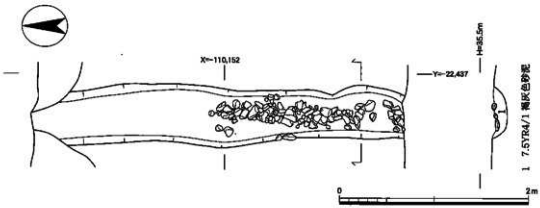


図59　溝28実測図（1：40）

遺物はほとんど出土していない。

土坑46・土坑49・土坑98はほぼ東西方向に並び、中心の間隔は土坑46と土坑49、土坑49と土坑98ともに約2.1mである。いずれも上部が削平されており、本来はさらに深かったと推定できる。規模・構造が共通することから一連の遺構と推定できる。

溝28（図59）　西部で検出した南北方向の溝である。土坑26と重複するが、溝28の方が古い。北側は調査区外に延びるが、南側は攪乱されて途切れる。断面形は浅いU字形で、長さ4.0m以上、幅約0.5～0.6m、深さ約0.2mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は褐灰色砂泥で、南半部分では大きさ約3～10cmの河原石を含む。Ⅶ期からⅨ期の遺物がわずかに出土した。

土坑27　西部で検出した。北西側は土坑29と重複するが、土坑27の方が古い。平面形は南北約1.8m、東西約1.0mの楕円形で、深さは約0.5mである。底部北東側に直径約0.5m、深さ約0.1mの浅いくぼみがある。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅵ期新段階からⅦ期古段階の遺物がまとまって出土した。焼締陶器の大甕の破片が多いことから、北東側のくぼみは甕の据え付け穴の可能性がある。

土坑29　西部北壁際で検出したため、北端は調査区外になる。北側は土坑6、西側は溝28と重複するが、土坑29の方が古い。平面形は南北1.8m以上、東西約1.9mの隅丸方形に復元できる。埋土は灰黄褐色砂泥で、Ⅸ期新段階の遺物が出土した。

土坑52　東部北壁際で検出したため、北側は調査区外になる。平面形は直径0.5m以上の円形と推定できる。深さは0.1m以上である。Ⅸ期からⅩ期の遺物がわずかに出土した。

土坑60　中央部で検出した。南東側を攪乱されるが、平面形は南北約0.4m、東西約0.6mの楕円形で、深さは約0.1mである。埋土はオリーブ褐色砂泥で、Ⅶ期中段階の遺物がまとまって出土した。

（3）第2面の検出遺構（図57、図版17）

第2面では土坑・溝・柱穴を検出した。

土坑87　東部南壁際で検出したため、南端は調査区外になる。北側は土坑5、南側は土坑6と重複するが、土坑87の方が古い。平面形は1.3m以上、東西約1.2mの円形に復元できる。深さは

約0.6mである。底面および側面に大きさ約5～10数cmの河原石を貼り付けるように積み上げる。埋土はオリーブ褐色砂泥で、X期古段階の遺物が出土した。

溝70 調査区西壁際で検出したため西側は調査区外になる。南北方向の溝で、北側でわずかに西に振る。東側は溝28と重複するが、溝70の方が古い。北側・南側は攪乱され途切れるが、それぞれ調査区外に延びると推定できる。断面形はV字形で、長さ3.2m以上、幅0.5m以上、深さ約0.5mである。底部は南に向けて傾斜する。埋土は黒褐色砂泥・暗灰黄色泥砂で、IX期の遺物が少量出土した。

柱穴69・柱穴99・柱穴23・柱穴109・柱穴92 東部から中央部にかけて検出した東西方向の柱穴列である。柱穴69は土坑46、柱穴99は土坑49の下面で検出した。柱穴は5基で、検出長は約7.1mである。東側でわずかに南に振る。柱穴は直径約0.3～0.4m、深さ約0.3～0.4mで、柱穴69・柱穴23・柱穴109は底部に大きさ約20cmの石を平坦な面を上にして据える。柱穴の間隔は西側から約2.0m・約1.7m・約1.9m・約1.6mである。埋土はオリーブ褐色砂泥・灰色砂泥・灰黄褐色砂泥などで、柱穴69・柱穴99からIX期、柱穴23からIX期からX期の遺物がわずかに出土した。

土坑18 中央部南壁際で検出した。東側・西側を攪乱されるため平面形は不明であが、南北約0.6m、東西1.1mの溝状と推定できる。深さは約0.2mである。埋土は暗灰黄色砂泥で、VI期中段階から新段階の遺物がまとまって出土した。

土坑97 東部北壁際で検出したため北側は調査区外となる。東側は攪乱されるが、平面形は直径約0.5mの円形に復元できる。深さは0.1m以上である。III期中段階の遺物がまとまって出土した。

3．遺　物

(1) 遺物の概要

調査では第1面・第2面のそれぞれの段階で遺物を採集したが、新しい時代の遺構に、より古い時代の遺物が混入することがしばしばあった。出土遺物は土器・瓦類が大部分を占め、他の遺物は少ない。全体では桃山時代から江戸時代の遺物が約3割、室町時代後期の遺物が約5割、室町時代前期から中期の遺物が約2割を占め、鎌倉時代以前の遺物は少ない（表11）。

なお、今回の調査では平安時代前期よりも古い時期の遺物は認めていない。

(2) 土器類

土器には土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉陶器・灰釉系陶器・緑釉陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器などがある。

平安時代前期から中期の土器は、土坑97以外はすべて後世の遺構埋土に混入して出土した。ほとんどが小片である。平安時代後期から鎌倉時代の土器は土坑・第2層のほか、後世の遺構埋土

表11　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期～中期	土師器・白色土器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器、瓦		土師器７点、黒色土器１点	０箱	少量
平安時代後期～鎌倉時代	土師器・瓦器・須恵器・灰釉系陶器、瓦、石製品		土師器３点、瓦器３点	０箱	少量
室町時代前期～中期	土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉系陶器・施釉陶器、土製品、石製品、金属製品		土師器44点、施釉陶器１点	５箱	３箱
室町時代後期	土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦類、石製品、金属製品		土師器35点、焼締陶器１点、輸入陶器１点、瓦類11点、焼土塊一括、焼瓦一括	16箱	０箱
桃山時代～江戸時代前期	土師器・瓦器・焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品		土師器38点、施釉陶器11点、輸入陶磁器３点、土製品３点、石製品２点	５箱	２箱
合　計		38箱	166点（７箱）	26箱	５箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より６箱多くなっている。

に混入して出土した。土師器の皿・瓦器の椀・鍋釜類が目立つ。室町時代前期から中期の土器の多くは土坑から出土した。土師器の皿が大部分を占めており、次いで瓦器の鍋釜類・焼締陶器の甕類などが多い。室町時代後期の土器は土坑６出土の土師器の皿がほとんどを占める。桃山時代から江戸時代前期の土器の多くは土坑からまとまって出土した。土師器の皿、焼締陶器の擂鉢、施釉陶器の椀・皿・鉢が多い。

土坑97（図60　１～８）　土師器皿（１～７）・高杯・甕、白色土器椀、黒色土器椀（８）・甕、須恵器杯・壷、灰釉陶器壷が出土した。土師器皿には小型皿（１～４）・大型皿（５～７）がある。いずれも口縁部が強く屈曲し、器壁は薄い。黒色土器椀は内外面とも黒色で、やや粗いミガキを施す。Ⅲ期中段階に属する。

土坑18（図60　９～14）　土師器皿（９～11）、瓦器椀（12）・鍋（13）・釜（14）、須恵器甕、中国製青磁椀などが出土した。土師器には赤色系土師器と白色系土師器がある[5]。赤色系土師器には小型皿（９～11）・大型皿がある。白色系土師器は少ない。瓦器椀は端部を丸くおさめ、低い高台が付く。体部内面に粗いミガキ、底部内面にジグザグの暗文を施す。瓦器鍋は体部外面に指の圧痕が顕著にのこる。瓦器釜は底部が欠損するが、球形の体部の三方向に脚が付くと考えられる。Ⅵ期中段階から新段階に属する。

土坑27（図60　15～33）　土師器皿（15～33）、瓦器椀・鍋釜類・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、施釉陶器壷、中国製白磁椀・皿、中国製青磁椀・壷などが出土した。土師器皿・焼締陶器甕が大部分を占める。赤色系土師器には小型皿（15～17）・大型皿（18～25）がある。小型皿はいずれも口縁部が内弯する。大型皿には器壁が厚いもの（18・19）と薄いもの（22・23）がある。白色系土師器には小型皿（26）・大型皿（27～33）があるが、小型皿は少ない。大型皿には

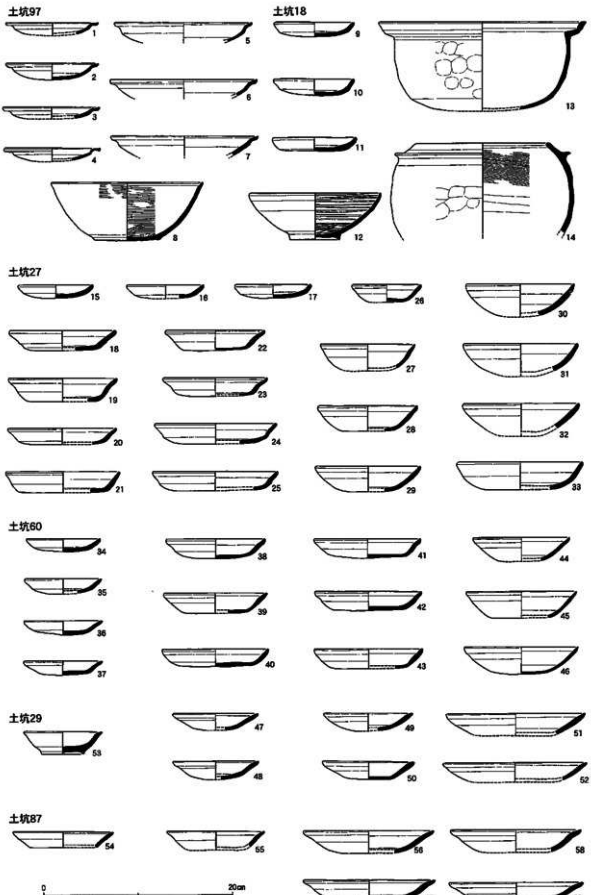


図60　土坑97・土坑18・土坑27・土坑60・土坑29・土坑87出土土器実測図（1：4）

底部の丸みが強いもの（30～32）と平底気味のもの（33）がある。いずれも器壁は厚い。焼締陶器甕は2個体以上の大型甕の破片がある。いずれも常滑産である。Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する。

土坑60（図60　34～46）　土師器皿（34～46）、瓦器椀・鍋釜類・火鉢、焼締陶器甕、中国製白磁椀などが出土した。赤色系土師器には小型皿（34～37）・大型皿（38～43）がある。小型皿には口縁部が内弯気味のもの（34）もあるが、外反するもの（36・37）が多い。白色系土師器には小型皿・大型皿（44～46）がある。大型皿はいずれも器壁が薄い。Ⅶ期中段階に属する。

土坑29（図60　47～53）　土師器皿（47～52）、瓦器鍋釜類・火鉢、焼締陶器甕、施釉陶器皿（53）、中国製青磁椀・壷などが出土した。赤色系土師器は少ない。白色系土師器（47～52）は口径が比較的小さいもの（47・48）から大きいもの（51・52）までである。施釉陶器皿は底部内面に花文を印文し、内外面全面に灰釉を施す。底部外面には胎土目痕がのこる。瀬戸産である。Ⅸ期新段階に属する。

土坑87（図60　54～59）　土師器皿（54～59）、瓦器鍋釜類・火鉢、焼締陶器擂鉢・壺・甕、

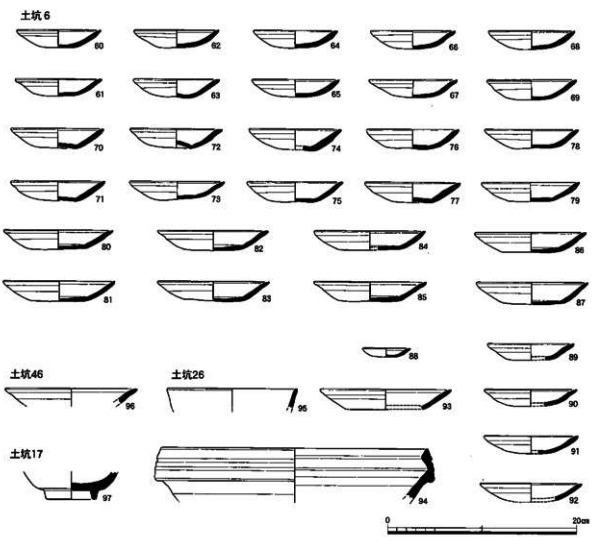


図61　土坑6・土坑26・土坑46・土坑17出土土器実測図（1：4）

施釉陶器鉢などが出土した。赤色系土師器は少ない。白色系土師器（54～59）は土坑29出土土器と比較すると底部から口縁部がより大きく開く。X期古段階に属する。

土坑６（図61、図版18　60～87）　土師器皿（60～87）、焼締陶器甕、施釉陶器椀などが出土した。ほとんど全てを土師器皿が占める。完形もしくは大きな破片が積み重なった状態で出土していることから一括して投棄されたことがわかる。また、破片数は赤色系土師器20片に対して、白色系土師器は10,909片を数え、圧倒的に白色系土師器の割合が大きい。白色系土師器には丸底の中型皿（60～69）・平底で底部内面中央にヨコナデによる径の小さな浅い圏線がめぐる中型皿（70～79）・平底で底部内面に明瞭な圏線がめぐる大型皿（80～87）がある。丸底の中型皿の口径は8.8～9.4cm、平底の中型皿の口径は9.8～10.3cm、大型皿の口径は11.6～12.1cmでまとまる。また、平底の中型皿には明らかに底部を押し上げているもの（72）がある。X期新段階に属する。

なお、口縁端部に煤の付着がみられないことから、灯明皿に使用されたものはない。

土坑26（図61　88～95）　土師器皿（88～93）、瓦器火鉢、焼締陶器擂鉢（94）、施釉陶器椀（95）などが出土した。赤色系土師器は少なく、小型皿（88）のみである。白色系土師器には丸底の中型皿（89～92）・大型皿（93）がある。擂鉢は備前産（94）のほか信楽産がある。施釉陶器椀は丸椀の小破片で、内外面に厚く藁灰釉を施し乳白色を呈する。朝鮮産である。X期新段階に属する。

土坑46（図61　96）　土師器皿がわずかに出土したのみである。いずれも白色系土師器である。96は小破片より復元したため口径の精度は低いが、口縁部の形状はIX期からX期の特徴をそなえる。

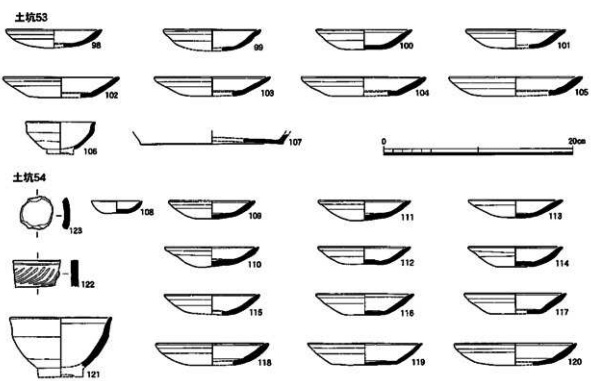


図62　土坑53・土坑54出土土器・土製品実測図（１：４）

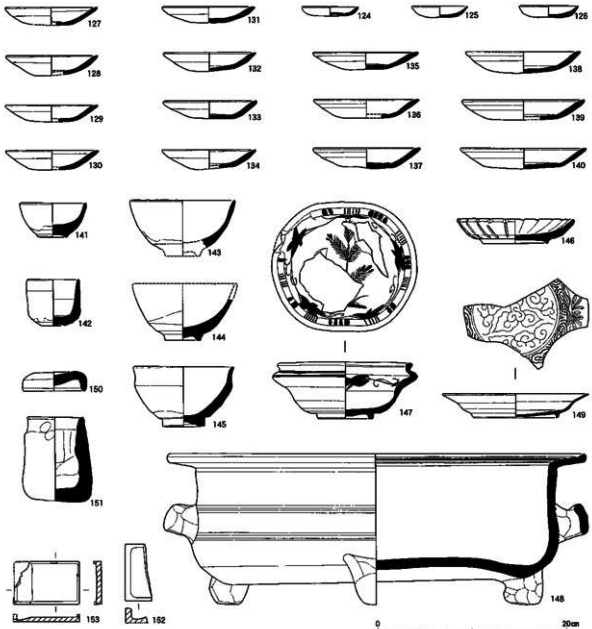


図63　土坑15出土土器・土製品・石製品実測図（1：4）

土坑17（図61　97）　土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、灰釉系陶器、施釉陶器、中国製磁器などが出土したが、ほとんどがより古い時代の遺物が混入したものである。施釉陶器椀（97）は最上部にめり込む状態で河原石の隙間から出土した。底径が大きいことから大型椀と考えられる。高台接地面以外に白色釉を施す。外面は2次焼成を受け、釉薬が変色・変質している。唐津産と推定する。Ⅻ期中段階に属する。土坑17の下限をしめす遺物としてここに図示する。

土坑53（図62　98～107）　土師器皿（98～105）、焼締陶器甕、施釉陶器椀（106）・壷（107）などが出土した。土師器皿には中型皿（98～101）・大型皿（102～105）がある。施釉陶器椀は口縁部が屈曲する小型椀で、内外面に鉄釉を施し褐色を呈する。瀬戸・美濃産である。施釉陶器壷は平底の底部片である。器壁は薄い。外面に灰釉を施す。底部外面には胎土目痕がのこる。朝

鮮産である。XI期古段階に属する。

土坑54（図62　108～122）　土師器皿（108～120）、焼締陶器擂鉢、施釉陶器椀（121）・鉢などが出土した。土師器皿には小型皿（108）・丸底の中型皿（109～114）・平底の中型皿（115～117）・大型皿（118～120）がある。施釉陶器椀は口縁部が屈曲する椀で、内外面に鉄釉を施し褐色を呈する。瀬戸・美濃産である。XI期古段階に属する。

なお、122は板状でわずかに内弯する口縁部の破片である。外面は平行する弧文に白土を象嵌したのち、内外面に施釉し灰色を呈する。朝鮮産粉青沙器の方形に近い形態の壷の破片と推定する。

土坑15（図63、図版18　124～149）　土師器皿（124～140）、瓦器香炉・火鉢・灯火具、焼締陶器壷・甕、施釉陶器椀（141～145）・皿（146）・鉢（147・148）・壷、中国製白磁皿（149）、中国製青花椀・皿などが出土した。土師器皿には小型皿（124～126）・中型皿（127～134）・大型皿（135～140）がある。施釉陶器には瀬戸・美濃産と唐津産があり、破片数では瀬戸・美濃産の割合が多い。141は小型の丸椀、142は小型の筒型椀で内外面に灰釉を施す。ともに唐津産である。143・144は丸椀で内外面に灰釉を施す。ともに唐津産である。145は口縁部が屈曲する椀で、内外面に鉄釉を施し黒色を呈する。瀬戸・美濃産である。146は内面を型押し、外面・口縁端部を削って花弁を表現する。内外面に長石釉を施す。底部内外面にそれぞれ３箇所の小さな目痕がのこる。瀬戸・美濃産である。147は平面形が小判形で口縁部が強く屈曲する。内面には若松・楓、口縁部には列点、外面屈曲部には直線を鉄釉で絵付けする。瀬戸・美濃産である。148は大型の三足鉢である。底部はやや上底で、体部は屈曲してほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は屈曲して開き、端部は上方につまみ上げる。底部の３方に中実の足、体部の２方に把手を貼り付ける。体部外面に２条一組で２箇所、口縁部内面に４条の沈線がめぐる。内外面全面に灰釉を施すが、垂らし掛けによる隙間が多い。底部外面縁辺全周に17箇所の二枚貝の貝目痕がのこる。また、一部には焼成による小さな亀裂がある。中国製白磁皿（149）は、器壁が薄く、内面の文様は型押しで施文する。別個体の破片も確認している。中国製青花はいずれも漳州窯系の製品である。

（３）瓦類

瓦類には軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・面戸瓦、塼などがある。平安時代の瓦は全て後世の遺構埋土に混入して出土した。ほとんどが小片で、わずかに軒瓦を認めたが、瓦当文様が確認できるものはない。また、１点のみ緑釉丸瓦がある。鎌倉時代から室町時代の瓦は土坑26出土がほとんどを占める。ほかに土坑６から少量出土した。江戸時代以降の瓦はほとんどが桟瓦である。

土坑26（図64～66、図版18）　軒平瓦（154）・軒丸瓦（155）・平瓦（157～160）・丸瓦（161・162）・面戸瓦（156）が出土した。一括して出土しており、まとまりがよい。全体的にいずれも大振りである。

軒平瓦は１点のみで、文様は巻き込みの強い唐草文である。瓦当部分の成形は顎部を貼り付ける。上端は面取り状の横方向のヘラケズリ、裏面はヨコナデである。平瓦部分は凹面はミガキ、凸面はナデ、側面はタテナデである。軒丸瓦は瓦当部分の破片３点と丸瓦部分の破片が１点ある。

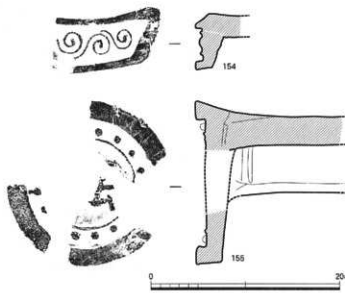


図64　土坑26出土瓦拓影・実測図１（１：４）

実測図ではこれらを組み合わせた。文様は内区に「能」の異体字である「觧」の字、外区には珠文がめぐる。瓦当部分を貼り付ける平瓦端面にはヘラによるカキヤブリを施す。瓦当裏面は横方向のナデ、側面はヨコナデである。丸瓦部分は凸面はタテミガキ、側面はケズリののちタテナデで、凹面には布目と抜き縄の痕跡がのこる。

面戸瓦は１点のみである。台形に成形する。凸面はタテナデとタテミガキ、側面はタテケズリで、凹面には布目と抜き縄の痕跡がのこる。平瓦には厚手のもの（157・158）と薄手のもの（159・160）がある。凹面の一方の上端を横方向のヘラケズリで面取り状に成形する（157・159）。いずれも凹面・凸面・側面ともていねいなナデなどで平滑に仕上げる。157・159の凸面には離れ砂、158の凸面にはわずかに布目がのこる。

丸瓦は２個体をほぼ完形に復元することができた。凸面は縄タタキののち丁寧なタテナデ、側面は縦方向のヘラケズリで、凹面には布目と抜き縄の痕跡がのこる。また、161の凸面には粗いタテミガキ、162の凹面には糸切り痕が観察できる。

なお、平瓦・丸瓦には火を受けて赤く変色したものがあり、中には葺土が融着しているものも見られる。

塼（図67）　塼は２点で、163は井戸12、164は土坑52から出土した。いずれも破片であるが、平面形は方形と考えられる。全ての面にナデを施すが、広い面は片方の面が丁寧で、もう片方の面は粗いので表裏がわかる。163の裏面には糸切り痕がのこる。

（４）その他の出土遺物

その他の出土遺物には土製品・石製品・金属製品などがある。

土製品　桃山時代のおはじき（図62　123）・江戸時代前期の焼塩壷（図63　150・151）がある。123は施釉陶器椀の破片を打ち欠いて円形に加工したものである。土坑54から出土した。焼塩壷は成形・調整とも粗雑で、粗いナデで仕上げる。土坑15から出土した。

石製品　江戸時代前期の硯（図63　152・153）がある。いずれも平面形は方形で、材質は粘板岩である。ともに土坑15から出土した。153は小型で、底面・側面に漆や漆下地が付着しているので、他の材質の台に接着されていたと推定できる。また、平安時代後期から江戸時代前期にかけて、わずかずつながら砥石がある。材質は全て粘板岩である。

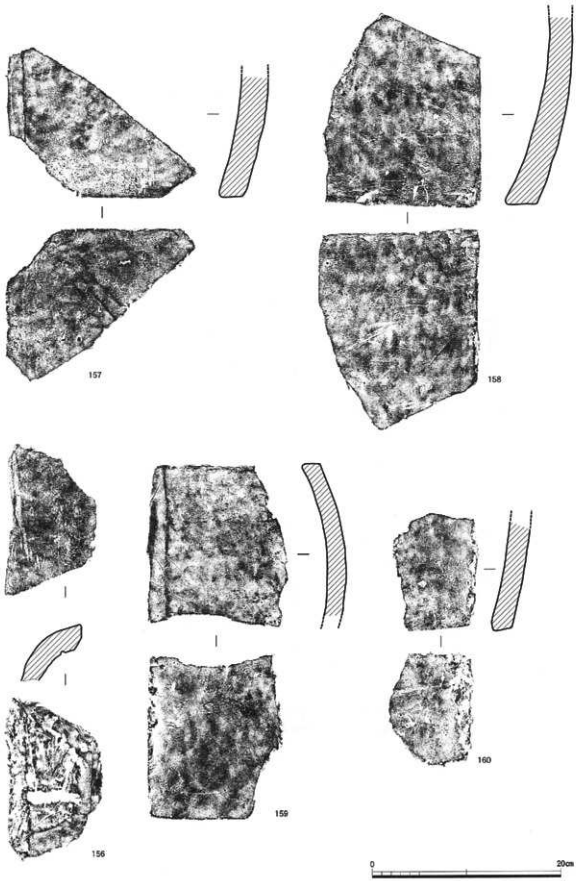


図65　土坑26出土瓦拓影・実測図２（１：４）

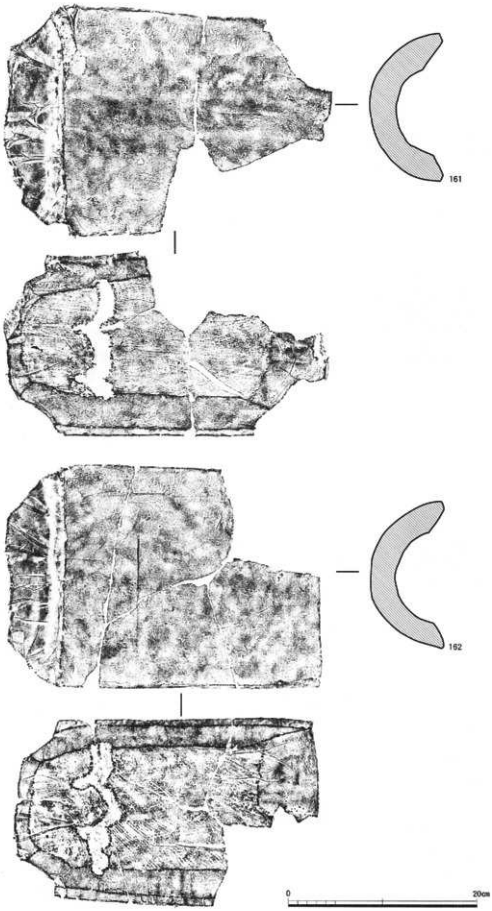


図66　土坑26出土瓦拓影・実測図３（１：４）

金属製品　室町時代前期の土坑27から銅銭が9点出土した。判読できる銭銘には「開元通寶」・「皇宋通寶」・「聖宋元寶」・「元豊通寶」・「嘉祐通寶」がある。また、室町時代前期から江戸時代前期にかけて、わずかずつながら鉄釘がある。

その他（図版18）　土坑26・土坑6から焼土塊・焼土粒・炭が出土した。焼土塊にはスサの痕跡があり、壁土と推定できる。

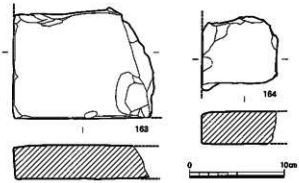


図67　井戸12・土坑52出土遺物実測図（1：4）

4．まとめ

今回の調査では次のような調査地の歴史的変遷を明らかにすることができた（図68）。

調査で検出した最も古い遺構は平安時代中期（Ⅲ期）の土坑97である。土器がまとまって出土した。このほかにも平安時代前期から中期の遺物は、少量ながらも後世の遺構埋土に混入して出土していることから、平安京造営と同時に調査地周辺でも整備が行われたと推定できる。

しかしながら、その後の平安時代後期から鎌倉時代（Ⅳ期からⅥ期）にかけても検出した遺構数は少ない。この時期の包含層である第2層が、調査地のごく一部でしか認めることができなかったことからみても、大部分は室町時代以降に攪乱されたと考えられる。

室町時代前期から中期（Ⅶ期からⅨ期）には検出遺構数、遺物出土量とも増加する。調査区西端の溝70は規模が大きいことから区画施設の可能性がある。土坑は調査区東部・西部に集まる傾向が看取できる。調査区東部では地山の粘質土がやや厚く堆積していることから、この部分の土坑は土取穴で、土取りののち土器などの廃棄が行われたと考えられる。これに対して調査区西部では地山が砂礫であり土取りは考えにくい。土坑27の底部には焼締陶器大甕を掘り付けたと考えられるくぼみがあることから、地下式収納施設であった可能性がある。調査区中央部には東西方向の柱穴列がある。柱穴列の北側・南側とも攪乱されるため詳細は明らかでないが、柵または建物の一部が見つかったと考えられる。

室町時代後期（Ⅹ期）は調査地に本能寺が造営された時期であるので、詳しく報告することとしたい。この時期の遺構は2つの段階に分けることができる。より古い段階の遺構は土坑17・土坑46・土坑49・土坑98・溝28、より新しい段階の遺構は土坑6・土坑26である。

先に、より新しい段階の遺構について検討する。まず層位的には、2つの土坑とも壁際で検出したので、壁面の観察からオリーブ褐色砂泥を成立面とする遺構であることがわかる。出土遺物をみると、2つの土坑の土師器皿はともにⅩ期新段階に属する。また、土坑26からは「餓」の字を刻んだ軒丸瓦や火を受けて赤く変色した平瓦・丸瓦、焼けた壁土と考えられる焼土塊・焼土粒・炭が出土した。同様に土坑6からも少量ながら火を受けて赤く変色した平瓦・丸瓦、焼土

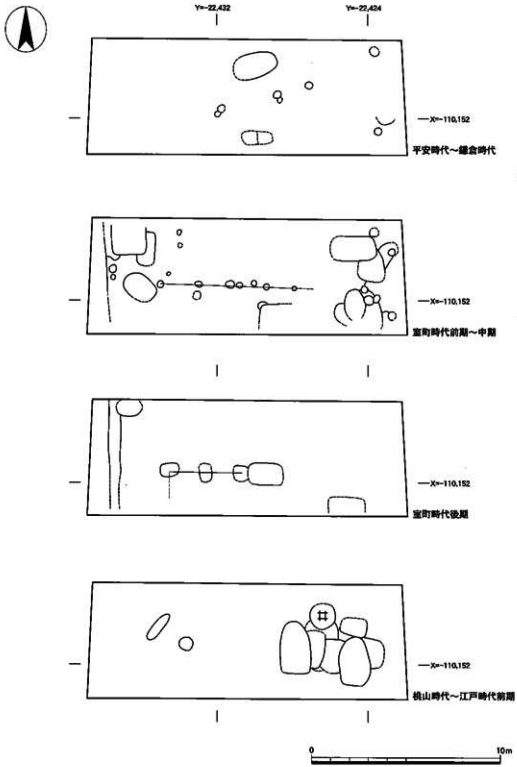


図68　遺構変遷図（1：200）

塊・焼土粒・炭が出土した。「蝕」の字を刻んだ軒丸瓦は本能寺で使用されたものと判断できる。また、この時期の火災は本能寺の変によるものとみて間違いない。したがって、土坑6・土坑26は本能寺の変直後の遺構であり、オリーブ褐色砂泥はこの地での本能寺の再建（1582～1591）に関わる整地層と推定できる。

次により古い段階の遺構について検討する。遺構の重複関係は次のように整理できる。土坑17

は刈期中段階の土坑15よりも古い。土坑49はⅨ期の柱穴99よりも新しい。土坑46はⅨ期の柱穴69よりも新しい。溝28はⅨ期新段階の土坑29よりも新しく、Ⅹ期新段階の土坑26よりも古い。出土遺物をみると、上限は土坑46埋土から出土したⅨ期からⅩ期に属する土師器皿、下限は土坑17最上部にめり込む状態で河原石の隙間から出土したⅪ期中段階の施釉陶器椀である。これらからⅩ期古段階以降で本能寺の変以前の遺構であることがわかる。

土坑46・土坑49・土坑98は約2.1m（7尺）の間隔で東西方向に並び、上部が削平されるが埋土に河原石を含む状況から礎石を据えた柱穴の根石部分と考えられる。遺構の時期はこの地で本能寺が再興された時期（1545～）におさまるので、本能寺の建物の一部を検出したと判断する。また、土坑46の北側では類似する遺構を認めておらず、土坑46から西側へ約2.7m（9尺）の位置には南北方向の溝28があることから、建物の北西隅部分に当たる可能性が高い。東側・南側への広がりは攪乱のため不明である[6]。溝28は建物西側の雨落溝または境内の区画溝と考えられる。土坑17はやや規模が大きく、西側の土坑98よりも新しい可能性が高いが、河原石を含む構造は共通しているので一連の遺構と推定できる。直接の機能は不明であるが、建物の何らかの施設に伴う遺構であると考える。なお、土坑46の中心は平安京の条坊復元では六角小路南築地芯から約48m、油小路東築地芯から約46mに位置する。今後の周辺の調査に期するところが大きいが、本能寺の建物配置復元の一つの手掛かりになるであろう。

桃山時代から江戸時代（刈期）には調査区東部に土坑が重複して分布する。室町時代前期から中期の土取穴の西側に位置していることから、これらの土坑も土取穴で、本能寺が移転した跡地で再び土取りが繰り返し行われ、土取りののちは土器などが廃棄されたと推定できる。ただし、室町時代前期から中期に比べると遺物の出土量は格段に多い。

また、これらの土坑の上層には江戸時代中期の包含層である暗褐色砂泥が堆積していることから、この頃になると現在と同様、小川通に面して建物が建ち並んでいたことであろう。

註

1）『京都市内遺跡立会調査報告　平成7年度』京都市文化市民局　1996年

2）「平安京左京四条二坊」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1999年

3）平尾政幸『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5（財）京都市埋蔵文化財研究所　2003年

4）小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年

5）『平安京左京二条四坊十町』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2001年

6）室町時代後期（Ⅹ期）の遺構には、これらの他にⅩ期古段階の土坑87がある。建物が南東方向に展開すると仮定すると土坑87は建物内部に位置することとなる。調査区東部には室町時代前期から中期の土坑が集まる状況からみると、むしろ、土坑87は建物に先行すると考えた方がよい。そうすると建物の時期はⅩ期中段階以降に限定されることとなり、まさしく本能寺が復興された時期に合致する。

Ⅴ　平安京西寺跡・唐橋遺跡

1．調査経過

調査地は、京都市南区唐橋西寺町35-12に所在する。今回の調査は、建物の新築工事に先立って実施されたものである。対象地は、平安京西寺跡（平安京右京九条一坊十四町）および古墳時代の集落跡である唐橋遺跡にあたる。平安京西寺跡の調査では23次となる。

西寺は、平安京造営時に東寺と共に朱雀大路の左右に造寺された。東寺は、現在も往時の様相がうかがえるのに対し、西寺は、大正10年（1924）に史跡指定された講堂基壇のマウンド状の高まりを西寺児童公園に残すのみである。西寺跡の発掘調査は、京都府教育庁文化財保護課が昭和34年（1959）に初めて実施した。この調査では、東僧坊の礎石や基壇を検出している。それ以降、奈良国立文化財研究所・鳥羽離宮跡調査研究所・当研究所などによりこれまでに20数次にわたる調査が実施されている。主要な調査については、表12にまとめた。これらの調査により、造営時の主要伽藍配置はほぼ明らかになっている。

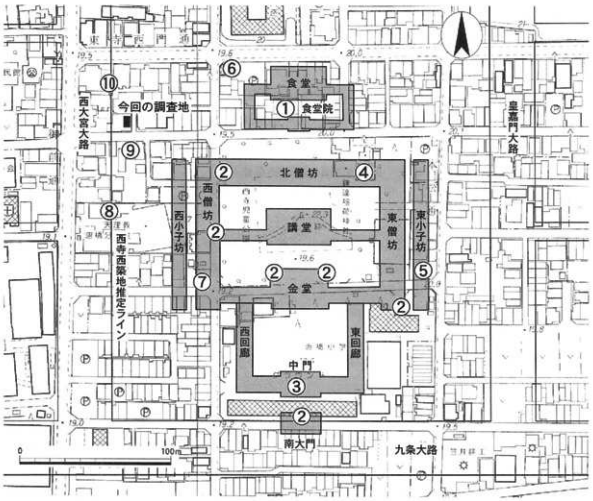


図69　調査位置図（1：2,500）

表12　周辺の主な調査一覧表　　※№は図69の調査地点の数字と対応

№	調査年度	調査概要	調査主体	文　献
1	1961年	食堂院（礎石、礎石跡）	京都府教育庁文化財保護課	「史跡西寺跡」鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
2	1962年	金堂、南大門、東西僧坊（礎石、礎石跡、基壇）	京都府教育庁文化財保護課 奈良国立文化財研究所	「史跡西寺跡」鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
3	1974年	中門、東回廊、南大門（雨落ち溝、基壇、地覆石）	京都市教育委員会	「史跡西寺跡」鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
4	1974年	北僧坊（礎石跡）	京都市文化観光局文化財保護課	「史跡西寺跡」鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
5	1977年	東僧坊（礎石跡、雨落ち溝、基壇）	(財)京都市埋蔵文化財研究所	『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅱ　1978年
6	1977年	大炊殿（礎石）	京都市文化観光局文化財保護課	『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-Ⅱ　1978年
7	1980年	西僧坊（基壇、礎石跡）	(財)京都市埋蔵文化財研究所	「第19次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告　昭和55年度』1981年
8	1980年	西寺西築地（築地）	(財)京都市埋蔵文化財研究所	「第20次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告　昭和55年度』1981年
9	1980年	土壇、集積遺構	(財)京都市埋蔵文化財研究所	「第18次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告　昭和55年度』1981年
10	1997年	西寺西築地（築地犬走）	京都市文化観光局文化財保護課	「V西寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報』　1998年

今回の調査地は、周辺の調査や西寺の復元推定ライン[1]などから、西寺西築地内に位置していることがわかっており、関連する遺構が検出されると想定された。付近では、北西に約25m離れた所で京都市埋蔵文化財調査センターが1997年に調査（表12-10）を行っており、西寺西限を区切る西大宮大路の東側側溝を検出している。

調査は、2007年2月16日に、北側に隣接する民家の養生を行ったうえで調査区を設定し、2月19日から重機掘削を開始した。排土は敷地が狭いため土置き場がなく場外搬出とした。3月2日に東壁付近を一部拡張して確認調査を行い、全ての作業を終了した。調査の結果、西寺西限の築地に関連する遺構は検出できなかったが、湿地状の遺構や平安時代の柱穴を検出した。

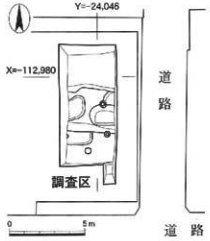


図70　調査区配置図（1：250）

図71　調査前全景（南から）

図72　作業風景

2．遺　構

（1）基本層序（図73）

調査区南部では現代盛土・近世以降の整地層の下に厚さ約10mの黄灰色～灰黄褐色砂泥層（1層）があり、次に褐色砂泥が混じる厚さ20cm程の灰黄褐色砂泥層（3層）が堆積する。その下には遺物を少量含んだ厚さ30cmの灰色砂泥砂質層（9層）があり、以下、地山の褐灰色粗砂・灰色粘土（10・11層）となる。調査区北部では、現代盛土・近世以降の整地層の下は、12世紀の遺物を含んだ黄灰色～灰黄褐色砂泥層（2層）が20～25cmあり、その下層は中央部まで続く薄い黄褐色砂泥層（4層）がみられる。次に9世紀から10世紀後半の遺物を多量に含んだ10～15cmの黄灰色粘質土層（5層、落込み1）が、その南に褐灰色粗砂（7層、落込み7）広がり、以下、地山となる灰色粘土（11層）が堆積する。

西寺が存続した時期の遺構としては、中央部から北部に続く黄褐色砂泥層（4層）の下で数基の遺構を検出した。

（2）検出した遺構（図73、図版19）

検出した遺構は、平安時代の柱穴、土坑および湿地状落込みである。

落込み1　調査区の北側の約1／3を占める湿地状の遺構。南北250cm、東西210cm以上。埋土は黄灰色粘質土で深さは約15cmある。埋土からは9世紀から10世紀後半の土師器皿・高杯・甕・鍋、須恵器甕、緑釉陶器椀、軒丸瓦・軒平瓦などが出土している。

柱穴2　土坑6、落込み7の上面で検出した。掘形は長径が50cm、短径が40cm、深さ20cmの楕円形を呈し、柱痕跡は径約20cmある。埋土は暗オリーブ褐色砂泥で、柱痕跡から土師器皿、丸瓦の小片が出土した。

柱穴3　灰色砂泥砂質層（9層）の上面で検出した。掘形の径約40cmの円形で、深さ25cm、柱痕跡は径約20cmある。埋土は暗灰黄色砂泥で、10世紀の土師器皿、瓦の小片が出土している。

柱穴4　灰色砂泥砂質層（9層）の上面で検出した。径約25cmの円形で、深さは20cm。埋土は黄灰色砂泥粘質で、柱痕跡は検出していない。

土坑5　灰色砂泥砂質層（9層）の上面で検出した。径約40cm、深さ5cmの浅い窪み状の土坑で、埋土は褐灰色砂泥。埋土から土師器皿、須恵器甕の小片が出土している。

土坑6　落込み7の上面で検出した。南北130cm、東西160cm以上の土坑。埋土は黄灰色泥砂。土師器皿、黒色土器甕の小片が出土している。

表13　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代中期	柱穴、土坑、湿地状落込み	

図73　遺構実測図（1：50）

落込み7　調査区の中央部の1/3を占め、南側から北へ下っている。埋土は褐灰色粗砂で、10世紀前半の土師器皿・甕、須恵器杯・杯蓋・甕、瓦などに混じって古墳時代の土師器甕、須恵器杯・壷の小片が出土している。

土坑8　落込み7の下で検出した。南北180cm以上、東西80cm以上、深さ10cmの浅い窪み状の土坑。埋土は暗黄灰色泥砂。埋土からは土師器皿、9世紀前半の須恵器杯蓋が出土している。

土坑9　落込み7の上面で検出した。南北150cm以上、東西100cm以上、深さ10cmの不定形を呈する浅い土坑。埋土は黄灰色粘質土。埋土からは土師器皿・甕、古墳時代の須恵器壷の小片が出土しているがいずれも混入である。

3．遺　物

（1）遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、整理箱で8箱である。その大半が9世紀から10世紀の土器類と瓦類である。

平安時代の遺物は主に落込み1・落込み7から出土している。土師器皿・甕・高杯脚、須恵器杯・杯蓋・甕、黒色土器甕、緑釉陶器椀、軒丸瓦・軒平瓦などがある。

その他に古墳時代の土器類が少量出土しているが、全て混入したものである。落込み7からは土師器高杯、須恵器壷の小片、土坑9からは須恵器甕の小片が出土している。

出土した遺物はほとんどが小片で、磨滅が激しいものもあり、図化できないものが多い。

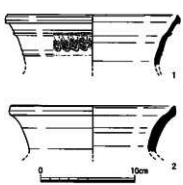


図74　古墳時代の土器実測図（1：4）

（2）出土遺物

土器類

古墳時代の土器（図74、図版20）　1は落込み7から出土した5世紀後半の須恵器壷で、頸部には凸帯が巡り、櫛描き波状

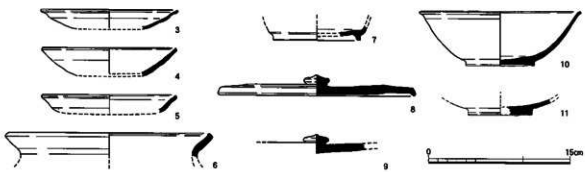


図75　平安時代の土器実測図（1：4）

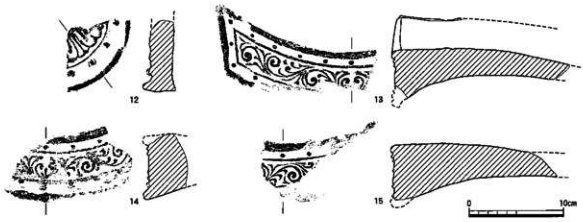


図76　軒瓦拓影・実測図（1：4）

文を施している。2は土坑9から出土した6世紀の須恵器甕である。

平安時代の土器（図75、図版20）　落込み1から土師器皿・杯・甕（3・4・6）、緑釉陶器椀（10・11）が出土している。これらは9世紀後半～10世紀前葉のものであろう。土坑6からは9世紀後葉の土師器皿（5）が出土している。土坑8からは須恵器蓋・杯（7・9）が出土している。地山直上の灰色砂泥層から出土した須恵器杯蓋（8）は、胎土は精緻で7・9と同様9世紀前半のものである。

なお、落込み7から出土した10世紀前葉の土師器皿・甕、須恵器杯・甕などはいずれも小片で、図化できなかった。

瓦類（図76、図版20）

軒瓦は全て落込み1から出土している。12は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、外区には珠文が巡り、細い界線が花文に近い位置で廻る。蓮弁は子葉をもち、Y形の間弁は中房までのびる。中房は不明である。13～15は均整唐草文軒平瓦である。13は界線で区切られた外区と脇区に珠文を配し、内区には上向きになったC字状の中心飾りから、先端が丸くなる唐草文が左右に3転している。

表14　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器		須恵器2点		
平安時代前期	土師器、須恵器、瓦類		土師器1点、須恵器3点、軒丸瓦1点、軒平瓦3点		
平安時代中期	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦類		土師器3点、緑釉陶器2点		
平安時代後期	土師器、須恵器、灰釉陶器				
鎌倉時代以降	瓦器、施釉陶器、焼締陶器、				
合　計		8箱	15点（1箱）	6箱	1箱

中心飾りの部分は磨滅している。14は13と比べると唐草文の先端の形状が異なり、C字状の中心飾りの中に「小」の字を逆さにした文様があるが、13と同文の可能性がある。15も13・14と同様の意匠と思われるが、唐草文の先端部の形状が異なっている。平瓦部凹面には布目痕が残る。12～15の軒瓦は、大きさ・文様などから栗栖野瓦窯産と考えられる。

遺物の約半分を占めている丸・平瓦は、主に落込み1から出土しているが、ほとんどが小片であった。また、出土した瓦類には刻印や記号などは認められなかった。

4. まとめ

調査地は西寺寺域内の北西隅にあたり、西築地に関連する遺構の検出が期待されたが、今回の調査では発見できなかった。しかし、以下のことがわかった。

今回の調査区から約8mほど南へ離れたところで1980年に実施した発掘調査（表12-9）では、地表下約50cmで平安時代の遺構が検出されている。また、北西方向へ約25m離れた地点で実施された1997年の試掘調査（表12-10）の結果では、地表下約80cmで平安時代の遺構が検出されている。当該地はその中間地点となり、南から北に向かって下る土層の堆積を確認できた。この土層の堆積は、落込み1の埋土から出土した遺物が10世紀代のものであること、南部の地山直上の出土遺物が9世紀前半であることから、この範疇におさまると考えられる。西寺は正暦元（990）年[3]に塔以外は焼失し、更に天福元（1233）年[4]にはその塔も焼けて再建されなかったという記述がある。今回の一連の土層の堆積はこの間のものである。

ほかに、柱穴を3基検出した。いずれも規模が小さく、性格は不明であるが、西寺寺域内北西隅の状況を示す成果といえる。

註

1） 杉山信三『史跡西寺跡』 鳥羽離宮跡調査研究所 1979年

2） 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』（有）京都編集工房 2005年

3） 『日本紀略』正暦元年二月二日条

4） 『明月記』天福元年十二月二十五日条

Ⅵ　法勝寺跡・岡崎遺跡

1．調査経過

調査地は、白河天皇が創建した法勝寺の伽藍北辺地にあたる。調査地の東を通る南北通りは法勝寺中心伽藍の中軸にほぼ乗っており、調査区の南約100mの地点には金堂基壇が遺存している。金堂跡および回廊の発掘調査は昭和50年に行われており、金堂の版築基壇や礎石下に据えられた大規模な根石群を良好な状態で検出し、柱の位置を推定することができた。また、昭和61年には金堂基壇の東を発掘調査し、金堂に取り付く回廊基壇の南へ折れる部分と雨落ち溝を検出している。

発掘調査に先立ち、京都市文化財保護課によって敷地東半部と西半部で試掘調査が行われた。西半部の試掘トレンチで南北方向の溝の東肩を検出し、多くの平安時代後期の瓦が出土した。そのため、京都市文化財保護課の指導のもと、敷地西半部に東西約12.5m、南北約９mの調査区を設定し、発掘調査を行うこととなった。なお、東半部の試掘トレンチでも柱穴等が確認されたが、工事掘削が届かないことが判明したため、調査対象外となった。発掘調査は試掘調査成果を受けて、金堂跡の北側に所在したと考えられる堂舎群の有無を確認するとともに、法勝寺伽藍の北限のデータを得ることを目的に行った。

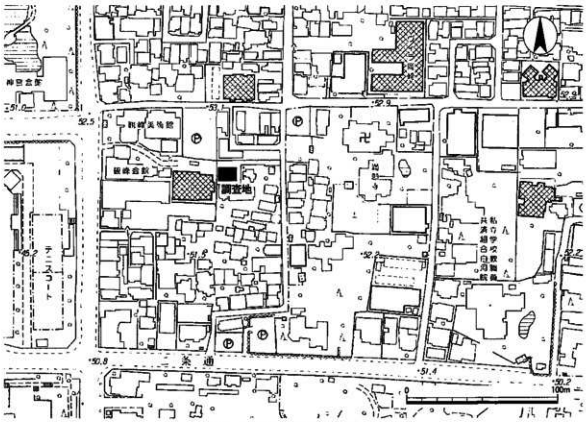


図77　調査位置図（1：2,500）

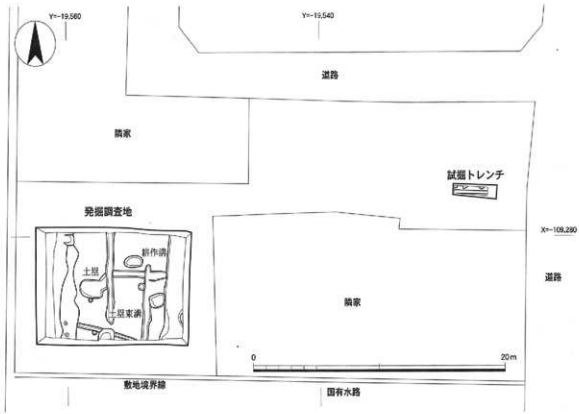


図78　調査区配置図（1：300）

調査は盛土を重機で除去したところ、調査区西端部において南北方向の溝状遺構を確認した。この遺構は試掘調査で確認していた南北方向の溝であり、幅が2m以上あることが判明した。ただ、溝の上層から出土する遺物は平安時代後期の瓦類とともに江戸時代以降の土器類を含んでいた。また、断面観察によれば溝廃絶後には東側に接して江戸時代後期以降の土塁が存在し、この溝の形成時期が問題となった。最終的に溝最下層まで掘り下げたところ、出土遺物は16世紀末から17世紀初頭までしか遡らないことが判明し、近世の岡崎村に関する遺構であることが判明した。なお、溝の東では数条の耕作溝と撹乱土壙を検出しただけで、法勝寺の遺構は全く確認できなかった。調査ではこれらの遺構の写真および実測図などの記録を作成し、発掘調査終了後は地盤改良を行いながら埋め戻しを行い、すべての作業を終えた。

図79　調査前全景（北西から）

図80　作業風景

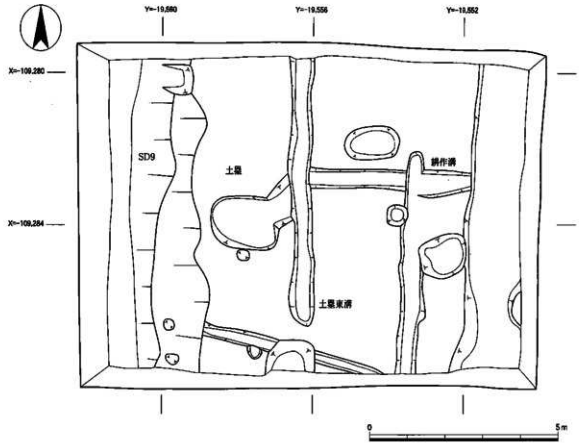
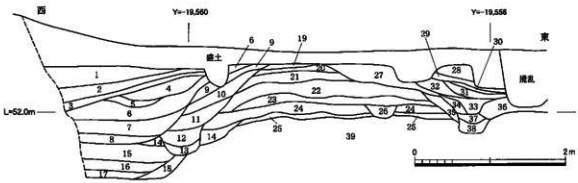


図81　遺構平面図（1：100）



1　10YR3/1 黒褐色砂泥（締まり有り）
2　10YR2/1 黒色砂泥
3　10YR3/2 黒褐色砂泥
4　10YR2/2 黒褐色砂泥
5　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
6　10YR3/2 黒褐色砂泥
7　10YR3/1 黒褐色砂泥
8　10YR4/2 灰黄褐色砂泥
9　10YR2/1 黒色砂泥（土壇構築土）
10　10YR3/1 黒褐色砂泥（土壇構築土）
11　10YR1.7/1 黒色砂泥（土壇構築土）
12　10YR2/1 黒色砂泥（土壇西溝）
13　10YR3/1 黒色砂泥（土壇西溝）
14　2.5Y3/2 黒褐色砂泥
15　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（SD9上層）
16　2.5Y3/2 黒褐色粗砂（SD9中層）
17　2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト（SD9下層）
18　10YR3/1 黒褐色砂泥
19　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（締まり有り 土壇構築土）
20　2.5Y3/1 黒褐色砂泥（締まり有り 土壇構築土）
21　10YR1.7/1 黒色砂泥（締まり有り 土壇構築土）
22　10YR2/1 黒色砂泥（土壇構築土）
23　10YR3/1 黒褐色砂泥（締まり有り 土壇構築土）
24　10YR2/1 黒色砂泥（締まり有り 土壇構築土）
25　10YR1.7/1 黒色砂泥（締まり有り）
26　10YR3/1 黒褐色砂泥
27　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（締まり有り 土壇構築土）
28　2.5Y3/2 黒褐色砂泥（締まり有り）
29　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（締まり有り 土壇構築土）
30　2.5Y2/1 黒色砂泥（土壇構築土）
31　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（締まり有り 土壇構築土）
32　2.5Y3/1 黒褐色砂泥（土壇構築土）
33　10YR3/1 黒褐色砂泥
34　2.5Y3/1 黒褐色砂泥
35　10YR2/1 黒色砂泥（締まり有り 土壇構築土）
36　10YR3/1 黒褐色砂泥（江戸時代鋤作土層）
37　2.5Y2/1 黒色砂質シルト（土壇東溝）
38　2.5Y3/1 黒褐色砂泥（土壇東溝）
39　2.5Y6/2 灰黄色粗砂～砂礫（基盤層）

図82　北壁断面図（1：50）

2．遺　　構（図81・82、図版21）

敷地周辺は東から西へ緩やかに下がる傾斜面で、白川の右岸に形成された河岸段丘上に立地する。調査地での基本層序は、東半では約0.5mの盛土を除去すると、下層に江戸時代の耕作土層が約0.3mほど堆積していた。西半は後述するように江戸時代に土塁が形成されており、約0.2mの盛土下で土塁上面となる。地盤面はこれら江戸時代の耕作土層や土塁形成層を除去した段階で灰黄色の粗砂～砂礫層の基盤となる。基盤上面の標高は52.0mである。

検出した遺構は江戸時代以降の溝や撹乱土壙が主体であり、法勝寺に関係する遺構は確認できなかった。これらの遺構の中で注目できるのが調査区西端部で検出した南北溝（SD９）である。西肩が調査区外となるため溝幅は不明だが、現状で２m以上になることは間違いない。検出面からの深さは約0.8mで、溝底部の標高は北端で51.05m、南端で50.9mと北から南へ流れる。断面を観察すると、最下層に流水堆積を示す黄灰色砂質シルトが堆積しており、中層に黒褐色粗砂、上層には暗灰黄色シルトが堆積していた。出土土器から16世紀末から17世紀初頭に成立した堀状の人工溝と考えられる。

また、調査区北壁の断面観察によると、SD９埋没後であるが東に隣接して土塁が形成されていたことが判明した。土塁は固く締まった黒褐色～黒色砂泥を下から積み上げて構築し、最上層には暗灰黄色シルトを盛り上げている。土塁構築当初は幅約0.6mの南北溝が土塁の東西に掘られており、東溝は南端で途切れるが、西溝は南の調査区外へ連続する。土塁の基底部幅は約3.4m、高さ約0.7m、後には東西の溝を埋めて基底部幅が広がっていた。

土塁の構築年代であるが、東溝から18世紀～19世紀の遺物が出土しており、江戸時代後期まで存続していたことは明らかである。また、西側溝は早く機能を失い、土塁西側の落ち部下層から17世紀に遡る焼締陶器擂鉢や唐津椀・古伊万里椀などが出土している。おそらく、SD９を埋め戻して間も無く、17世紀前半には土塁が構築されたと考えられる。なお、土塁構築土には地盤土がまったく含まれていなかったことから、SD９を掘削した土は土塁構築土には使用されていないと考えられる。

3．遺　　物（図83～85、図版22・23）

出土遺物は整理箱にして11箱分出土しているが、その大半は平安時代後期の瓦類である。土器類はSD９およびその上層の土塁西側落ち部から若干の資料が出土しているにすぎない。

瓦類は調査区全体から出土しているが、中でも江戸時代の耕作土層を切り込むかたちで成立する調査区東半の撹乱土壙から多く出土した。これらの瓦類は平安時代後期を中心とする法勝寺関係の資料と、江戸時代以降の資料に大きく分けることができる。

平安時代後期の軒丸瓦では、播磨産（１・２）と京都産の三巴文軒丸瓦（３）が出土しており、前者には周縁上に唐草が巡る特殊な軒丸瓦（１）が含まれる。また、三巴文軒丸瓦（４）は大型

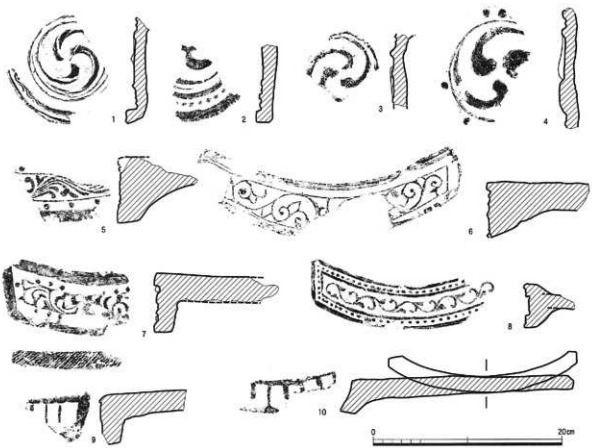


図83　軒瓦拓影・実測図１（１：４）

の資料で鎌倉時代に入る可能性がある。平安時代後期の軒平瓦は播磨産の均整唐草文軒平瓦（６）および偏向唐草文軒平瓦（８）がある。前者は粘土積み上げによって曲線顎を成形し、顎面をヨコヘラ削りで仕上げ、後者はいわゆる「包み込み技法」によって製作されている。また、文様部顎面から凸面にかけて太い縄叩きが施される丹波系唐草文軒平瓦（７）や、折り曲げ技法の痕跡が顕著な京都産の剣頭文軒平瓦（９・10）もみられる。これらの軒瓦のほか丸瓦や平瓦が多く出土しており、当地が法勝寺の寺域内であることを暗示する資料となる。なお、１点だけであるが池田瓦窯産と考えられる、平安時代中期の均整唐草文軒平瓦（５）が出土している。法勝寺の前身が藤原氏の別業と伝えられることから、何らかの関係が想定できよう。

江戸時代以降の瓦類は多量の桟瓦が攪乱土壙か

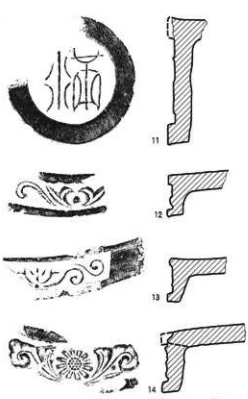


図84　軒瓦拓影・実測図２（１：４）

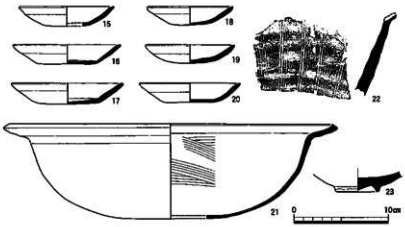


図85　ＳＤ９および土塁西側落ち部出土土器実測図（１：４）

ら出土しているが、これらの中に元禄16年（1703）に岡崎村へ移転してきた満願寺関係の軒瓦が含まれていた。軒丸瓦（11）は「満」銘軒丸瓦で、軒平瓦（13）とともに満願寺の移建造営段階の資料と考えられる。また、中心飾りに細弁蓮華文をもつ優美な軒平瓦（14）も満願寺関係の資料であろう。軒平瓦（12）は文様構成や顎の形態・製作技法から考えて、満願寺が移建してきた18世紀初頭より遡ると考えられる資料で、岡崎村が成立した16世紀のものと想定している。

なお、これら瓦類の出土遺構は、資料１・３・４・７がSD９上層である他は、すべて攪乱土壙内からの出土である。

土器類はSD９から土師器皿を中心にまとまって出土している。この溝の中・下層である黒褐色粗砂と黄灰色砂質シルトからは土師器皿だけが出土した。口径10cmの小型皿（15）と口径12cm弱の中型皿（16・17）で構成される。上層の暗灰黄色シルトからは、土師器皿とともに焙烙鍋が出土し、破片であるが信楽産の擂鉢や瓦質土器片なども共伴するが、磁器類がまったく出土しないのが特徴的である。土師器皿は小型皿（18・19）が口径約９～9.5cm、中型皿（20）が口径11.7cmと、下層の土師器皿よりも小型化しており、時期が若干下ることを示している。焙烙鍋（21）は口径35.5cmのやや大型で深さのある資料で、口縁端部が内側に肥厚するなど型式属性として古

表15　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
江戸時代	南北溝（SD９）、土塁、土塁東西溝	近世岡崎村の西限か

表16　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	瓦	11箱	軒瓦10点		９箱
江戸時代	土師器、焼締陶器、染付磁器、施釉陶器、瓦質土器、瓦	２箱	土師器７点、焼締陶器１点、施釉陶器２点、染付磁器１点、軒瓦４点、		１箱
合　計		13箱	25点（２箱）	１箱	10箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より２箱多くなっている。

い様相を持っている。内面には板状工具による整形痕跡が認められ、外面には煤が付着する。これらの資料は平安京左京北辺四坊の報告で年代基準資料とした土壙F1605出土土器と類似しており、16世紀末から17世紀初頭の年代観も矛盾しない[1]。

このほか、SD９埋没後の土塁西側の落ち部から信楽の擂鉢（22）や唐津椀（23・24）のほか、古伊万里椀（25）が出土しており、17世紀の年代が与えられる。これらは土塁が構築された年代を間接的に示す資料であろう。

4．まとめ

法勝寺の旧跡は、戦前まで京都市立動物園内に残されていた「塔ノ壇」と称する土壇が八角九重塔の基壇と考えられていた。また、「塔ノ壇」の北側には「御所ノ内」という地名が残り、金堂跡基壇が残存し、金堂跡土壇の北側では「五大塔（堂）芝原」や「薬師前」など五大堂と薬師堂の存在を示す地名が認められる。

これら中心伽藍の北半部に所在したと考えられる堂の位置や、伽藍地北辺に想定される諸施設について現状では全く不明といえる。今回の調査ではそれらの解明が重視されたが、残念ながら遺構としては寺院施設の存在は確認することができなかった。しかし、多くの法勝寺関係の瓦が出土することから、当地が法勝寺の伽藍地内であることはほぼ間違いないであろう。

法勝寺には多くの堂が建立されており、広大な敷地を有していた。西限については、現在の岡崎通りが平安時代の「車道」に相当し、この大路を西限として築地が構えられ、二条大路末に面する部分に西大門が建てられたと考えられている。南北規模については不明だが、金堂の北側に多くの建物が存在したことから、当地を越えて冷泉小路末あるいはそれより北に延びることが想定できる。どちらにしても東西２町以上、南北２町以上の広大な敷地をもつ、天皇の御願寺にふさわしい大寺院だったことが、今回の調査でも再確認できたといえる。

次に、江戸時代の遺構であるが、調査区西端で検出した南北溝SD９が近世岡崎村の成立を考えるうえで重要な遺構となる。SD９は16世紀末まで遡る人工の堀であり、埋没後も江戸時代を通じて土塁として残されていたようである。

岡崎村は、室町時代の16世紀中頃には東山十郷の一つとして岡崎郷と呼ばれ、白川の左岸で「くろたに道」（昔の車道・現在の岡崎道）の東方から天王町・黒谷辺りまでの地域に形成された村である。江戸時代には上岡崎・中岡崎・下岡崎に分かれており、現在の当調査地の東を南北に通る道が、近世には村の中枢路として機能していた様子が、元禄十四年実測大絵図（1701）に描かれている。この大絵図を詳細に観察すると、路の東西に家々が軒を連ねるが、その後方の畑地との境界は草地状に表現されている。おそらく、ここに表現された岡崎道との間の境界施設が土塁であり、当初は南北方向の堀が掘削されていた可能性が高いであろう。

SD９から出土する土師器には磁器や陶器が共伴しておらず、16世紀末から17世紀前半までの様相を呈している。おそらく中世末期の混乱期に堀が掘削され、その村境が近世には土塁として継

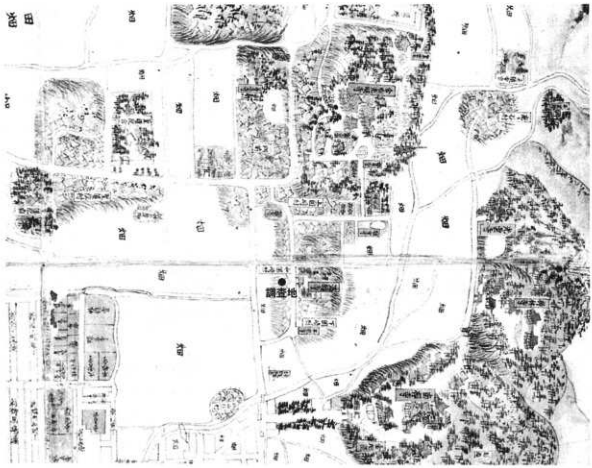


図86　「天明六年京都洛中洛外絵図」京都大学附属図書館蔵
『慶長 昭和 京都地図集成　1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』より抜粋、加筆し転載した。

承されたと考えるのが自然である。

その後、元禄十六年（1703）には上京の行衛町から中岡崎に満願寺が移転し現在まで法灯を保っている。「天明六年京都洛中洛外絵図」[2]（1786）（図86）をみると18世紀後半までは満願寺の門前の多くの家並みとともに村境が表現されているが、19世紀前半には満願寺の門前は衰退し、畑地として利用されるようになる。今回検出した村境の土塁も、家並みの衰退とともに機能を低下していったと考えられるのである。

註

1）『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　2004年

2）『慶長 昭和 京都地図集成　1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』 柏書房　1994年

Ⅶ　中臣遺跡84次調査

1．調査経過

今回の調査は、京都市山科区勧修寺西金ヶ崎390、391の共同住宅建設工事に伴い実施した、中臣遺跡84次調査である。調査地は中臣遺跡の中央部南西寄りの地点にあり、旧安祥寺川と山科川に挟まれた栗栖野丘陵が、西側に向かって急激に傾斜する低位段丘面に位置する。現在でも北側約30mには比高差約３mの段丘崖が認められる。

中臣遺跡は、これまでの調査で、後期旧石器時代から中世に至るまでの遺構、遺物を確認している複合遺跡である。調査地周辺の調査では、東側に隣接する36次調査[1]で、時期不明の土壙が、北側に隣接する市街化道路16号線建設工事に伴う10次調査[2]で、３・４世紀の竪穴住居が１棟、平安時代の掘立柱建物１棟などが確認されているが、中臣遺跡内では比較的遺構密度の低い場所に当たる。当調査地では、遺跡内での遺構の広がりを確認することを目的とした。

調査の結果、旧安祥寺川に向かって落ち込む旧地形を確認したものの、遺物はほとんど確認できず、時期を特定できる遺構はなかった。

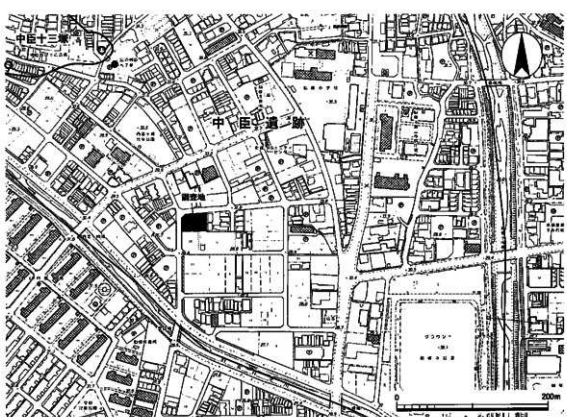


図87　調査位置図（1：5,000）

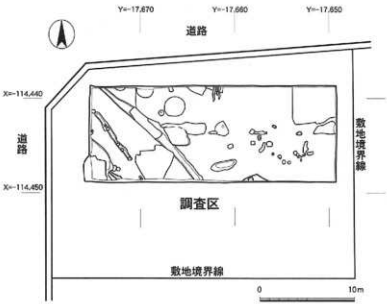


図88　調査区配置図（1：400）

2．遺　構

（1）基本層序と遺構の概要（図92、図版24）

調査区は調査前は田圃であり、全体に約0.2～0.3mまで耕作土・床土となっている。以下、東側は旧耕作土である黒褐色粘質土が残っており、地表下約0.4m以下が黄褐色粘質土と暗褐色粘質土からなる地山である。黄褐色粘質土と暗褐色粘質土は一連のもので、土色は序々に変化している。全ての遺構は地山上面で検出した。

また調査区西半では、旧安祥寺川に向かって落ちていく２段の低位段丘崖を確認した。この低位段丘は当地域が区画整理事業が行われる昭和50年代まで残っていたことがわかっている。現代の田圃は区画整理事業時に、市街化道路の高さに合わせて、低位段丘の落込みに盛土を行い造成している。

図89　調査前全景（南西から）

図90　作業風景

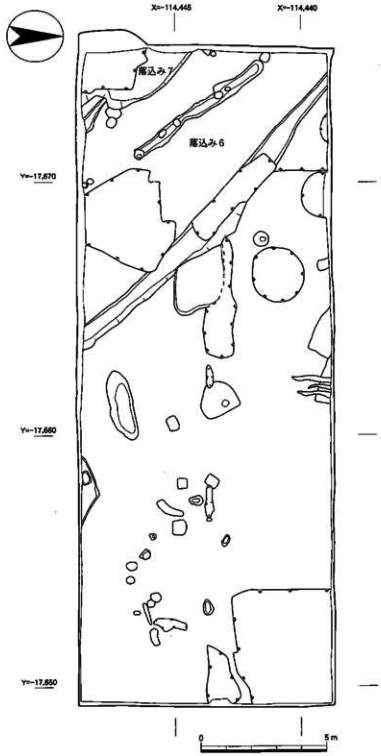
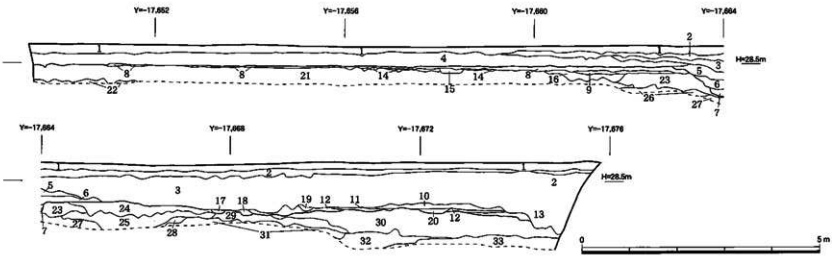


図91　遺構平面図（1：150）



1 5Y3/1 オリーブ褐色粘質土（現代耕作土）
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質極細砂（現代床土）
3 2.5Y3/2 黒褐色土（現代盛土）
4 2.5Y3/2 黒褐色粘質土（近現代耕作土）
5 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 φ1～3cm礫少量含む
6 2.5Y3/2 黒褐色土（近現代畦畔）
7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト
8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 褐色粘質土を帯状に含む
9 10YR3/2 黒褐色粘質土 φ1～3cm礫少量含む
10 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 φ1～3cm礫中量含む
12 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 φ1～3cm礫少量含む
13 10YR2/1 黒色粘質土 暗褐色シルトブロック状に含む
14 10YR2/2 黒褐色粘質土（遺構埋土）
15 10YR3/2 黒褐色粘質土（遺構埋土）
16 10YR2/2 黒褐色粘質土（遺構埋土）
17 2.5Y3/2 黒褐色シルト
18 10YR2/1 黒色シルト φ5cm以下礫少量含む（遺構埋土）
19 10YR3/1 黒褐色粘質土（遺構埋土）
20 10YR2/1 黒色粘質土（遺構埋土）
21 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土～暗褐色粘質土
22 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト
23 10YR3/2 黒褐色粘質土 φ1cm以下礫少量含む
24 10YR3/3 暗褐色シルト オリーブ褐色シルトブロック状に含む
25 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト
26 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫 φ1～3cm礫少量含む
27 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト質粗砂
28 5Y5/3 灰オリーブ色シルト質細砂～粗砂
29 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土 黒褐色粘質土ブロック状に含む
φ5cm以下礫中量含む
30 10YR2/3 黒褐色粘質土
31 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫シルト混じり
32 5Y4/4 暗オリーブ色シルト質極細砂～黄灰色シルト質極細砂
33 5Y4/2 灰オリーブ色砂礫 φ5cm以下礫多量に含む

地山

図92 南壁断面図（1：80）

遺構は、低位段丘の落ち込みと、土壙、小穴が存在するが、風倒木痕や木の根と考えられるものも多い。また、全体に耕作土によって削平されており、遺物を確認した遺構も少なく、時期を特定できるものはなかった。

表17　遺構概要表

時　代	遺　構
時期不明	落込み6・7

（2）検出遺構（図91）

落込み6・7　低位段丘の落ち込みである。南西を流れる旧安祥寺川とほぼ並行している。確認した比高差は落ち込み6・7ともに約0.2mである。埋土には縄文土器、土師器、須恵器、土師器皿などが出土しているが、細片がほとんどである。区画整理時に田圃造成のため、埋められている。

3．遺　物（図93、表18）

遺物は、縄文時代から江戸時代のものが整理箱にして1箱分出土した。内容は縄文土器、土師器、須恵器などである。遺物は極めて少数であり、いずれも細片で図示できるものはほとんどない。

落込み6出土土器（1）　落込み6からは、須恵器、土師器が出土している。図示できたのは、須恵器杯蓋のみである。外面全面に降灰。天井部を除く外面と内面ヨコナデ。天井部と体部に明瞭な綾が見える。色調は灰色、焼成は良好である。飛鳥時代に属するものと思われる。

落込み7出土土器（2）　落込み7からは遺物はほとんど出土せず、わずかに縄文土器を1点確認したのみである。深鉢の体部と思われる。内外面ともに条痕を施す。焼成は良好だが、胎土に雲母、石英を多く含んでいる。縄文時代晩期に属する。

図93　土器実測図
（1：4）

表18　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器		縄文土器1点		
飛鳥時代	土師器・須恵器		須恵器1点		
江戸時代	土師器				
合　計		2箱	2点（1箱）	0箱	1箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

4. まとめ

今回の調査では、遺物も少なく、時期の特定できる遺構は確認できなかった。周辺ではすぐ北側で弥生時代後期の竪穴住居が1棟確認されているが、全体に遺構は稀薄である。今回の調査結果もこれまでの成果を裏付けることとなった。しかし、調査地南東側では、断絶があるものの、弥生時代後期から古墳時代、平安時代にかけて多数の建物が確認されている。また、北西側約150mでも同時期の建物が多数確認され、方形周溝墓や古墳も存在する。調査地が位置する中臣遺跡西側の低位段丘面では、このように活発な土地利用がなされる場所と、ほとんど土地利用の痕跡が見られない場所が存在する。中臣遺跡内において、今回の調査地周辺がどのような意味を持っていたのかは、今後の課題である。

註

1）『中臣遺跡発掘調査概要』昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査センター　1981年

2）『中臣遺跡』建設省国庫補助による発掘調査概要　1977年　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1978年

Ⅷ 妙満寺窯跡

1．調査経過

（1）調査経過

調査に至る経過　調査地は、京都市左京区岩倉幡枝町743-28、743-29、1215-3、1256-6番地に所在し、この地に住宅の建築が申請された。当該地は妙満寺窯跡の範囲に含まれ、京都市文化財保護課が2007年６月13日に調査対象地で２箇所のトレンチを設けて試掘調査を実施した。

その結果、敷地東側の南北トレンチで、地表下約1.5mで炭層・遺物包含層を検出、平安時代の瓦・土器が出土し、対象地内に平安時代の遺構が良好に残存していると判断したため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査を委託し、発掘調査を実施することとなった。

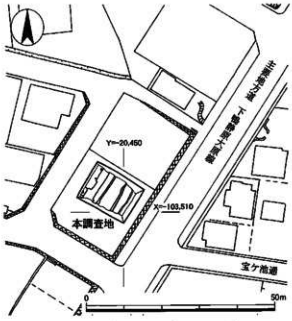


図94　調査区配置図（１：1,000）

今回の調査では、周辺の分布調査・発掘調査の成果に基づき、飛鳥時代から平安時代の須恵器・瓦の窯とそれに伴う施設を検出すると共に、周辺の調査と合せて当地の変遷を明らかにすることを目的とした。

調査経過　発掘調査では、2007年６月25日から機械掘削を行い、遺構調査を26日から開始した。調査区は、調査地北部に長方形（東西14m×南北11m）に設定した。

調査は、遺構面（第１面、地表下約0.7～1.5m）まで機械掘削し、その後手掘りで調査を行った。遺構面は１面で、攪乱などを掘り下げ、遺構検出状況を記録した。その後、落込などの遺構の調査を実施し、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割により下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、７月27日に調査を終了した。

（2）遺跡の位置と環境（図95）

地理的環境　調査地周辺は、岩倉盆地の西側に位置し、周辺は木造家屋とコンクリート家屋が混在した宅地である。

当地域は、岩倉盆地西辺にある城山（標高137m）の周囲に広がる丘陵地（幡枝丘陵）の東麓部に立地し、調査地は北西から南東へ緩やかに下がる傾斜地に位置する。この幡枝丘陵は1962年末

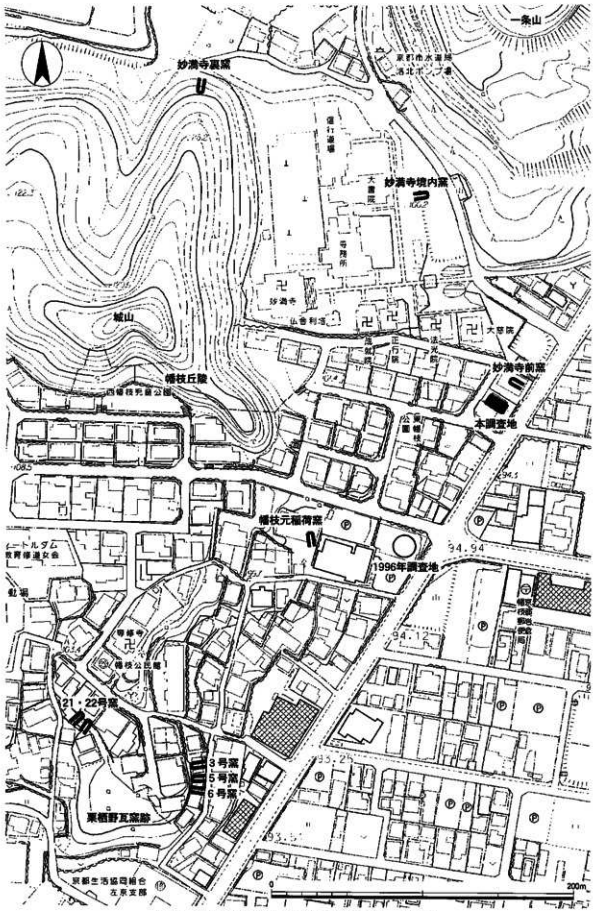


図95　周辺の調査位置および関連遺跡（1：2,500）

から1963年にかけて、国立国際会議場建設のための土取によってかなり削り取られ、その後宅地が造成された。1971年には、調査地東側が栗栖野から木野に通じる道路（主要地方道下鴨静原大原線）建設によって東側が切り取られ、調査地上面から道路までは約３mの段差がある。調査地付近の現在の標高は98mである。

歴史的環境　調査地周辺は、飛鳥時代から平安時代の窯業生産地である幡枝・栗栖野窯跡群の範囲に含まれる[1]。

幡枝地域では、飛鳥時代（７世紀初頭）から須恵器と瓦生産が開始される。元稲荷窯は瓦と須恵器の兼業窯であるとされる。その後、７世紀後半まで瓦・須恵器生産が栗栖野５・６号窯などで、継続して生産される。奈良時代（８世紀末前半から後半）には、当地域では窯業生産は見られない。

平安時代前期（９世紀初頭）には、再び栗栖野地区で瓦・陶器生産が本格的に再開され、須恵器・緑釉陶器・白色土器の生産も同時に行われる。この時期の窯としては栗栖野地区の21・23号窯・13号窯などがある。その後、前期中葉（９世紀中頃～後半）には本山官山窯、前期後半には妙満寺裏窯・妙満寺境内窯、平安時代中期（10世紀初頭）には栗栖野３号窯などの窯があり、須恵器・陶器などの生産は平安時代中期には終了する。瓦生産は引き続き行われ、平安時代後期から、一部鎌倉時代前半まで操業する。

中世の様子は明らかではないが、室町時代頃には土師器の生産が開始され、近世・近代まで生産が行われていた。

（３）周辺の調査（図95）

調査地周辺で行われた、これまでの主要な分布調査・発掘調査の概要を述べる。

調査地北隣の宅地東側崖面では1971年に同志社大学が灰原と推定される遺構を発見した。報告には「B16（地点）は道路脇の崖面に長さ約５m、幅約１mにわたって灰の層が認められ、灰層中より須恵器杯・甕破片を多く採取した。この灰層中には窯壁と考えられるものは認められず、窯址灰原と考えられる。」と記載され、「妙満寺前窯」と名付けられた[2]。

調査地北西約300mには、妙満寺裏（庭）窯があり、緑釉陶器・素地・須恵器などが採取され窖

図96　調査前全景（南から）

図97　作業風景

窯と推定されている[3]。同北西約100mには、妙満寺境内窯があり、緑釉陶器・素地などを焼成した窖窯が確認されている[4]。調査地南西側約150mには元船荷窯がある。1935年に瓦・須恵器が採取され窯が確認され、1963年に窖窯1基を発掘し、瓦陶兼業窯であることが明らかとなった[5]。調査地100m南側では1995年に発掘調査が実施され、江戸時代（16世紀代）の土師器生産に関連する遺物が出土し、建物などの遺構を検出した[6]。

調査地南西約150mには栗栖野3～11号窯があり、1985年に発掘調査が実施された。飛鳥時代の窖窯3基・平安時代後期の平窯5基が検出された[7]。1992年には丘陵の東側で栗栖野21・22号窯が発掘され、平安時代前期の窖窯が2基検出された[8]。

2．遺　構

（1）層　序（図98）

層序　調査地は、場所によって堆積状況が異なるが、基本的層序は地表面から約0.7～1.1mまでが現代整地層（第1層）で、上部は褐色土で下部は黄褐色土と褐色土が互層となる。第2層は明黄褐色砂土と明褐色砂土の混合層で無遺物の地山（第2層）である。第1層では、調査区北西部と南西部は褐色泥礫層、間には斜方向に黄褐色砂泥層が堆積する。

遺構の概要　調査は、第2層上面を第1面として調査を行った。第1面では撹乱・削平がひどく、江戸時代以降の遺構を検出したが、それ以前の遺構は検出できなかった。第1面の検出高は

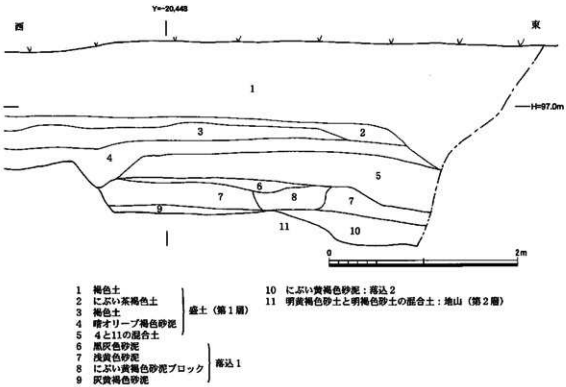


図98　基本土層図（北壁東部、1：40）

西端の方が東端より0.4m高く、西側から東に若干傾斜する地形を呈する。第１面上面の標高は、調査区中央で46.5mである。

（２）第１面の遺構（図99、図版25・26）

落込１　調査区南東部で検出した落込で、西肩部は撹乱溝に切られる。西側は直に落込み、底部は平坦である。南北幅は８m確認し、南北・東側に継続する、深さは約0.4mである。埋土は３層に分かれ、１層は黒灰色砂泥で堅く締まる（厚さ約0.1m）、２層は浅黄色砂泥で、にぶい黄褐色砂泥ブロックを含み、締まらない（厚さ約0.3m）、３層は灰黄褐色砂泥（厚さ約0.1m）である。遺物は２層に多く、瓦・土師器・須恵器・施釉陶器・素地・窯壁などが出土した。土師器は江戸時代に属する。

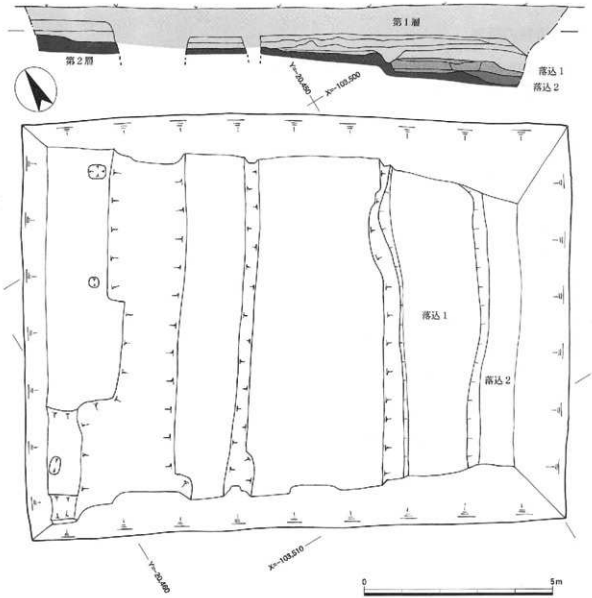


図99　遺構実測図（１：100）

表19　遺構概要表

時　代	遺　　構	備　考
江戸時代	落込1・2	

落込2　落込1の底部で検出した落込で土壙で、西側は傾斜し、底部は平坦である。南北幅は7.5m確認し、南北・東側に継続する、深さは約0.4mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で黄色砂泥ブロックを含む。埋土中の遺物は少なく、瓦・土師器・須恵器・緑釉陶器素地などが出土した。土師器は江戸時代に属する。

3．遺　物

（1）遺物の概要

遺物は整理箱にして7箱出土した。種類には瓦類・土器類などがあり、大半が土器類である。その他、窯壁も若干出土した。

時期別には、飛鳥時代から江戸時代で、飛鳥時代のものが最も多く、次いで平安時代前期のものが占め、他の時代に属する遺物は微量である。

以下、種類毎に主要遺物を報告する。

（2）土器類（図100・101、図版27・28）

土器類の器種には、土師器皿、須恵器杯身・杯蓋・鉢・甕、緑釉陶器・同素地椀・皿・壷などがある。時期は、飛鳥時代後半（7世紀後半）と平安時代前期（9世紀後半）・江戸時代である。

表20　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代後半	土師器、須恵器		須恵器21点		
	丸瓦、平瓦、鴟尾		丸瓦1点、平瓦1点、鴟尾1点		
平安時代前期	須恵器、緑釉陶器素地、窯壁		須恵器1点、緑釉陶器・素地18点、窯壁5点		
	軒平瓦、平瓦、鴟尾		軒平瓦1点、平瓦2点、鴟尾1点		
室町時代	土師器				
江戸時代	土師器・陶器・磁器				
合　計		8箱	52点（1箱）	7箱	0箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

土器類は、落込1から多く出土し、落込2・第1層からも若干出土した。

土師器　皿があるが、小片のために図示することができなかった。口縁部内外面横ナデで底部内面に圏線が巡る。

須恵器（1～21）　杯蓋（1～6）は、返りのあるものと、無いものに分かれる。3・4は天井部がやや丸みをおび、口縁部はなだらかに開き、端部は丸く収める。3・4は内面に返りがある。天井部外面回転ケズリ、天井部内面・口縁部内外面は回転ナデである。5・6は天井部が平坦で、口縁部はなだらかに開き、端部は垂下する。天井部外面回転ケズリ、天井部内面・口縁部内外面は回転ナデである。1・2はつまみ部で、1は宝珠型、2は偏平で、天井部が平坦であることから薬壺の蓋の可能性がある。つまみ部・天井部内外面は回転ナデである。

杯身（7～13）は、底部切り離しの杯Gと、高台を貼り付ける杯Bに分かれる。杯G7・8は底部が丸みを持ち、体部は内弯気味にたちあがる。底部外面はヘラ切り不調整で、底部内面・体部内外面は回転ナデである。杯B9～13は底部が平坦で、体部は直線的に外上方に伸び、口縁部

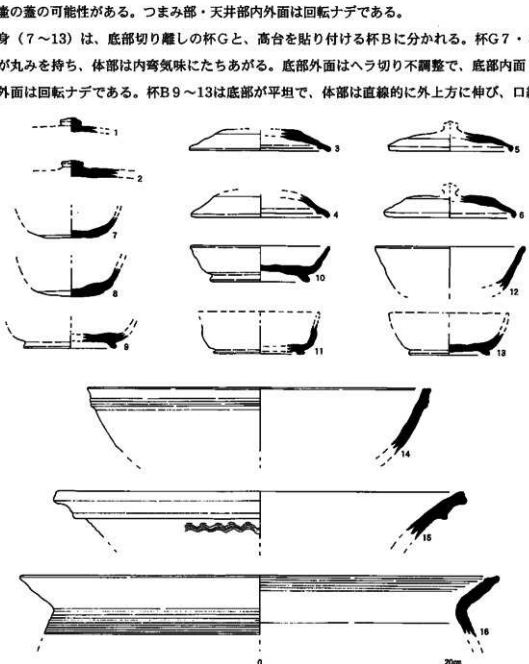


図100　土器実測図1（1：4）

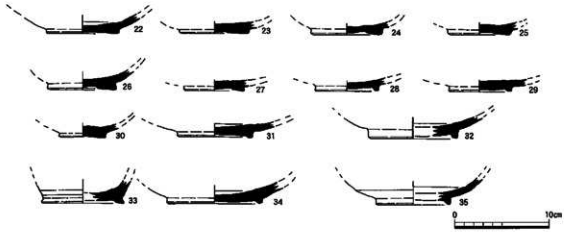


図101　土器実測図２（１：４）

は外反するものと直線的なものがあり、端部は丸く収める。底部外面端部に外傾する高台が貼り付く。底部・体部・口縁部内外面は回転ナデ、高台部は強く回転ナデを施す。

鉢（14）は、体部・口縁部が内弯し、口縁端部に面を持つ。口縁部外面に２条の凸線がある。凸線は削出しである。体部外面下半は回転ケズリ、体部内面・口縁部内外面回転ナデ。

甕（15～18・21）は、口縁部が大きく開くものと、そうでないものに分かれる。15・17・21は口縁部が大きく外反し、端部はやや垂下する。外面に凸線があり、櫛描き波状文を施す。凸線は貼付けである。口縁部内外面回転ナデ。16は口縁部が外反し、端部は内側に肥厚する。口縁部内面と体部肩部に櫛描き直線文を施す。口縁部内外面回転ナデ、体部外面ナデ、内面ケズリ後ナデである。

壺（19・20）は、口縁部が外反する。肩が張り、体部は丸く収める。

出土遺構は、３・９・14は第１層、他は落込１である。

緑釉陶器・瓷地（22～40）　椀（22～26・28・30・32・34～40）は、30が小椀で他は通常サイズである。高台は22・30が平底、23～26・36～38が蛇の目高台、28・32・34・35が輪高台である。体部は内弯気味に開く。口縁部端部はやや外反し、39は外面に、40は内面に凹線紋を施す。35は外面に陵が付く陵椀である。22・24・32・34・35は底部内面に圏線を施す。高台は削出高台で、回転ケズリ。底部内面・体部内外面は回転ナデ、底部内外面・体部内面にヘラミガキを施すものも見られる。30は底部外面回転糸切り後未調整。28・32は高台内面から下面に回転ナデを施す。28・32は内外面にハケで緑釉を施す。

皿（27・29・31）は、高台が27は蛇の目高台、29・31は輪高台である。体部は外上方に開く。29・31は底部内面に圏線を施す。高台は削出高台で、回転ケズリ。底部内面・体部内外面は回転ナデ、底部内外面・体部内面にヘラミガキを施すものも見られる。29・31は高台内面から下面に回転ナデを施す。29・31は内外面にハケで緑釉を施す。

壷（33）は、底部は平坦で外面端部に外傾する高台があり、体部は内弯気味に立ち上がる。高台は削出高台で、回転ケズリ。底部外面・体部外面は回転ケズリ、底部内面・体部内外面は回転ナデである。

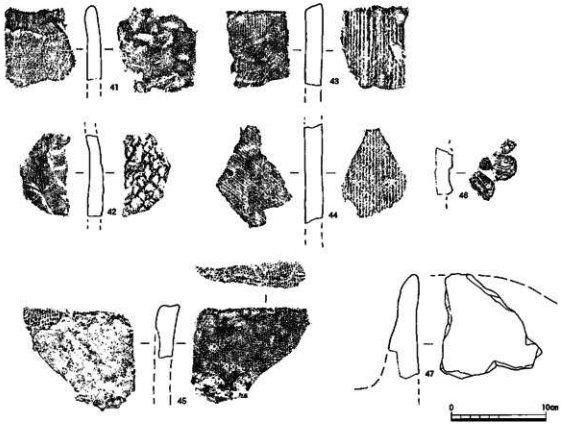


図102　瓦類拓影・実測図（1：4）

25・38は黄灰色を呈し軟陶であるが、他は灰色を呈し硬陶である。出土遺構は、全て落込1である。

（3）瓦　類（図102、図版29）

瓦類には、丸瓦・平瓦・鴟尾などがある。時期は、飛鳥時代と平安時代初期である。

瓦類は、落込1から多く出土し、落込2・第1層からも出土した。

飛鳥時代（41・42・47）　飛鳥時代の瓦類には丸瓦・平瓦・鴟尾がある。丸瓦（41）は行基式で、凸面タテナデ・凹面布目で、端部内面ヨコケズリ。端部ヨコケズリ。平瓦（42）は、凸面格子叩き・凹面布目である。表面色調はやや赤みを帯びる。47は鴟尾鰭部の右側面である。側面に装飾は無い。側面外面はケズリ、内面はナデ、胴部上面はナデである。胎土は砂粒を含み硬質である。

平安時代前期（43～46）　平安時代の瓦類には平瓦・鴟尾がある。43・44は、凸面縄目叩き・凹面布目で、糸切り痕が残る。端部ヨコケズリである。45は軒平瓦の狭端部で、凹面側の布を凸面側に回り込み、狭端面から凸面側を布の上から押さえつける「凸面押圧技法」で成形する[8]。鴟尾（46）は大型鴟尾の胴部左側面で、縦帯部内側の忍冬唐草文の上から3単位目の一部である。

出土遺構は、43～47は落込1、41・42は落込2である。

(4) 窯　壁 (図版29)

窯壁 (48～52) は落込１・２などから出土した。スサ入り粘土が焼き締まり、表面には灰が掛かり、光沢を持った面も見られ。時期は不明である。

4. ま と め

今回の調査では、飛鳥時代・平安時代の窯関係の遺構検出を期待したが、後世の削平などにより、当該期の遺構は全く検出できなかった。

以下、遺構・遺物に分けて調査成果をまとめておく。

遺構　調査地周辺は1960年代に土取のための削平を受け、その後宅地造成がなされたため、調査区全面に削平・攪乱を受け、南東部で落込を検出したに過ぎない。落込内出土遺物は、多種類の遺物を含むこと、時期差がかなりあること、炭・灰・窯壁が少ないことから、窯の灰原そのものではなく、それらが上部から流れた２次堆積の状況を示している。堆積時期は、江戸時代と推定できる。

落込２の西肩は東側に傾斜し、この傾斜が旧地形の状況を表している可能性は高い。地山の土はやや軟質の花崗岩のばいらん土で、窖窯を築くのには適した土質・傾斜であること、窯壁が出土したこと、土器類に窯壁が付着した個体を確認したことなどから、調査地の上部に当該期の土器類や瓦類の窯、または土師器の窯が想定できる。この結果から、1971年に発見された調査地北側の窯跡推定地も、同様に２次堆積の可能性が高い。

なお、当調査地は京都市文化市民局編『京都市遺跡地図台帳』には「妙満寺窯跡」として含まれるが、すでに同志社グループ『京都市本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録』・京都大学考古学研究会編『岩倉古窯跡群』には「妙満寺前窯」と呼称されること、妙満寺裏窯・境内窯からかなり離れること、瓦窯なども含まれる可能性があることから、妙満寺窯地区内の１支群として分けて捉えた方が妥当と考えられる。

遺物　出土した遺物は飛鳥時代・平安時代前期・江戸時代の大きく３つに分かれる。

41・42・47は、調査地北側の南西側に位置する元稲荷窯出土遺物と類似し、飛鳥時代前半（７世紀前半）に含まれ、この範疇に含まれる。

１～16の須恵器は、飛鳥時代前半（７世紀前半）に含まれる。須恵器杯では、杯G（７・８）が返りを持つ蓋（３・４）と組み合い、杯Bが返りの無い５・６と組み合うと考えられ、これらが共伴したと推定できる。

この後、当地区では窯業生産は行われず、平安時代前期（９世紀前半）の段階で、瓦生産が復活をするが、長く継続しないようである。43～46がこの範疇に含まれる。45の平瓦は「凸面押圧技法」で成形され、この技法が幡枝地域で行われたことが確認され、軒平瓦製作技術の系譜を考える上で注目できる。

平安時代中期（９世紀後半）には、緑釉陶器・同素地の生産が行われる。器形・製作技法などは妙満寺裏窯・境内窯出土遺物と類似し、この範疇に含まれる。高台は平底のものが少なく、蛇の目高台と輪高台が同比率を占める。輪高台の28・32は、高台を削り出した後に高台部を内面から下面に回転ナデを施し、同技法のものが尼吹ノ谷窯[10]・本山官山窯でも確認され、幡枝地区内の陶器技術系譜を示唆する。また、35のような鉢椀が出現する。

江戸時代の土師器は、調査地南側で1995年に発掘調査した遺物と類似する。

今回の調査は、小面積で削平が大きかったにもかかわらず、多くの資料が得られた。特に、平瓦の製作技法や、緑釉陶器・同素地からは極めて貴重な成果が明らかとなった。また、窯本体は検出できなかったものの、周辺出土資料との比較検討によって、幡枝地域内の瓦窯・須恵器・陶器窯の変遷を明らかにする手がかりを得ることができた。

註

1） 歴史的環境・周辺調査の概要については、
京都大学考古学研究会編『岩倉古窯跡群』 京都大学考古学研究会 1992年
『京都市遺跡地図台帳』【第８版】 京都市文化市民局 2007年
高橋照彦「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究会第７回シンポジウム 古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器生産地の様相を中心に』 古代の土器研究会 2003年
を参考にした。

2） 同志社大学文化史学専攻生・幡枝地区遺跡研究グループ編「京都市本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録」『考古学資料集』１ 同グループ 1971年

3） 京都大学考古学研究会編『第36とれんち』 京都大学考古学研究会 1984年

4） 京都市埋蔵文化財研究所編『坂東善平収蔵品目録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980年
坂東善平「高台による土器の年代考定」『古代学研究』第31号 古代學協會 1962年
坂東善平ほか「幡枝町の平安時代の須恵器窯址発見」『古代学研究』第57号 古代學協會 1970年

5） 横山浩一・吉本堯俊「京都市幡枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯跡」『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』 日本考古学協会 1963年
京都市埋蔵文化財研究所編『坂東善平収蔵品目録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980年

6） 上村憲章・鈴木廣司「岩倉幡枝窯跡群（元稲荷窯跡隣接地）」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成８年度』 京都市文化市民局 1997年
坂東善平「京都府幡枝町発見の土師器窯址」『古代学研究』第34号 古代學協會 1963年

7） 北田栄造・長谷川行孝『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 昭和60年度』 京都市文化観光局 1986年

8） 本 弥八郎「栗栖野瓦窯跡の調査」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 平成４年度』 京都市文化市民局 1993年

9） 上原真人「前期の瓦」『平安京提要』 角川書店 1994年

10） 京都大学考古学研究会編『岩倉古窯跡群』 京都大学考古学研究会 1992年
馬瀬智光「尼吹ノ谷窯跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成７年度』 京都市文化市民局 1996年

Ⅸ　植物園北遺跡１

１．調査経過

今回の調査は、個人住宅兼共同住宅新築工事に伴う発掘調査である。

調査地は植物園北遺跡にあたっており、周辺の調査成果から遺構が良好な状態で残っていることが推測されたため、発掘調査を実施するはこびとなった。

調査区は現地事務所や排土置き場、隣接する建物との関係を考慮して、調査地中央南寄りに設定した。調査面積は約125㎡である（図104）。

調査は2007年６月１日より機械掘削を開始し、盛土・旧耕作土を除去したのち実施した。遺構面では遺構検出・遺構登録を行い、遺構の状況が明らかになった段階で写真撮影・遺構実測を行った。また、機械掘削土は場外へ搬出、遺構掘削に伴う排土は調査地内で処理し、調査終了後に埋め戻しを行い、６月30日に全ての作業を終了した。

なお、調査期間中の2007年６月26日・27日に地元のノートルダム学院小学校６年生および松ヶ崎小学校５年生・６年生を対象に遺跡見学会を開催した。

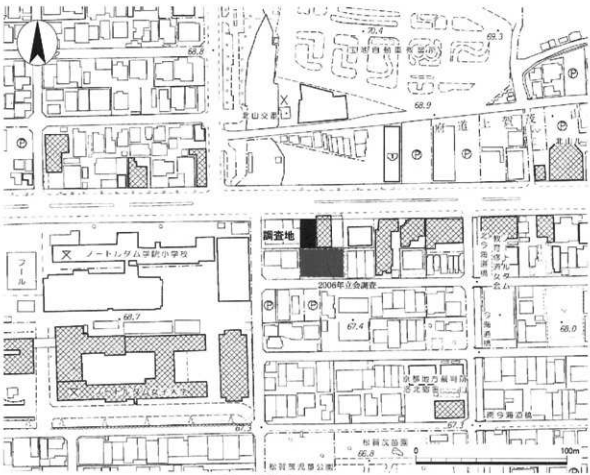


図103　調査位置図（１：2,500）

植物園北遺跡は京都盆地北部の鴨川扇状地上に広がる東西約2km・南北約1kmの大規模な集落跡で、縄文時代晩期から室町時代の遺構・遺物が確認されている。中でも弥生時代後期から古墳時代前期にかけては多数の竪穴住居・溝・土坑などの遺構が検出されている。

調査地は植物園北遺跡の中では南東端近くに位置しており、周辺ではこれまでに数回の発掘調査・立会調査が行われている。特に2006年8月から9月にかけて南隣接地で行われた立会調査[2]では、

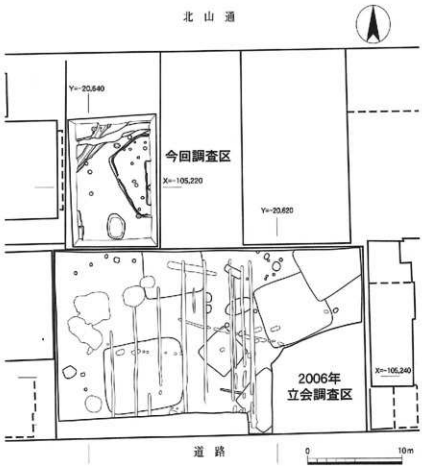


図104　調査区配置図（1：400）

調査地での遺跡の状況を推定する直接の成果が得られた。この調査では古墳時代前期（庄内式併行期から布留式）の竪穴住居6棟をはじめ、柵・土坑・柱穴などを検出するとともに当該時期の土器が出土した。検出状況から一部の遺構は調査地に広がっていることが確実である。

また、調査地北側の松ヶ崎本町の発掘調査[2]では古墳時代前期の竪穴住居など、調査地西側のノートルダム女子大学構内の発掘調査[3]では弥生時代後期から古墳時代前期と古墳時代後期の竪穴住居など、調査地西北西側の北山通中央部の発掘調査[4]では弥生時代後期の竪穴住居などを検出している。

図105　調査前全景（北から）

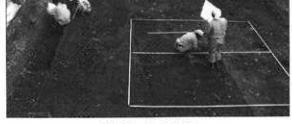


図106　作業風景

遺跡の沿革や周辺の調査成果にみるように、調査地は弥生時代から古墳時代の遺構が分布する範囲内にあり、竪穴住居などの遺構を検出できる可能性が極めて高いと考えられた。

2．遺　構

（1）基本層序（図107）

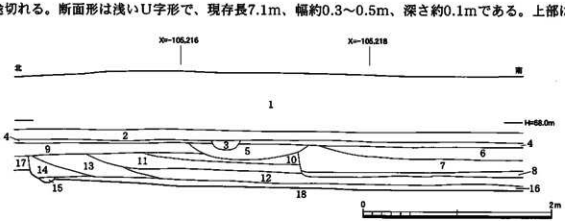
調査地周辺の地形は北から南に向けてわずかに傾斜している。調査地全域には約0.6mの厚さの盛土が行われており、その下層には厚さ約0.1mの旧耕作土および厚さ約0.05mの床土がひろがる。機械掘削では床土までを除去した。

床土の下面は南西部のX=−105,219付近より南側、Y=−20,636付近より西側では地山となるが、それ以外の部分では厚さ約0.1～0.2mの褐色砂泥（第1層）が堆積する。この層は大きさ5～10㎝の河原石を含んでおり、東部・北部に向けて徐々に厚くなる傾向にある。第1層の下層はにぶい黄褐色泥砂・褐色泥砂・褐色粘質土などとなる。堅く締まっており遺物を含んでいないことから地山と判断した。地山検出面の標高は北部が南部よりも約0.2m高く、旧地形も南に向けて傾斜していたことがわかる。

調査では古墳時代前期から江戸時代の遺構を検出した。以下に主要な遺構を報告する（表21）。

（2）飛鳥時代から平安時代（図108、図版30・31）

溝24　北部で検出した東西方向の溝である。東側は調査区外に延びるが、西側は攪乱を受けて途切れる。断面形は浅いU字形で、現存長7.1m、幅約0.3～0.5m、深さ約0.1mである。上部は



1　盛土
2　2.5Y4/1 黄灰色砂泥（旧耕作土）
3　10YR5/2 灰黄褐色泥砂（耕作痕）
4　7.5YR4/3 褐色粘質土、堅く締まる（床土）
5　10YR3/2 黒褐色砂泥、径1～5㎝の礫を多量に含む
6　10YR3/3 暗褐色砂泥（竪穴住居20埋土）
7　10YR2/3 黒褐色砂泥（竪穴住居20埋土）
8　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（竪穴住居20貼土）
9　10YR4/4 褐色砂泥（第1層）
10　10YR3/4 暗褐色砂泥、径1～5㎝の礫・土器片を多量に含む（竪穴住居30埋土）
11　10YR2/3 黒褐色砂泥、土器片を多量に含む（竪穴住居30埋土）
12　10YR3/3 暗褐色砂泥（竪穴住居30埋土）
13　10YR3/4 暗褐色砂泥（竪穴住居30埋土）
14　10YR3/3 暗褐色砂泥（竪穴住居30埋土）
15　10YR3/3 暗褐色砂泥（竪穴住居30壁崩）
16　10YR4/6 褐色砂泥と10YR3/4 暗褐色砂泥が混じる（竪穴住居30貼土）
17　10YR2/3 黒褐色砂泥（土坑43）
18　10YR4/6 褐色粘質土（地山）

図107　東壁断面図（1：40）

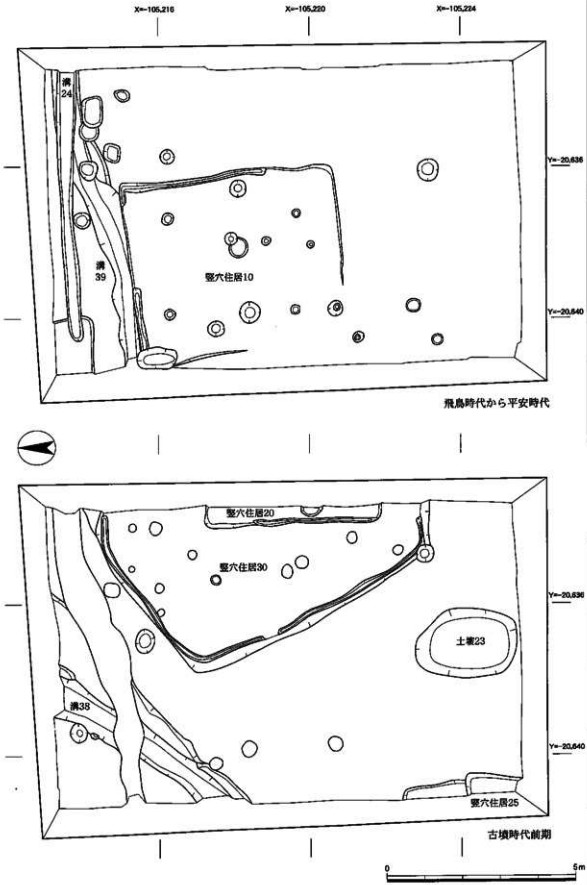


図108　遺構平面図（1：100）

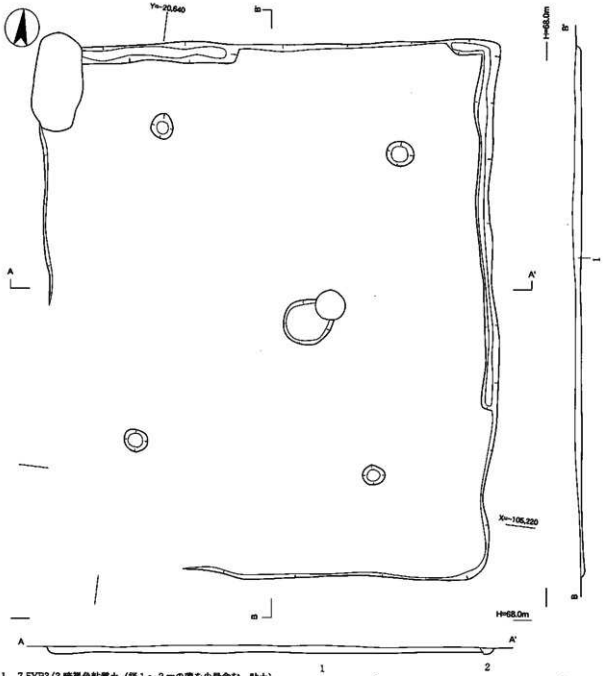


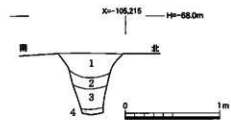
図109 竪穴住居10実測図（1：40）

削平されており、本来はさらに深い溝であった可能性が高い。底部は西に向けて傾斜する。埋土は黒褐色泥砂で、平安時代前期の遺物がわずかに出土した。

竪穴住居10（図109） 北部から中央部で検出した。上部は削平されており、南西部は不明瞭となる。検出面で床面の貼土が現れていた。平面形は南北約5.6m、東西約5.0mの方形で、南北軸で北側がわずかに西に振る方位をとる。貼土は暗褐色粘質土で、厚さ約0.1mである。壁溝は北辺・東辺の一部で認めた。幅約0.1m、深さ約0.05mである。主柱穴は4基を認めた。いずれも直径約0.2m、深さは約0.1～0.2mで、柱あたりはない。竈はなく、ほぼ中央に直径約0.5m、深さ

約0.05mの浅い土坑があるが、炉ではない。貼土から奈良時代後半の遺物がわずかに出土した。

溝39（図110）　北部で検出したわずかに蛇行する東西方向の溝である。東側・西側とも調査区外に延びる。断面形は深い逆台形で、現存長8.0m、幅約0.7～1.0m、深さ約0.6mである。底部は西に向けて傾斜する。埋土最下層の暗オリーブ褐色粘質土は堅く締まっているのに対して、上層の暗褐色砂泥などは人為的に埋め立てられた状況をしめす。飛鳥時代の遺物がわずかに出土した。



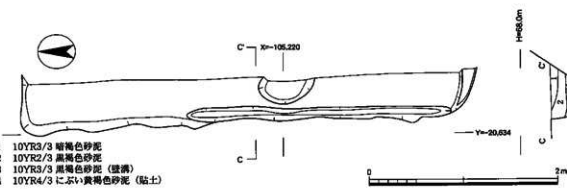
1　10YR3/4 暗褐色砂泥
2　10YR3/3 暗褐色砂泥
3　10YR3/4 暗褐色砂泥（径0.5～2cmの礫を少量含む）
4　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土（堅く締まる）

図110　溝39断面図（1：40）

（3）古墳時代前期（図108、図版31・32）

竪穴住居20（図111）　東部壁際で検出した。西辺部のみで、大部分は東側の調査区外となる。平面形は南北約4.7m、東西0.7m以上の方形と推測できる。ほぼ南北方向の方位をとる。貼土はにぶい黄褐色砂泥で、厚さ約0.05mである。壁溝は西辺の南半で認めた。幅約0.1m、深さ約0.05mである。西辺壁際中央に南北約0.6m、東西0.3m以上、深さ約0.1mの土坑がある。埋土は暗褐色砂泥・黒褐色砂泥で、0.2m以上の厚さで堆積する。布留式の段階の遺物がまとまって出土した。

竪穴住居30（図112）　東部で検出した。ほぼ西半分で、東側は調査区外となる。平面形は北・西・南の3箇所に鈍角の屈曲があることから、多角形であると考えられる。検出長は南北約9.0m、東西4.3m以上で、長さが測定できる北西辺は約4.1m、南西辺は約7.2mである。貼土は褐色泥砂と暗褐色泥砂が混じっており、厚さ約0.05～0.1mである。壁溝は途切れる部分があるが、検出部分の壁沿いで認めた。幅約0.1～0.2m、深さ約0.1mである。主柱穴は2基を認めた。ともに直径約0.25m、深さ約0.5mで、柱あたりは直径約0.15mである。主柱穴の間のやや南寄りに別の柱穴がある。直径約0.3m、深さ約0.2mで、柱あたりは直径約0.15mである。また、北西辺中央の壁溝内側に約1.4mの間隔で2基の杭痕が並んでおり、入口の施設であった可能性がある。このほか



1　10YR3/3 暗褐色砂泥
2　10YR2/3 黒褐色砂泥
3　10YR3/3 黒褐色砂泥（壁溝）
4　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（貼土）

図111　竪穴住居20実測図（1：40）

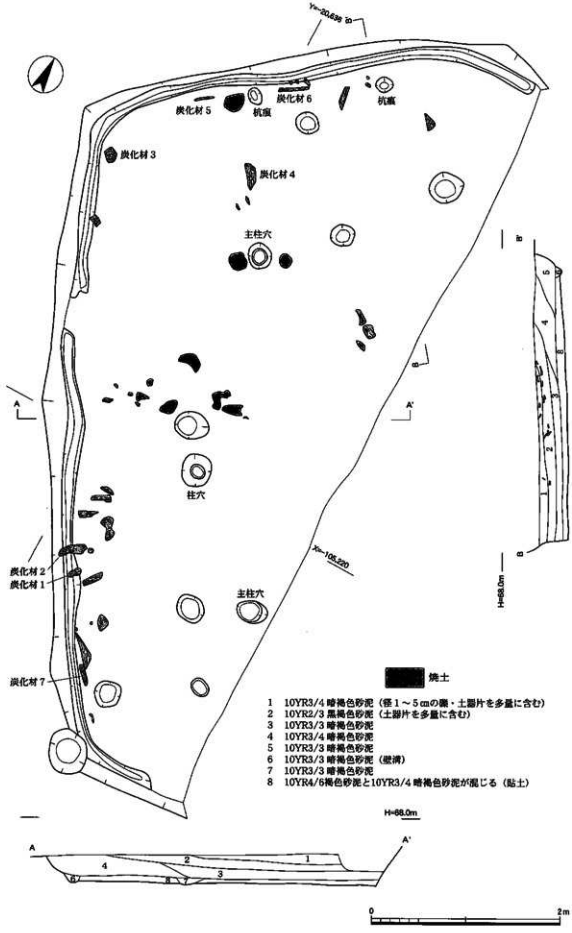
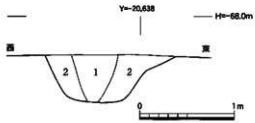


図112　竪穴住居30実測図（1：40）

にも床面には小規模な土坑が数基あるが、機能は不明である。

床面のほぼ全体には炭化材や焼土が広がっており、焼失住居であることがわかる。炭化材には壁に直交する丸木状の部材と壁溝内側に平行する板状の部材がある。前者は屋根の垂木、後者は壁材と考えられる。炭化材の一部について樹種を同定した結果、壁に直交する炭化材1～4はいずれもコナラ亜属、北西辺の壁溝に平行する炭化材5・6はともにアカガシ亜属、南西辺の壁溝に平行する炭化材7はコナラ亜属であった。埋土は暗褐色砂泥などで、0.3m以上の厚さで堆積する。庄内式併行期の遺物がまとまって出土した。ただし、床面に伴うものはなく、大部分は埋土上層から出土しており、竪穴住居が廃絶した後のくぼみに廃棄されたものと考えられる。



1　10YR3/2 黒褐色砂泥（径1～3cmの礫を少量含む）
2　10YR3/3 暗褐色砂泥
（10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土ブロックを含む）

図113　溝38断面図（1：40）

竪穴住居25　南西隅部で検出した。北東隅部のみで、ほとんどが西側・南側の調査区外となる。平面形は南北1.5m以上、東西0.6m以上の方形と推測できる。南隣接地の調査では西壁断面のX=-105.228付近で竪穴住居の南壁を確認しているので、同一の竪穴住居とすると南北約4.0mとなる。残存部分が少ないため方位は不明瞭である。貼土は褐色砂泥で、厚さ約0.05mである。壁溝は認めていない。埋土は黒褐色砂泥で、0.2m以上の厚さで堆積する。庄内式併行期の遺物がわずかに出土した。

土坑23　南部で検出した。平面形は南北約2.7m、東西約1.9mの楕円形で、深さは約0.3mである。埋土は黒褐色泥砂などで、庄内式併行期の遺物がまとまって出土した。

溝38（図113）　北西部で検出した北東から南西方向の溝である。北側・西側とも調査区外に延びる。断面形はU字形で、現存長6.1m、幅約0.7～1.0m、深さ約0.4～0.5mである。底部は北東に向けて傾斜する。埋土は黒褐色砂泥・暗褐色砂泥で、庄内式併行期の遺物がわずかに出土した。

表21　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	溝24	
飛鳥時代 ～奈良時代	竪穴住居10、溝39	
古墳時代前期	竪穴住居20・竪穴住居25・竪穴住居30、土坑23、溝38	

3．遺　物

出土遺物のほとんどは土器類である。また、古墳時代前期の遺物が大部分を占め、弥生時代後期、飛鳥時代以降の遺物はわずかである。以下では飛鳥時代から平安時代と古墳時代前期に分けて遺物を報告する（表22）。

（1）飛鳥時代から平安時代（図114）

竪穴住居10、溝24・39および遺物包含層から出土した。ほとんどが小破片である。

溝24　須恵器、瓦片が出土した。須恵器は杯身（4）の口縁部で、調整は内外面とも横方向のナデである。平安時代前期に属する。

竪穴住居10　黒色土器・須恵器が出土した。黒色土器は内面が黒色の椀の小片である。須恵器には壺（2）・杯身（3）がある。2は小型の壺で、調整は内外面とも横方向のナデで外面は平滑に仕上げる。3は底部で、調整は外面はヘラ切りのちナデ、内面は横方向のナデである。奈良時代後半に属する。

溝39　土師器のみが出土した。甕（1）の口縁部で、調整は外面は横方向のナデ、内面は横方向のハケである。飛鳥時代に属する。

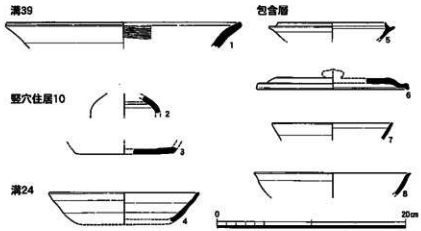


図114　溝39・竪穴住居10・溝24・包含層出土土器実測図（1：4）

表22　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代以降	土師器・施釉陶器・磁器、瓦			0箱	少量
平安時代	土師器・須恵器・緑釉陶器、瓦		須恵器1点、緑釉陶器1点	0箱	少量
飛鳥時代 ～奈良時代	土師器・黒色土器・須恵器、瓦		土師器1点、須恵器5点	0箱	少量
古墳時代前期	土師器		土師器62点	8箱	2箱
弥生時代後期	弥生土器		弥生土器1点	0箱	少量
合　計		12箱	71点（2箱）	8箱	2箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

包含層　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器、瓦片が出土した。須恵器には杯蓋（6）・杯身（5・7）・甕がある。5は短い立ち上がり部をもち、調整は内外面とも横方向のナデである。飛鳥時代に属する。6は端部が屈曲して垂下し、調整は天井部外面はヘラ切りののちナデ、ほかの部分は横方向のナデである。奈良時代に属する。7は口縁部で、調整は内外面とも横方向のナデである。特徴に乏しく、飛鳥時代から平安時代のいずれかの時期に属すると考えられる。緑釉陶器には椀（8）がある。口縁端部は外反し、内外面に淡緑色の釉薬を施す。幡枝産である。平安時代前期に属する。

（2）古墳時代前期

竪穴住居20・30、土坑23などから出土した。また、新しい時代の遺構や遺物包含層に混入して出土したものも多い。竪穴住居30出土のものが最もまとまっている。ただし、完形に復元できる個体は少なく、表面が摩耗・損傷しているため調整の詳細が不明瞭な破片が多い。

竪穴住居20（図115）　壺（9）・甕（10～13）・高杯（14・15）・小型器台（16）がある。

9は口縁部は緩やかに外反し、端部はまるくおさめる。調整は口縁部内外面とも横方向のナデである。

甕には受口状口縁のもの（10）、「く」字状口縁のもの（11～13）がある。10は口縁部の屈曲は緩やかで端部の面は明瞭ではない。調整は口縁部内外面とも横方向のナデ、肩部外面は縦方向のハケ、内面は指オサエである。11は口縁部は緩やかに外反し、端部はやや尖り気味となる。調整は口縁部内外面ともハケののち横方向のナデ、肩部外面はハケののち横方向のナデ、内面は横方向のナデである。12・13は口縁部は肩部から強く屈曲して内弯気味に開く。12は端部に鋭い面をつくるのに対し、13は内側にわずかに肥厚する。調整はともに口縁部内外面とも横方向のナデで、12は端部と端部内側をヘラ状工具で加工する。また、13は肩部内面はケズリである。12は搬入品である。

14は杯部で口縁部は屈曲してわずかに外反して開く。調整は内外面ともミガキであるが、詳細は不明である。15は脚部で裾部は緩やかに外反して開く。透孔は3方である。柱状部は中空で内面中央に細い棒状工具を突き刺した痕跡がのこる。調整は不明である。

16は杯部が脚部から屈曲して開く。透孔は3方である。調整は杯部外面は横方向のミガキ、内面は不明で、脚部外面は縦方向のミガキ、内面はシボリのの

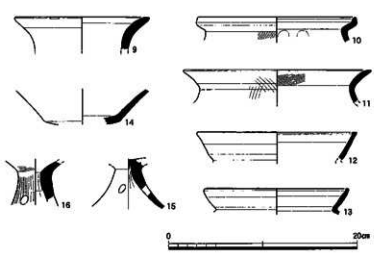


図115　竪穴住居20出土土器実測図（1：4）

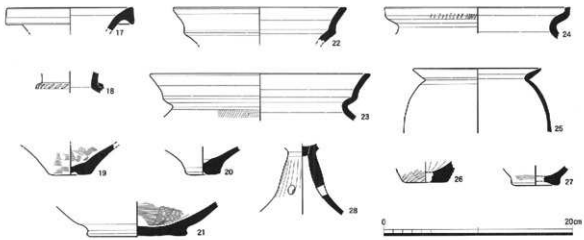


図116　土壙23出土土器実測図（1：4）

ちナデである。

布留式の古い段階に属する。

土坑23（図116）　壷（17～21）・甕（22～27）・高杯（28）がある。

17は口縁端部が垂下する。調整は内外面とも横方向のナデである。弥生時代後期に属する土器が混入したものである。18は頸部の小片で口縁部は肩部から屈曲して直立気味に立ち上がる。屈曲部外面には突帯が巡る。調整は外面は不明で、内面は横方向のナデである。突帯には刻目を施す。また、鉄分の多い土を上掛けしているようで表面は鮮やかな橙色に発色する。19～21は底部である。19・20は底面は小さく、外面中央はくぼむ。19の調整は外面はハケののちナデ、内面は放射状のハケののち左上がりのハケである。20の調整は内外面ともナデである。21は底部が段をもって張り出す。底面が大きく器壁も厚いことから大型の壷と考えられる。調整は底面には粗い砂の圧痕がのこる。外面はナデ、内面は横方向のハケである。

甕には複合口縁のもの（22・23）・受口状口縁のもの（24）・「く」字状口縁のもの（25）がある。22・23は口縁部は肩部から屈曲してさらに段をつくって外反気味に開き、端部には面をもつ。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、肩部外面はハケ、内面は横方向のナデである。23は山陰地方の土器の影響を受けていると考えられ、また、22にも同様の傾向を看取できる。24は端部が直立し明瞭な面をもつ。調整は口縁部内外面とも横方向のナデで、外面の屈曲部分に刺突文を施す。25は球形の体部から口縁部が強く屈曲して短く直線的に開き、端部は尖る。調整は口縁部内外面は横方向のナデ、体部外面はハケののちナデ、内面はナデである。体部外面のハケの痕跡はほとんどのこらない。「く」字状口縁の甕にはほかに口縁部の屈曲が25よりも弱いものもある。また、甕の破片には調整が体部外面がタタキのものや内面がケズリのものが少量含まれる。26は平底で、調整は底面はナデ、外面はタタキ、内面は板状工具による放射状のナデである。27はやや上底で、調整は底面はナデ、外面はハケ、内面はナデである。

28は脚部で裾部は柱状部からわずかに屈曲して開く。透孔は3方である。柱状部は中空で杯部との接合部に粘土を充填した痕跡がのこる。調整は外面は縦方向の粗いミガキ、内面は不明である。

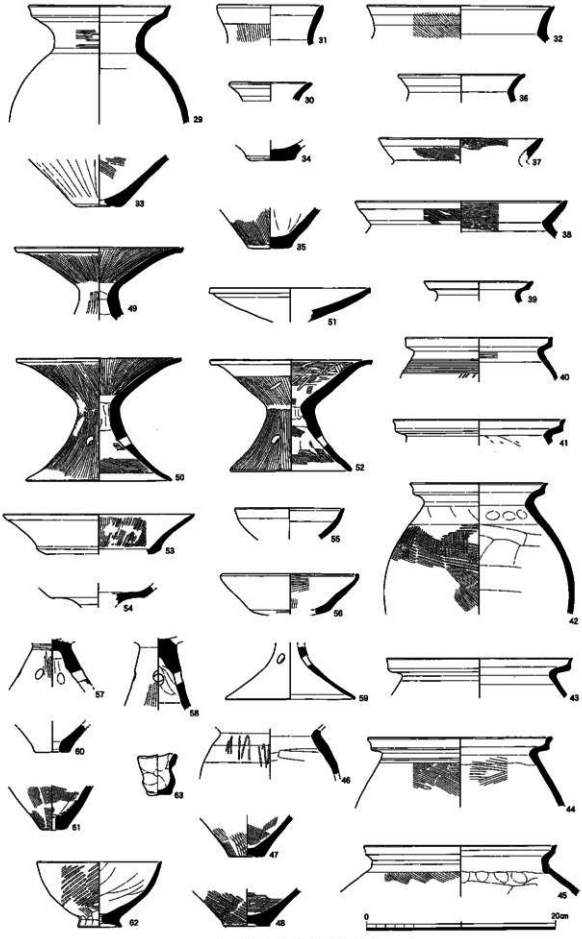


図117　竪穴住居30出土土器実測図（1：4）

庄内式併行期の新しい段階に属する。

竪穴住居30（図117、図版33）　壷（29～35）・甕（36～48）・器台（49～52）・高杯（53～59）・有孔鉢（60～62）・小型土器（63）がある。破片数では甕が最も多く、次いで器台・高杯が多い。

壷には受口状口縁のもの（29）・「く」字状口縁のもの（30）・直口のもの（31・32）がある。29は球形の体部から口縁部は外反し、端部は屈曲して外上方に開く。調整は口縁端部は内外面とも横方向のナデ、頸部・体部外面は横方向のミガキ、内面は横方向のナデである。30は外上方に開き、端部はまるくおさめる。調整は口縁部内外面とも横方向のナデである。31・32は外反気味に直立し、端部は31はまるくおさめ、32は尖り気味となる。調整はともに口縁端部内外面は横方向のナデ、口縁部外面はハケで、31は口縁部内面は横方向のナデ、32はハケののち横方向のナデである。底部は平底のもの（34・35）とわずかに上底のもの（33）がある。調整は外面はハケ・ナデ、内面はナデである。

甕には受口状口縁のもの（39～45）と「く」字状口縁のもの（36～38）がある。受口状口縁には口縁端部が直立し明瞭な面をもつもの（40）、外側につまみ出しているもの（42）、矮小化しているもの（45）など様々な形態がある。調整は口縁部内外面とも横方向のナデ、肩部外面はハケ・ナデ、内面はナデが多い。42の肩部外面は横方向のタタキののち縦方向のタタキを部分的に施しており、あたかも格子状タタキのような痕跡を示す。41・45の肩部内面はケズリである。また、40は肩部外面に櫛描文と刺突文を施す。「く」字状口縁には外反するもの（36）と外上方に直線的に開くもの（38）がある。調整は内外面とも横方向のナデ・ハケである。46は体部の破片で、調整は外面は横方向のナデ、内面はケズリで、外面に断続的な上下方向の沈線を施す。47・48は上底で、47の調整は内外面ともハケ、48の調整は外面はタタキ、内面はハケである。

器台には杯部が脚部から緩やかに開くもの（49・50）、屈曲して開くもの（52）、皿状の杯部のもの（51）がある。49・50の杯部はほぼ同じ形態である。透孔は3方である。調整はいずれも丁寧で、杯部内外面・脚部外面は放射状のミガキ、脚部内面はハケ・横方向のナデである。52の調整はほかに比べるとやや粗雑で、ミガキの前のハケが一部にのこり、また、放射状のミガキののち断続的な粗いミガキがある。なお、色調は49・50が浅黄橙色、51・52が橙色を呈し、対照的な印象を与える。

高杯には杯部が外反するもの（53・54）と椀形のもの（55・56）がある。56は口縁端部が内側に強く巻き込む。調整は内外面ともミガキである。脚部にも様々な形態がある。透孔は57が6方・58が4方・59が3方である。調整はいずれも外面は縦方向のミガキであるが、内面は不明である。

有孔鉢には平底状のもの（60・61）と短い脚部をもつもの（62）がある。60の調整は底面、内外面ともにナデ、61の調整は底面はナデ、内外面はハケである。62は半球形で、器壁は薄い。調整は体部外面はタタキののちナデ、内面は板状工具によるナデで、脚部はつまみ出して成形しているため、指圧痕が強くのこる。また、穿孔は丁寧である。

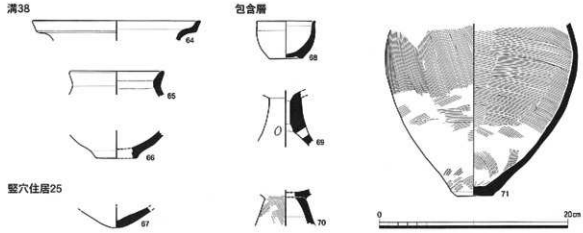


図118　溝38・竪穴住居25・包含層出土土器実測図（1：4）

63は手捏ねで成形しており、指圧痕が強くのこる。底面のみナデで調整する。

これらの土器はまとまりがよく、庄内式併行期の新しい段階に属する。

溝38（図118）　壺（65・66）・甕（64）がある。65は口縁部が肩部から屈曲して短く外上方に立ち上がり、端部は尖り気味となる。調整は内外面とも横方向のナデである。66は平底と考えられる。調整は外面は縦方向のミガキ、内面は丁寧なナデである。64は受口状口縁で端部が外上方に開き明瞭な面をもつ。調整は内外面とも横方向のナデである。庄内式併行期に属する。

竪穴住居25（図118）　甕（67）・高杯がある。67は尖底で、小さな底面をもつ。調整は内外面ともナデである。庄内式併行期に属する。

包含層（図118、図版33）　壺・甕（71）・高杯・小型器台（69）・脚台（70）・小型土器（68）が出土した。71は体部下半が完存する。体部は倒卵形で、底部はわずかに上底となる。調整は底面はナデ、体部外面はタタキののちハケ、内面はハケののち一部を横方向のナデである。外面には薄く煤が付着する。69は透孔は3方である。調整は脚部外面は縦方向のミガキ、内面は不明である。70は底部から「ハ」字状に開く。調整は外面はハケ、内面は横方向のナデである。68は球形の椀形を呈する。口縁端部は外反し、底部はわずかに上底となる。調整は底面は板状工具によるオサエ、ほかは丁寧な横方向のナデである。

4．まとめ

今回の調査で出土した最も古い遺物は弥生時代後期の土器である。古墳時代前期の遺構や包含層に混入して出土した。調査地西北西側の北山通中央部の発掘調査では弥生時代後期の竪穴住居を検出しており、今回の調査ではこの時期の遺構を検出することはなかったが、すでに調査地近隣に集落が成立していたことが裏付けられた。

調査地が盛期を迎えるのは古墳時代前期である。庄内式併行期の遺構には竪穴住居30・竪穴住居25・土坑23・溝38などがある。竪穴住居30は多角形の大型住居の類例として特筆できる。溝38は集落内の区画溝の可能性が考えられる。また、布留式の段階の遺構には竪穴住居20がある。竪穴住居30と竪穴住居20は重複することから、竪穴住居を建て替えながら集落が継続していたことがわかる。南隣接地で行われた立会調査では同時期の竪穴住居６棟をはじめ多数の遺構を検出しており、調査地周辺で遺構が稠密する状況が明らかとなった。このことから古墳時代前期の集落は、調査地のさらに東側に広がっていたと推定できる。なお、竪穴住居30と竪穴住居20の検出面は約0.1～0.2mの高低差があり、その間に褐色砂泥（第１層）が堆積する。この層は河原石や土器片を含んでいることから洪水などの影響で堆積したものである可能性も推測できる。この層の成因については近隣での類例の増加を待ちたい。

飛鳥時代の遺構には溝39、奈良時代の遺構には竪穴住居10がある。既往の植物園北遺跡調査では、南部の下鴨半木町で行われた発掘調査[3]で古墳時代末から奈良時代の竪穴住居３棟や多数の掘立柱建物などを検出している。しかしながら、東部でこの時期の竪穴住居の検出は初めてのことであり、飛鳥時代から奈良時代の集落が調査地周辺に所在していることが明らかとなった。

平安時代以降の遺構には溝24のほか土坑・柱穴があるが、まとまりはよくわからない。おそらく調査地周辺はこの頃には耕作地と利用されるようになり、各時代の遺構が耕作により削平されたためと考えられる。

以上のように今回の調査では、植物園北遺跡東部の状況についての知見を深めることができた。遺跡の沿革や周辺の調査成果で述べたように、近年は相次いで植物園北遺跡東部の調査が行われており、今後も綿密な調査を続けることにより、調査地周辺の歴史的状況が明らかになることが期待される。

註

1）「植物園北遺跡」『京都市内遺跡立会調査報告　平成18年度』 京都市文化市民局　2007年

2）『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-1 （財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年

3）『ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告』ノートルダム女子大学　1991年

4）「植物園北遺跡」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995年

5）「植物園北遺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995年

X　植物園北遺跡２

１．調査経過

今回の調査は、小規模共同住宅建設に伴うものである。京都市文化財保護課による試掘調査の結果、平安時代の遺構が良好に残存していることが判明したため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市から委託を受け、国庫補助事業として本調査を実施した。

調査地は、植物園北遺跡の中央北側に位置する。植物園北遺跡は、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての時期を中心とする大規模な集落遺跡で、東西約２km、南北約１kmの範囲におよぶ。これまでに縄文時代中期から室町時代までの遺構が確認されている。調査地周辺では、2000年に調査地の約200m南西で実施した発掘調査（１）で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての流路と古墳時代前期から中期にかけての竪穴住居２棟が検出されている[1]。また、1997年に通りを挟んで西に隣接する敷地で行われた試掘調査（２）では、平安時代の掘立柱建物１棟が検出されている[2]。今回の調査でも当該時期の遺構・遺物の出土が期待された。

調査区については、京都市文化財保護課の指導により、敷地北側に東西8.5m、南北18mの範囲で設定した（図122）。調査は2007年11月19日より開始した。重機で耕作土、床土などを除去して、地山面で奈良時代と平安時代の遺構を検出したため、人力掘削に切り替えて調査を行った。

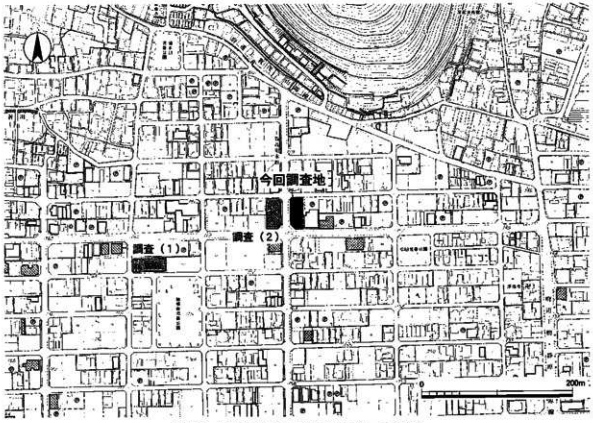


図119　調査地と周辺調査位置図（１：5,000）

図120　調査前全景（北から）

図121　作業風景

調査面は１面である。奈良時代の土坑、平安時代の掘立柱建物、柱列、土坑、溝などを検出した。掘立柱建物を構成する柱穴が調査区の南に展開することが推測されたため、京都市文化財保護課の許可を得て、建物建設の範囲内で拡張を行った。拡張面積は約30㎡である。そのため、調査面積の合計は約183㎡となった。拡張区でも柱穴などを確認し、図面作成と写真撮影などの記録を行って調査を終了した。調査終了後に埋め戻しを行い、12月15日に全ての作業を終了した。

２．遺　構

（１）基本層序（図123）

調査前は、敷地のほぼ中央に南北方向の石積みで区画された段差があり、西側は東側より30～50㎝高くなっていた。この段差は現代の区画整理に伴う盛土によるものである。断面図１～３層が盛土で、４層は石積み構築時の裏込めである。５～８層は旧耕作土とその床土で、調査区北側ではこれらを除去して黄褐色シルト～極細砂の地山相当の無遺物層となる。調査区南側では、床土の下に断面図28層の平安時代の遺物包含層が20～40㎝堆積する。この層は、X=-104,652付近で急激に落ち込んで北側には堆積していないことから、旧耕作段階で削平されたものと考えられる。遺物包含層を除去すると無遺物層となる。無遺物層はX=-104,656付近から南に進むにつれて砂質が強くなり、X=-104,660付近からは断面図31層の砂礫層となる。調査地の基盤を形成するこれらの無遺物層は、堆積状況から遺跡の西を北西から南東方向に流れる賀茂川とその支流である明神川の氾濫堆積物と考えられ

図122　調査区配置図（１：400）

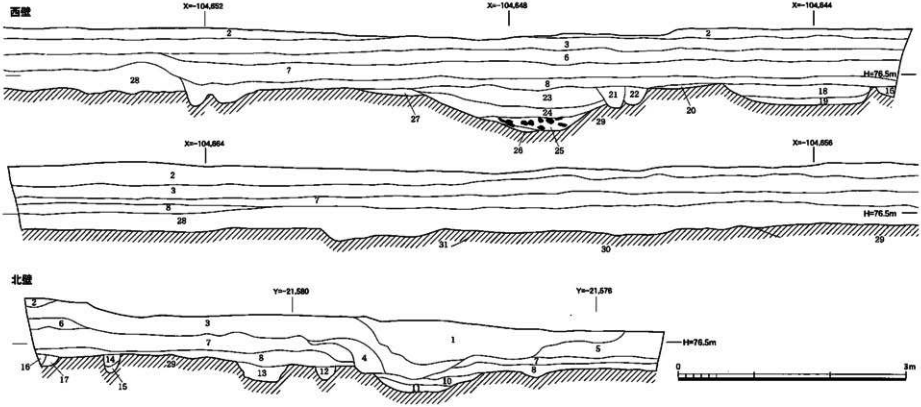


図123　調査区断面図（1：50）

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　小礫混シルト～細砂（現代盛土）
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　管～極粗砂混シルト～極細砂　（現代盛土）
3　2.5Y5/4 黄褐色　粘質シルト（現代盛土）
4　2.5Y4/2 暗灰黄色　極粗砂～小礫混シルト～細砂（現代石積裏込）
5　10YR3/2 黒褐色　極粗砂～小礫混シルト～極細砂（耕作土）
6　2.5Y4/2 暗灰黄色　極粗砂～小礫混シルト～極細砂　炭化物微量混（耕作土）
7　2.5Y4/2 暗灰黄色　極粗砂～小礫混シルト～極細砂（耕作床土）
8　10YR4/2 灰黄褐色　極粗砂混シルト～極細砂　マンガン多量含（耕作床土）
9　10YR2/2 黒色　粗～極粗砂混やや粘質シルト～細砂　0.5～10cmの礫、炭化物多量混
10　10YR3/2 黒褐色　極粗砂～小礫混シルト～礫砂（溝８）
11　10YR3/2 黒褐色　やー粗砂　やや砂質　炭化物少量混（溝８）
12　10YR4/3 にぶい黄褐色　シルト～極細砂　0.5～１cmの礫少量混（柱穴５）
13　10YR3/2 黒褐色　極粗砂～小礫混　シルト～極細砂　炭化物少量混（土坑２）
14　10YR4/2 灰黄褐色　シルト～極細砂　0.5～２cmの礫少量混（Pit１）
15　10YR3/2 黒褐色　細礫～細砂　炭化物少量混（Pit１）
16　10YR4/2 灰黄褐色　小礫混シルト　マンガン多量含（Pit21）
17　10YR4/2 灰黄褐色　シルト～細砂に7.5YR4/6褐色シルトブロック混（Pit21）
18　10YR4/2 灰黄褐色　小礫混粘質シルト　マンガン多量、１～３cmの礫少量混（土坑22）
19　10YR4/1 褐灰色　極粗砂～小礫混粘質シルト（土坑22）
20　10YR2/1 黒色　シルト～細砂　最下層に炭化物著く堆積
21　10YR4/2 灰黄褐色　シルト～極細砂　１～３cmの礫やや多量混（Pit100）
22　10YR4/2 灰黄褐色　細粗砂～小礫混シルト～細礫砂（Pit31）
23　10YR4/2 灰黄褐色　極粗砂～小礫混シルト～極細砂　0.5～３cmの礫少量、炭化物少量混（土坑30）
24　10YR4/2 灰黄褐色　やや粘質シルト～極細砂　炭化物やや多、0.5～２cmの礫少量混（土坑30）
25　10YR4/1 褐灰色　粘質シルト　炭化物多量、５～10cmの礫多量混（土坑30）
26　10YR4/3 にぶい黄褐色　粘質シルト　炭化物少量混（土坑30）
27　10YR4/2 灰黄褐色　シルト～極細砂に10YR5/6黄褐色シルトブロック多量混（土坑44）
28　10YR4/4 褐色　極粗砂～小礫混シルト　固く締まる　一部５～15cmの礫多量混（遺物包含層）
29　10YR5/6 黄褐色　シルト～極細砂（無遺物層）
30　10YR5/6 黄褐色　小礫混　砂質混～中砂（無遺物層）
31　2.5Y3/2 黒褐色　砂質中～細砂　0.5～15cmの礫多量混（無遺物層）

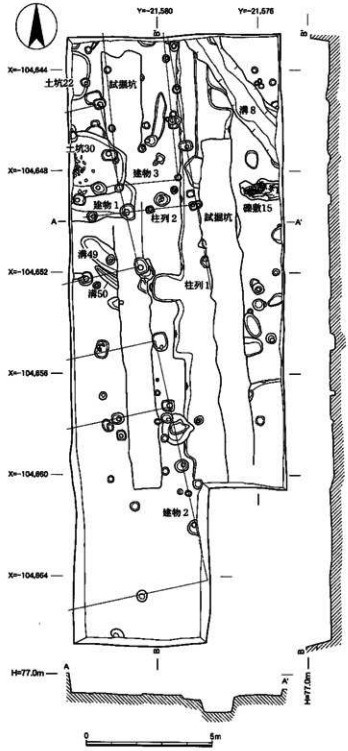


図124　調査区平面図（1：150）

る。遺構は、全て無遺物層上面で検出した。検出面の標高は76.3m前後で、ほぼ水平である。

（2）遺　構（図124・表23）

遺構は、全て無遺物層上面で検出した。遺構の重複関係や出土遺物から奈良時代から平安時代中期にかけての間で時期差がとらえられる。以下に主要な遺構の概略を示す。

建物1（図125、図版34）　調査区の北西部で検出した掘立柱建物である。建物の西半は調査区外に広がっており、桁行3間、梁間1間以上の南北棟の建物と考えられる。方位は北に対して約15度西に振れる。柱間は、桁行・梁間ともに2.2mの等間である。柱掘形の平面形は一辺40～60cmの方形のものと、径約50cmの楕円形のものがある。検出面からの深さは15～30cmで、柱痕跡から推測される柱径は17～20cmある。

建物2（図126、図版35）　調査区の南西部で検出した掘立柱建物である。桁行3間、梁間1間以上の南北棟建物で、北には庇が取り付く。調査区外に広がるため全体

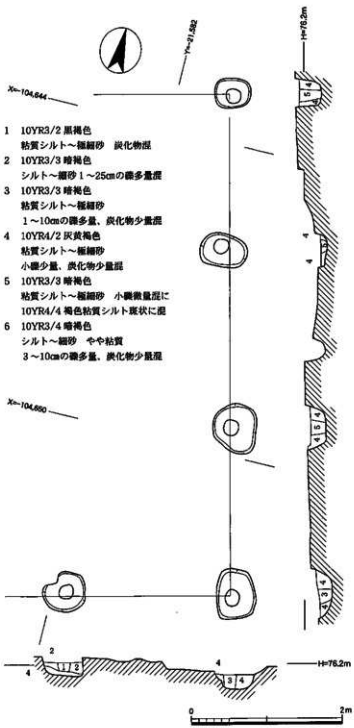


図125　建物1実測図（1：50）

表23　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
奈良時代	土坑22、溝49・50	
平安時代	建物1・2・3、柱列1・2、溝8、土坑30、礫敷15	

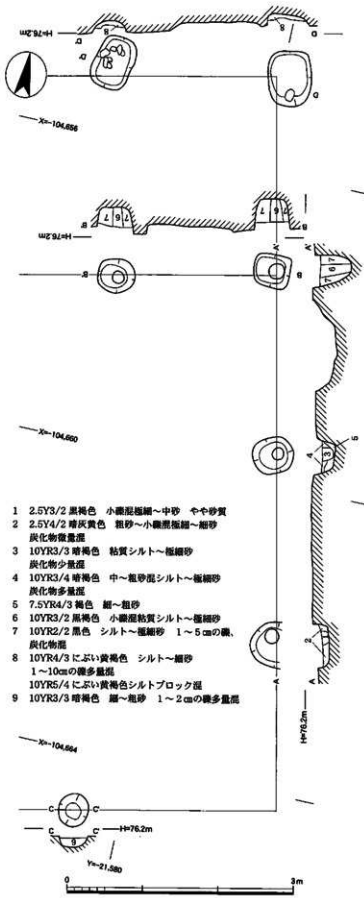
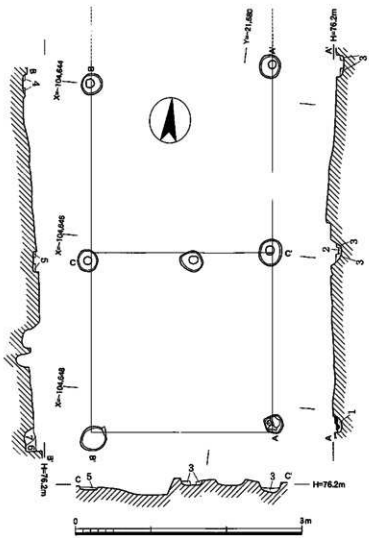


図126 建物2実測図（1：50）



1　10YR3/2 黒褐色　シルト～極細砂に10YR4/4褐色シルト少量混
2　10YR3/1 黒褐色　シルト～極細砂　炭化物少量混
3　10YR3/2 黒褐色　シルト～極細砂に10YR4/4褐色シルト少量混
4　10YR4/3 にぶい黄褐色　シルト～極細砂　炭化物や や多、3～7㎝の礫少量混
5　10YR3/2 黒褐色　シルト～細砂　炭化物多量混
6　10YR2/2 黒色　粘質シルト～極細砂　1～2㎝の礫微量、炭化物多量混
7　10YR3/2 黒褐色　シルト～極細砂　炭化物微量混に10YR4/4褐色シルトのブロック混

図127　建物３実測図（１：50）

の規模は不明である。方位は北に対して約15度西に振れる。建物１とほぼ柱筋を揃える。柱間は、桁行が2.3mの等間。梁間は北柱筋では2.1m、南柱筋では2.6mある。庇の出は2.65mである。身舎の柱掘形の平面形は、北東の隅柱が一辺40～50㎝の方形、それ以外は径40～50㎝の楕円形である。検出面からの深さは20～50㎝ある。柱痕跡から推測される柱径は15～18㎝。庇の柱掘形の平面形は一辺40～60㎝の長方形で、深さは検出面から約15㎝ある。柱は抜き取りが行われていた。

建物３（図127）　調査区の北側ほぼ中央で検出した。建物の北は調査区外に広がる可能性がある。桁行２間以上、梁間１間の南北棟建物である。南から１間目の梁間中央に間仕切りと考えられる柱穴がある。方位は北に対して約５度西に振れる。柱間は、桁行・梁間ともに2.4m前後である。柱掘形の平面形は、径25～30㎝の円形で、検出面からの深さは５～15㎝ある。柱痕跡の径は

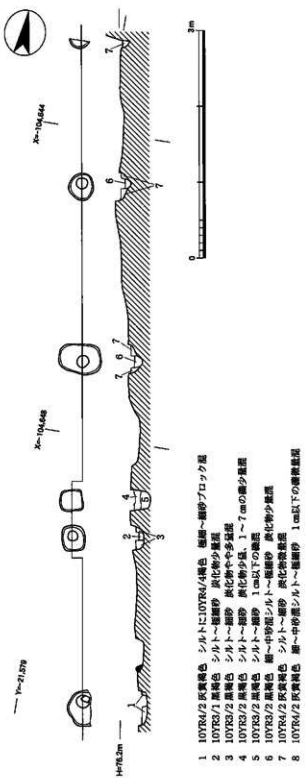


図128　柱列１実測図（１：50）

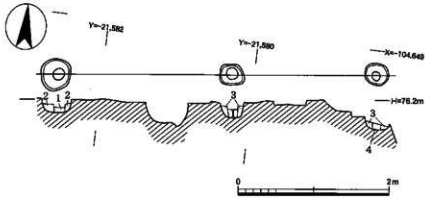
約10cm。南東の隅柱では、柱痕跡は認められなかったが、底付近で径５～10cmの石２個と水平に畳かれた平瓦を検出した。根石として使用された可能性がある。

柱列１（図128）　調査区の北半中央で検出した南北方向の柱列である。調査区内では、４間分を検出した。方位は北に対して約10度西に振れる。北から３番目の柱は建て替えを行ったと考えられる。建て替え後の柱間は、北端が2.0m、それ以外は2.3m前後である。柱掘形の平面形は、北２つは径35cm前後の円形、南４つは一辺30～50cmの方形ないしはいびつな楕円形である。検出面からの深さは10～25cm。柱痕跡から推測される柱径は13～16cmある。

柱列２（図129）　調査区の北半西側で検出した東西方向の柱列である。調査区内では２間分を検出した。方位は北に対して約６度西に振れる。柱間は、西から2.3m、1.9mである。柱掘形の平面形は、西から直径40cmの円形、一辺25～30cmの方形、直径30cmの円形である。検出面からの深さは15～20cm。柱痕跡の径は10～15cmある。

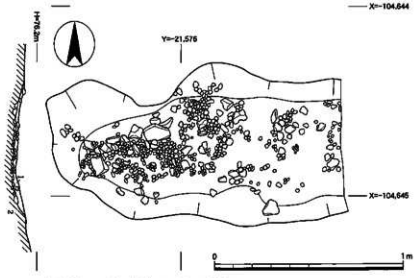
溝８　調査区の北東隅で検出した。南東から北西方向の溝である。調査区内では約５m分を検出した。検出面での規模は、幅１～1.4m、深さ25～30cm。断面形はU字形を呈する。底は北西に向けて傾斜する。埋土は、下層がやや砂質の強い中砂から粗砂の水流堆積で（図123-11層）、上層は小礫の混じるシルトから細砂の固く締まる層である（図123-10層）。平安時代前期の遺物が出土した。

礫敷15（図130、図版35）　調査区の北東部で検出した。東西方向の礫敷で、東は調査区外へ広がる。幅約0.8m、検出長は約1.5mある。径１～15cmの礫が密に敷かれる。礫の間から平安時代前期の遺物片が少量出土した。



1　10YR3/1 黒褐色　粘質シルト～極細砂　炭化物多量混
2　10YR3/2 黒褐色　シルト～細砂　1cm以下の礫少量、炭化物少量混
3　10YR3/2 黒褐色　シルト～極細砂に10YR6/4にぶい黄橙色シルト質状に混
4　10YR3/1 黒褐色　シルト～極細砂　炭化物多量混

図129　柱列２実測図（１：50）



1　10YR4/2 灰褐色　シルト～細砂　1～5cmの礫含き
2　10YR5/6 黄褐色　シルト（地山）

図130　礫敷15実測図（１：20）

土坑30　調査区の北西部で検出した。西は調査区外へ広がる。建物１・３の柱穴を削平する。平面形は径約2.5mの楕円形で、断面形は擂鉢状を呈する。深さは最深部で約40cmある。埋土（図123-23～26層）からは、炭化物の他に焼けた瓦や平安時代前期・中期の土器類が多量に出土した。遺物の出土状況は下層から上層まで、大きな差異はなく、一度に埋まったものと考えられ、廃棄土坑として使用された可能性がある。

土坑22　調査区の北西部隅で検出した。西半は調査区外に広がる。平面形は楕円形の土坑で、径約2.0m、深さは約25cmある。底は平坦で断面形は逆台形状を呈する（図123-18・19層）。埋土から、８世紀後半の所産と考えられる土師器杯・皿、須恵器杯などが出土した。土坑22の南で検出した北西から南東方向の溝49・50は、遺物が出土していないが、土坑22と埋土が類似し、平安時代の建物群とは方位の振れが異なることから、同時期の遺構の可能性がある。

3．遺　物

遺物は、遺物コンテナにして10箱出土した。時期別には平安時代前期・中期のものが９割を占め、縄文時代、古墳時代、奈良時代、近代の遺物が各少量ある（表24）。種別では、大半を占める土器の他に、瓦、金属製品、石器が出土している。以下、種別に概要を述べる。

（1）土器類

土器類は、破片数にして1,419点出土した。そのうち、古墳時代・奈良時代・近代のものを除いた平安時代前期・中期に位置付けられるものは1,349点ある。その種別の内訳は、土師器46％、須恵器26％、白色土器15％、緑釉陶器10％、黒色土器２％、灰釉陶器１％である。以下に、平安時代の建物に関連すると考えられる遺構と遺物包含層から出土した土器について概要を述べる。掲載土器の詳細は表26にまとめた。

建物１・３、柱列１・２出土土器（図131）　１～11は、建物１・３、柱列１・２から出土した土器である。１は柱列２出土の土師器甕である。口縁部外面は横ナデ、内面は横方向のハケ目が付く。２～７は白色土器である。２は皿、３は椀もしくは皿、４～７は椀で、出土遺構は表26の通りである。高台は全て削出の平高台である。いずれも胎土は精良で、器面の磨滅が著しいが、７の外面には丁寧なヘラミガキが認められる。８・９は須恵器である。８は建物３出土の皿である。口縁部端部は外反する。外面には密なヘラミガキを施す。９世紀後半に位置付けられるものである。９は柱列２出土の椀である。高台は削出の輪高台で、外面はヘラミガキを施す。10・11は緑釉陶器である。10は建物３出土の椀で、磨滅が著しく釉薬は剥がれ、痕跡が残る。焼成は軟質である。11は建物１の柱抜き取り穴から出土した椀である。高台は貼付高台で、高台の接地部には沈線がめぐる。焼成は須恵質で堅緻。釉の厚さは薄く、色は濃緑色である。９世紀後半から

表24　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	石器（石鏃）	6箱	石鏃１点	4箱	0箱
奈良時代	土師器、須恵器				
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器		土師器10点、須恵器19点、緑釉陶器16点、灰釉陶器２点、白色土器13点		
	軒瓦、平瓦、丸瓦		軒平瓦１点、平瓦４点		
近　代	染付、焼締陶器、施釉陶器	6箱		6箱	0箱
合　計		12箱	66点（２箱）	10箱	0箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より２箱多くなっている。

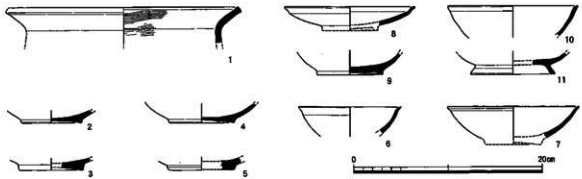


図131　建物1・3、柱列1・2出土土器実測図（1：4）

末頃の所産と考えられる。

土坑30出土土器（図132、図版36、表25）　遺物は層別に取り上げを行ったが、量や種類、時期の違いは認められなかったため、一括で報告する。9世紀半ばから10世紀末頃までのものが混在する。破片数では301点ある。比率は表25に示した通りで、土師器、須恵器に次いで白色土器が高い割合を占める。また、杯・椀・皿の供膳形態に限れば、白色土器の破片数が最も多い。また、須恵器の杯・椀・皿のうち約26％にあたる8点は、緑釉陶器と共通する器形を示すものである。

12～14は土師器である。12・13は皿で器壁は薄く、口縁端部が強いナデにより屈曲する。10世紀後半代に位置付けられるものである。14は高杯の脚柱部である。色調は灰白色を呈する。面取りは8面行う。15～21は須恵器である。15は椀で、口縁部は斜上方に直線的に開く。器壁は薄い。16～18は椀もしくは皿の底部で、16は削出の蛇の目高台、17は削出の平高台、18は削出の輪高台である。16・17の底部内面にはヘラミガキが認められる。18の高台は、削出のちナデを行うため丸みをおびる。19・20は壺の底部である。ともに底部に糸切り痕をのこす。21は鉢である。口縁端部は肥厚する。22～24は白色土器。22は三足盤の脚部で、丁寧なナデで仕上げる。23・24は椀もしくは皿の底部である。23は削出の平高台、24は削出の蛇の目高台である。調整は磨滅のため不明。25～31は緑釉陶器である。25は皿で、体部と口縁部の境をヘラケズリしたのち全面にヘラミガキを施す。焼成は軟質で、釉色は淡緑色を呈する。26は椀

表25　土坑30出土土器比率表

器種	器形	破片数	比率（%）	
土師器	杯・椀・皿	42	40.5	
	高杯・盤・鉢	12	11.5	
	甕・窯・鍋	25	24.0	
	その他	0	0.0	
	不明	25	24.0	
	小計	104	100.0	34.6
黒色土器	杯・椀・皿	4	100.0	
	甕	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	4	100.0	1.3
須恵器	杯・椀・皿	31	37.4	
	壺・瓶	9	10.8	
	鉢	0	0.0	
	甕・大型壺	35	42.2	
	その他	0	0.0	
	不明	8	9.6	
	小計	83	100.0	27.6
緑釉陶器	杯・椀・皿	41	97.6	
	壺・瓶	1	2.4	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	42	100.0	13.9
白色土器	杯・椀・皿	50	84.7	
	高杯	2	3.4	
	盤	1	1.7	
	その他	0	0.0	
	不明	6	10.2	
	小計	59	100.0	19.6
灰釉陶器	杯	9	100.0	
	壺・瓶	0	0.0	
	その他	0	0.0	
	不明	0	0.0	
	小計	9	100.0	3.0
総計		301	100.0	100.0

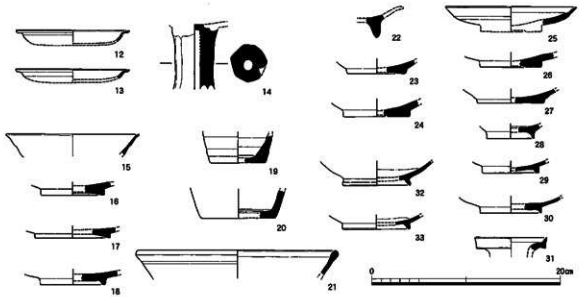


図132　土坑30出土土器実測図（1：4）

もしくは皿である。高台は削出の蛇の目高台で、丁寧なヘラミガキを行ったのち全面に施釉する。焼成は軟質で、釉色は黄緑色を呈する。27～30は椀である。27の高台は削出の平高台で全面に施釉する。焼成は軟質で、釉色は淡緑色。28の高台は断面三角形の貼付高台で、底部内面には浅い沈線が一条めぐる。施釉は全面に施す。焼成は軟質で、釉色は濃緑色である。29の高台は貼付の輪高台である。焼成は須恵質。釉薬の厚さは薄く、釉色は緑色。高台は無釉である。30の高台は貼付の輪高台である。焼成は須恵質で釉色は黄緑色、高台は無釉である。31は壺の口縁部である。焼成は軟質で、釉薬は厚く、釉色は濃緑色を呈する。32・33は灰釉陶器の椀である。いずれも貼付高台で、底部を除く内面に施釉する。33の高台接地部には重ね焼きによる釉薬が付着する。

遺物包含層出土土器（図133・134、図版36）　9世紀半ばから10世紀後半までの時期幅のある資料であるが、調査地付近での遺物群の存続時期を示すものと考えられる。34～39は土師器である。34は皿で、口縁部が強い横ナデにより屈曲する。35は皿で、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸みをおびる。36の皿の口縁部は内湾して立ち上がる。端部は丸くおさめ、内面に浅い沈線がめぐる。外面は粗いヘラケズリを行う。9世紀前半から半ばに位置付けられるもので、包含層出土の遺物の中では最も古い。37は、高杯の脚柱部である。面取りは8面で、色調は灰白～白色を呈する。38・39は甕である。38の口縁部は横ナデ、体部外面はナデ、内面はヘラケズリを行う。口縁端部は丸くおさめる。39は口縁部内面は横ハケ目、外面はナデで仕上げる。口縁端部は内側に肥厚し、面をもつ。40～49は須恵器である。40・41は皿。40の口縁端部は外反し、外面はヘラミガキを行う。41の高台は削出の蛇の目高台である。調整はナデで仕上げる。42～46は椀である。42の口縁端部は外反し、外面にはヘラミガキを行う。43は削出の平高台で、底部には糸切り痕がのこる。口縁端部は緩く外反する。44は削出の蛇の目高台、45は削出の平高台、46は削出の輪高台である。45の外面はヘラミガキを行う。47は蓋、48は壺の頸部である。49は、いわゆる瓶子で口縁部以外はほぼ完存する。底部は糸切り痕が明瞭にのこる。50～53は白色土器である。

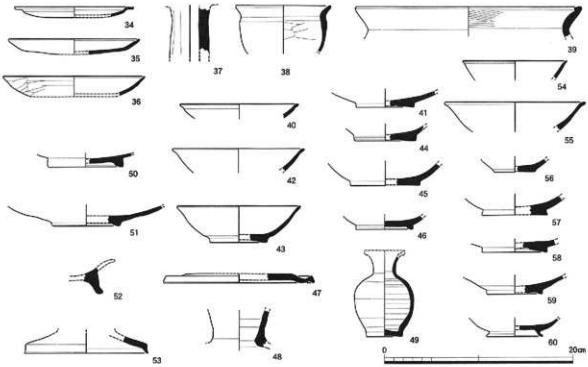


図133　遺物包含層出土土器実測図（1：4）

50は椀もしくは皿の高台で、削出の輪高台である。内外面ともに丁寧にヘラミガキを行う。51は皿である。削出の輪高台で、ケズリののち横ナデを加える。体部はヘラミガキを行う。52は三足盤の脚である。外面は面取りを行う。53は高杯の脚端部である。端部が下方に突出する。54～60は、緑釉陶器である。54～57・60は椀、58は椀もしくは皿、59は皿である。54は須恵質で釉は厚い。釉色は濃緑色である。55は軟質で、内外面とも丁寧なヘラミガキを行う。釉は薄く、黄緑色である。56は小型のもので軟質。底部には糸切り痕がのこる。全面に施釉する。釉はやや薄く、黄緑色である。57の焼成は軟質で、胎土には砂粒を多く含む。高台は削出の平高台である。内外面ともヘラミガキを行い、全面に施釉する。釉は薄く、白みがかった黄緑色である。58の焼成は軟質で、高台は削出の蛇の目高台である。内外面ともにヘラミガキを行い、全面に施釉する。釉はやや厚く、黄緑色である。59は須恵質で、高台は削出の輪高台である。内面にはヘラミガキが認められる。全面に施釉する。釉は薄く、黄緑色である。60は貼付高台で焼成は須恵質。全面に施釉する。釉はやや厚く、濃緑色である。

図134　瓶子49

表26　掲載土器一覧表

No	器種	器形	出土遺構・層位	口径	器高	底径	色　調	備　考
1	土師器	甕	柱列2	(25.0)	<3.9>		7.5YR6/6橙色	残存口縁部1/4
2	白色土器	皿	建物3		<1.3>	(6.2)	2.5Y8/1灰白色	残存1/8
3	白色土器	椀か皿	建物3		<1.3>	(6.6)	2.5Y8/2灰白色	残存1/6
4	白色土器	椀	建物3		<2.1>	(6.8)	2.5Y8/1灰白色	残存1/5
5	白色土器	椀	柱列1		<1.4>	(6.9)	2.5Y8/1灰白色	残存1/10
6	白色土器	椀	建物1	(10.8)	<2.8>		2.5Y8/1灰白色	残存1/10
7	白色土器	椀	柱列1	(14.0)	<3.3>		10YR8/2灰白色	残存1/5
8	須恵器	皿	建物3	(13.8)	<2.0>		N7/0灰白色	残存1/8
9	緑釉陶器	椀	建物3	(13.8)	<3.3>		2.5Y8/1灰白色	残存1/10 軟質
10	須恵器	椀	柱列2		<2.4>	(6.8)	N7/0灰白色	残存1/4
11	緑釉陶器	椀	建物1		<2.3>	(6.8)	N6/0灰色	残存1/10 須恵質　釉は濃緑色
12	土師器	皿	土坑30	(14.0)	<1.2>		7.5YR7/6橙色	残存1/10以下
13	土師器	皿	土坑30	(14.0)	<1.0>		7.5YR7/6橙色	残存1/10以下
14	土師器	高杯	土坑30				10YR8/2灰白色	残存脚柱部1/4
15	須恵器	椀	土坑30	(14.0)	<2.2>		N7/0灰白色	残存口縁部1/10
16	須恵器	椀か皿	土坑30		<1.4>	(6.6)	N6/0灰色	残存底部1/4
17	須恵器	椀か皿	土坑30		<1.1>	(8.0)	N7/0灰白色	残存底部1/3
18	須恵器	椀か皿	土坑30		<1.5>	(6.8)	N7/0灰白色	残存底部1/4
19	須恵器	壷	土坑30		<3.0>	(5.8)	10YR5/3にぶい黄褐色	残存1/10
20	須恵器	壷	土坑30		<3.0>	(7.8)	N6/0灰色	残存1/10
21	須恵器	鉢	土坑30	(21.0)	<2.6>		10YR7/1灰白色	残存1/10以下
22	白色土器	盤	土坑30				10YR8/1灰白色	残存脚部のみ
23	白色土器	椀か皿	土坑30		<1.5>	(6.0)	10YR8/2灰白色	残存底部1/4
24	白色土器	椀か皿	土坑30		<1.8>	(7.0)	2.5Y8/1灰白色	残存底部1/6
25	緑釉陶器	皿	土坑30		<1.9>	(14.0)	10YR8/4浅黄橙色	残存1/10　軟質　釉色は淡緑色
26	緑釉陶器	椀か皿	土坑30		<1.6>	(6.5)	10YR8/3浅黄橙色	残存底部1/4 軟質　釉色は淡緑色
27	緑釉陶器	椀	土坑30		<1.5>	(7.0)	2.5Y8/1灰白色	残存底部1/3 軟質　釉色は淡緑色
28	緑釉陶器	椀	土坑30		<1.6>	(5.0)	10YR8/3浅黄橙色	残存底部1/3　軟質　釉色は濃緑色
29	緑釉陶器	椀	土坑30		<1.4>	(6.0)	N6/0灰色	残存1/10　須恵質　釉色は緑
30	緑釉陶器	椀	土坑30		<1.8>	(6.5)	N7/0灰白色	残存1/8　須恵質　釉色は淡緑色
31	緑釉陶器	壷	土坑30	(7.6)	<1.5>		10YR8/1灰白色	残存口縁部1/6　軟質　釉色は濃緑色
32	灰釉陶器	椀	土坑30		<2.5>	(7.0)	2.5Y7/1灰白色	残存底部1/6
33	灰釉陶器	椀	土坑30		<1.5>	(7.0)	2.5Y7/1灰白色	残存底部1/6
34	土師器	Ⅲ	遺物包含層	(12.4)	<1.1>		10YR7/3にぶい黄橙色	残存1/10
35	土師器	Ⅲ	遺物包含層	(14.8)	<1.7>		7.5YR7/4にぶい橙色	残存1/10
36	土師器	Ⅲ	遺物包含層	(15.0)	<2.0>		7.5YR7/4にぶい橙色	残存1/8
37	土師器	高杯	遺物包含層				10YR8/2灰白色	残存脚柱部のみ
38	土師器	甕	遺物包含層	(10.0)	<5.0>		5YR6/4にぶい橙色	残存1/10
39	土師器	甕	遺物包含層	(23.8)	<3.2>		10YR5/2灰黄褐色	残存1/10
40	須恵器	皿	遺物包含層	(12.4)	<1.6>		5Y7/1灰白色	残存口縁部1/6
41	須恵器	皿	遺物包含層		<1.7>	(6.0)	5Y7/1灰白色	残存1/8
42	須恵器	椀	遺物包含層	(14.0)	<2.4>		2.5Y7/1灰白色	残存1/10
43	須恵器	椀	遺物包含層	(13.0)	3.4	(6.0)	N7/0灰白色	残存1/4
44	須恵器	椀	遺物包含層		<1.7>	(6.4)	N7/0灰白色	残存1/8
45	須恵器	椀	遺物包含層		<2.4>	(7.2)	N8/0灰白色	残存1/6
46	須恵器	椀	遺物包含層		<1.5>	(6.0)	N7/0灰白色	残存1/8
47	須恵器	蓋	遺物包含層	(17.8)	<1.0>		N7/0灰白色	残存1/10
48	須恵器	壷	遺物包含層				N5/0灰色	頸部の一部のみ残存
49	須恵器	瓶子	遺物包含層		<8.5>	3.8	2.5Y7/1灰白色	残存7/8
50	白色土器	椀か皿	遺物包含層		<1.5>	(7.8)	N8/1灰白色	残存1/8
51	白色土器	皿	遺物包含層		<2.2>	(6.6)	10YR8/2灰白色	残存1/6
52	白色土器	盤	遺物包含層				10YR8/2灰白色	残存脚のみ
53	白色土器	高杯	遺物包含層		<1.9>	(13.0)	10YR8/1灰白色	残存脚底部の1/6
54	緑釉陶器	椀	遺物包含層	(13.0)	<1.9>		N5/0灰色	残存1/10 須恵質　釉は濃緑色
55	緑釉陶器	椀	遺物包含層	(14.6)	<3.0>		2.5Y8/2灰白色	残存1/6 軟質　釉色は淡緑色
56	緑釉陶器	椀	遺物包含層		<1.4>	(4.4)	2.5Y8/1灰白色	残存1/8 軟質　釉色は淡緑色
57	緑釉陶器	椀	遺物包含層		<2.2>		10YR7/3にぶい黄橙色	残存1/8　軟質　釉色は淡緑色
58	緑釉陶器	椀か皿	遺物包含層		<1.3>	(7.0)	10YR8/2灰白色	残存1/10 軟質　釉色は淡緑色
59	緑釉陶器	皿	遺物包含層		<2.0>	(7.0)	5Y7/1灰白色	残存1/8　須恵質　釉色は淡緑色
60	緑釉陶器	椀	遺物包含層		<1.9>	(6.0)	N7/0灰白色	残存1/8 須恵質　釉色は濃緑色

※（）は復元数値、＜＞は残存数値。単位はcm。

（2）瓦類（図135・136）

瓦は、破片数にして318点出土した。二次焼成を受けたものが多い。内訳は平瓦60％、丸瓦8％、軒平瓦1％、不明31％である。また、全体の約80％にあたる256点が土坑30から出土した。土坑30出土の種別割合は、小片のため種類が判別できないものを除くと、平瓦85％、丸瓦14％、軒平瓦1％である。図化した61～65は全て土坑30から出土したものである。軒平瓦は、点数では2点出土したが、1点は瓦当を欠損していた。61は均整唐草文軒平瓦である。全体の作りがやや

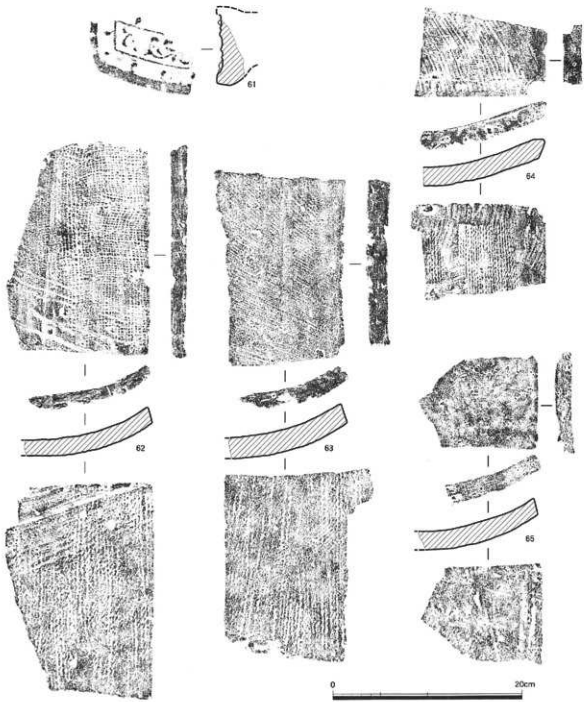


図135　瓦拓影・実測図（1：4）

シャープさに欠けることや唐草のパターンから、平安時代中期前半代の山城産と考えられる。62～65は平瓦である。全て凹面は布目、凸面は縄タタキである。胎土は粗く砂粒を多量に含む。残存状況の良好な個体を掲載したが、出土した平瓦は、これらを含め全て側縁が片側しか残存しない。また、幅15cmを超える破片はなく、63・64のように割れ面が側縁に平行するものが多いことから、平瓦を割って熨斗瓦として使用したものと考えられる。

図136　軒平瓦61

図137　石鏃66

図138　石鏃実測図（1：1）

（3）石器（図137・138）

66は建物２の柱穴掘形から出土した混入品の石鏃である。凹基式で風化が進む。植物園北遺跡の北西にあたる賀茂川左岸には縄文時代の石器散布地である上賀茂中山町遺跡や、縄文時代の集落跡とされる上賀茂遺跡があり関連が窺える遺物である。

4．ま と め

今回の調査では、奈良時代の土坑・溝、平安時代前期から中期の建物跡とそれに付随する柵と考えられる柱列を検出した。平安時代の建物群については、建物１と２は、柱列が通ることや柱穴の規模などの類似性から同時併存した建物と考えられる。また、柱列１は、建物１・２とほぼ平行することから、建物１・２を区画する柵であったと推測される。これらの建物の成立時期は、柱穴掘形の出土遺物から９世紀の半ば頃、廃絶時期については、建物１の柱抜き取り穴出土の遺物の時期から９世紀末頃と推測される。建物を構成する柱穴の重複関係と出土遺物の時期から、この建物１・２・柱列１の廃絶後、小規模な柱穴で構成される建物３・柱列２が建てられたと考えられる。建物３の成立時期は明瞭でないが、廃絶時期は、建物３の柱穴を削平する土坑30の出土遺物の中で最も新しいものが10世紀後半から末頃に位置付けられるものであることから、その頃までに廃絶したものと思われる。建物３の廃絶以降は建物が建てられた痕跡は見られず、本調査地での建物の存続時期は、平安時代前期・中期に限定されたものであると言える。調査区南側に堆積する遺物包含層出土の遺物についても10世紀の後半を下るものは認められず、そのことを裏付ける。

1997年に調査地に隣接する敷地で実施された試掘調査でも平安時代の掘立柱建物が１棟見つか

っている[3]。柱穴の規模が類似することなどからも、今回見つかった建物群と一連のものである可能性が高い。これらの建物は、平安京域で発見される建物跡と規模が類似する。さらに、今回の調査で熨斗瓦が出土したことで大棟に瓦が用いられた建物が存在したこともわかった。こうした特徴は、平安京外においては、一般的な居宅の形態を逸脱するものである。また、今回見つかった建物群のもう一つの特徴として、緑釉陶器や白色土器の出土比率が同時期の平安京跡出土のものと比較して高いことが挙げられる[4]。白色土器は、平安京内では普遍的に出土するが、相対的な出土量は極めて少ない遺物である。その中で、白色土器が供膳形態の土器の中で占める割合が極めて高い例が内裏やその周辺に集中することから、宮中を中心とする特定の用途に使用された器物である可能性が示唆されている[5]。その点で、今回の調査地における白色土器の出土比率の高さは、建物群の性格を考える上で重要な要素であると言えるだろう。調査地の北西約1kmには賀茂別雷神社が位置し、調査地の西一帯には明神川に沿って社家町が形成されるという立地にあることも考慮に入れ、建物群の性格を今後明らかにしていく必要がある。周辺調査での資料の増加が望まれる。

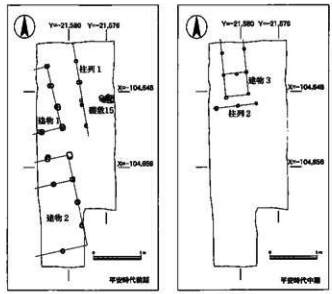


図139　平安時代の遺構変遷図（1：400）

註

1）近藤奈子・菅田　薫「植物園北遺跡」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2003年

2）京都市埋蔵文化財調査センター編『京都市内遺跡試掘調査概報　平成9年度』京都市文化市民局　1998年

3）註2に同じ

4）小森俊寛「平安京の土器・陶磁器の概要」『平安京提要』角川書店　1994年

5）平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店　1994年

XI　寺戸大塚古墳

1．調査経過

この調査は文化庁国庫補助事業による寺戸大塚古墳の墳丘確認調査である。寺戸大塚古墳は京都盆地の南西部、向日丘陵上にある古墳時代前期の前方後円墳である。墳丘のほぼ中軸線上に行政区境があり、西半は京都市西京区大枝南福西町２丁目、東半は向日市寺戸町芝山に属している。現状として前方部の東半は民有地の竹林、西半は京都市所有の竹林、後円部は両市によってそれぞれ買収され、下草を苅った疎林となっている。墳丘の状態として、後円部墳丘は比較的原形を保っているが、前方部は筍栽培の土取りや盛土によって原形を窺うのが困難な状況になっている。さらに、後円部の西側（京都市側）も随所に土取坑が認められ、その内、数箇所は崖面となり、崩壊の危険性が生じている（図141）。このため、今回の調査は、将来の復元整備に向けての基礎資料作りと墳丘の仮保存処置を実施することを目的とした。具体的には次の３工程からなる。

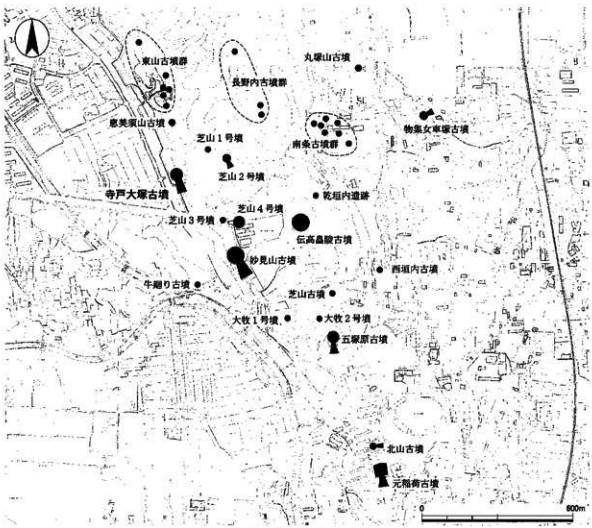


図140　調査位置図（１：15,000）

① 現状の記録－古墳全体の現状写真撮影と地形測量（３次元オルソ）

② 発掘調査－傷みの激しい後円部西側について、現状の土取坑を利用して断面観察を行い、墳丘の保存状況を調査する。

③ 仮保存処置－崩壊の危険性のある部分に土留めを施し、崩落を防止する措置を行う。

実際の調査は調査区への進入路を確保するために、前方部の竹を一部伐採することから開始した。その後、現状の写真撮影と地形測量を実施した。この作業と並行して、後円部西側の調査も開始した。調査区は墳丘頂部から裾までの残存状況が観察できる位置に、なおかつ調査による破壊を最小限度にとどめるために、既存の土取坑を利用して、後円部西側の中央部に４箇所（１～４トレンチ）、西側くびれ部に３箇所（５～７トレンチ）を設定した（図143）。

調査の結果、後円部西側で墳丘２段目の葺石を確認し、くびれ部でも２段目の葺石の基底石列を確認した。また、各断面で墳丘の構築状況を確認した。

最後に、遺構の埋め戻しと、伐採した竹材を利用して墳丘の崖面に土留め処理を施して調査を終了した。

２．古墳の概要

寺戸大塚古墳の所在する向日丘陵上には、同古墳のほか、元稲荷古墳、北山古墳、五塚原古墳、妙見山古墳などの前期古墳があり、これらで向日丘陵古墳群を形成している。この古墳群は京都盆地における最古のもので、かつて当地を支配した有力首長の系譜を引くものであるとされている。寺戸大塚古墳はその古墳群の最も北側に位置している（図140）。

これまでの調査から、全長98m、後円部の径57m、前方部の幅38m、前方部２段、後円部３段築成の墳丘をもち、その主軸は北に対してやや西側に傾いていることが明らかとなっている。前方部と後円部には、それぞれ竪穴式石室を有しており、前方部の石室では木棺を安置した粘土床が認められ、副葬品として獣帯鏡１面、三角縁神獣鏡１面のほか、碧玉製の玉類、鉄製の刀剣類や農工具類が出土している。また、後円部の石室にも粘土床が認められその痕跡から割竹形木棺が安置されていたことがわかっている。副葬品としては三角縁神獣鏡２面のほか、硬玉・碧玉製

図141　調査前全景（南から）

図142　作業風景

の玉類や鋤、鉄製の刀剣類や農工具類が出土している。

3．既往の調査

寺戸大塚古墳の調査歴は古く大正12年（1923）年に遡る。この年、筍栽培の土入れ作業に伴い多数の遺物が出土した。報告を受けた京都府史蹟勝地調査委員の梅原末治氏が現地を調査し、前方部に石槨（竪穴式石室）を発見、鉄剣などの遺物を採集した。昭和41年（1966）には京都府教育委員会が向日丘陵周辺の遺跡分布調査の一環で、詳細な墳丘測量図を作成し、これが今日までの墳丘測量図の基本となった。さらに、昭和42・43年（1967・68）には京都大学考古学研究室が、後円部の竪穴式石室や墳丘東部の調査を実施している。竪穴式石室の調査では石室の形態、規模、構造さらには副葬品などが明らかになり、墳丘東部の調査では、後円部の構築方法、埴輪や葺石の状況が明らかとなった。その後、平成10年（1998）には向日市教育委員会が墳丘の地形測量を実施、合わせて前方部の石室に対する詳細な調査が実施され、石室の構造や規模が明らかになった。また翌平成11年（1999）には、後円部北側の調査が実施され、前年の調査成果と合わせて古墳の全長が判明した。

これら既往の調査経過についての詳細は割愛し、下記の表27にまとめる。ちなみに、今回の調査は寺戸大塚古墳に対する８次目の調査となる。

表27　調査概要表

調査次数	調査期間	調査内容	調査機関（担当者）	報告
1	大正12 (1923) 1.28	前方部石槨露出に伴う調査	京都府（梅原末治）	府史４
2	昭和17 (1942) 6.2～6.3	前方部石槨の再調査	京都府（梅原末治）	府史21
3	昭和41 (1966)	墳丘測量調査	京都府教育委員会（堤 圭三郎・高橋美久二）	府概1968
4	昭和42 (1967) 7.15～9.15	後円部墳頂、石槨の調査	京都大学（近藤喬一）	史林54-6
5	昭和43 (1968) 7.14～9.28	後円部墳丘（東半）の調査	京都大学（都出比呂志）	史林54-6
6	平成10 (1998) 6.29～10.31	墳丘測量・前方部石槨の調査	向日市教育委員会（梅本康広ほか）	向日市1999
7	平成11 (1999) 7.1～10.5	後円部（北部）の調査	向日市教育委員会（中塚 良・國下多美樹）	向日市2000
8	平成19 (2007)	墳丘測量調査、後円部（西部）の調査	京都市埋蔵文化財研究所	本報告

※　府史：京都府『京都府史跡名勝地調査報告』
府概：京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』
向日市：財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告』

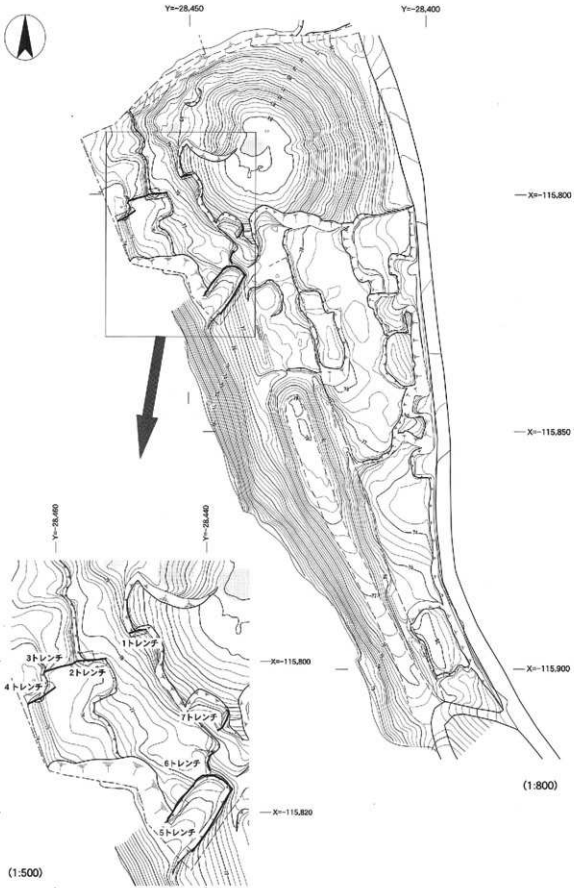


図143　調査トレンチ配置図

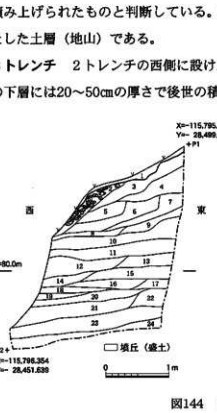
4．遺　構（図144～147、図版37・38）

前述したように、後円部西側中央部分に１～４トレンチを、さらに西側くびれ部に５～７トレンチを設けた。以下各トレンチごとに詳細を述べる。

１トレンチ　後円部西側、墳丘頂部に近い位置に設けた最大幅約２m、高さ約２mの南向き断面である。３段築成の墳丘の３段目であると考えられる。最上層は腐植土などの表層で、その下には葺石とみられる直径10cm前後の円礫が東から西下がりに堆積しているが、元位置を保っているものは少ないようである。それ以下は明黄褐色系の堅く締まった土層と、橙色系のやや礫を含む砂質がかった層が約10～15cm単位で互層に堆積している。上部約0.8mまでは墳丘の斜面の角度に沿うような西下がりの堆積であるが、それ以下は水平に近い堆積である。その状況から、これらの土層は人為的に積み上げたものと考えられる。

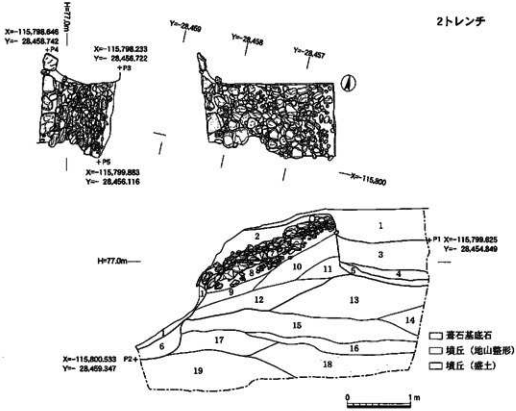
２トレンチ　後円部西側中央付近に設けた南向きの断面である。最上層には腐植土などの表層があり、その下には西から東へ上向きに傾斜する葺石とみられる円礫群を検出した。このため、トレンチの北側を約１m拡張して円礫群を平面的に調査した。その結果、斜面の下端には直径約50cmの礫を４石水平に並べ、その上にやや小振りな礫を鱗状に積み上げている状況が確認できた。大振りな石が第２段斜面葺石の基底石で、その上部の礫は葺石群と考えられ、概ね原状を保っているものとみられる。土層断面を観察すると表面の葺石の下に10～15cmの厚さで拳大の礫層が認められる。これらは葺石の裏込めであると考えられる。その下層には約0.5m前後の厚さで斜面に沿って１トレンチと同じように黄褐色系の土と橙色系の土が堆積している。この層までは人為的に積み上げられたものと判断している。その下層は元来丘陵を形成していた黄褐色系の砂礫を主体とした土層（地山）である。

３トレンチ　２トレンチの西側に設けた北向きの断面である。上層には10～20cmの表層があり、その下層には20～50cmの厚さで後世の積み土、その直下は明褐色砂泥の地山となる。



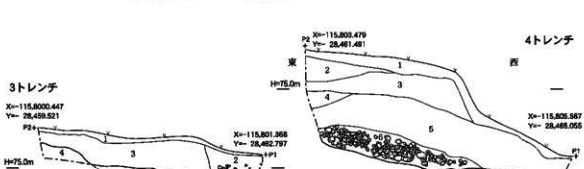
1 表土
2 10YR6/8 明黄褐色砂泥（葺石あるいはその転落したものと思われる円礫多量含む）
3 10YR6/6 明黄褐色砂泥（径２～３cmの礫少量含む）
4 7.5YR5/8 明褐色砂泥（径２～３cmの礫少量含む）
5 7.5YR5/6 明褐色砂泥（径２～３cmの礫少量含む、やや砂っぽい）
6 7.5YR6/6 橙色砂泥（径２～３cmの礫少量含む）
7 10YR7/6 明黄褐色砂泥（よく締まる）
8 10YR7/4 にぶい黄橙色砂泥（よく締まる）
9 7.5YR6/4 にぶい橙色砂泥（径２～５cmの礫多量含む、やや砂っぽい）
10 10YR7/6 明黄褐色砂泥（径３～５cmの礫少量含む）
11 7.5YR6/4 にぶい橙色砂泥（径２～５cmの礫多量含む、やや砂っぽい）
12 5YR6/6 橙色砂泥（径２～５cmの礫やや多く含む）
13 10YR6/6 明黄褐色砂泥
14 7.5YR6/6 橙色砂泥（径３～５cmの礫やや多く含む）
15 10YR7/8 明黄褐色砂泥
16 10YR6/6 明黄褐色砂泥
17 5YR6/6 橙色砂泥（径２～５cmの礫やや多く含む）
18 10YR7/8 明黄褐色砂泥
19 7.5YR6/6 橙色砂泥（径３～５cmの礫やや多く含む）
20 10YR7/6 明黄褐色砂泥
21 7.5YR5/8 明褐色砂泥（径３～８cmの礫含む）
22 7.5YR5/6 明褐色砂泥（径１～３cmの礫含む）
23 7.5YR5/6 橙色砂泥（径３～６cmの礫含む）
24 7.5YR5/8 明褐色砂泥（径１～５cmの礫含む）

図144　１トレンチ断面図（１：60）



1 表土
2 10YR6/8 明黄褐色泥砂（径２～３cmの礫少量含む）
3 7.5YR5/3 にぶい褐色砂泥（径３～５cmの礫・原組土含む）
4 10YR4/4 黄褐色砂泥（径５～10cmの礫大量含む）
5 10YR6/6 明黄褐色砂泥
6 10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥（径５～８cmの礫多量含む）
7 [凝石]
8 10YR7/4 にぶい黄橙色砂泥（径５～８cmの礫多量含む）
9 10YR7/6 明黄褐色砂泥（径３～５cmの礫多量含む）
10 7.5YR7/8 黄褐色砂泥（径２～５cmの礫多量含む、やや砂っぽい）
11 10YR7/4 にぶい黄橙色砂泥
12 10YR7/4 にぶい黄橙色砂泥（径３～５cmの礫多量含む）
13 10YR5/8 黄褐色砂泥（径２～10cmの礫多量含む、よく締まる）
14 10YR5/6 黄褐色砂泥（径２～10cmの礫多量含む、よく締まる）
15 10YR4/4 褐色砂礫（径１～５cmの礫多量含む、よく締まる）
16 7.5YR5/6 明褐色粗砂
17 7.5YR5/8 明褐色砂泥（径３～５cmの礫多量含む）
18 10YR5/6 黄褐色砂泥（径３～10cmの礫多量含む）
19 7.5YR5/8 明褐色砂泥（径３～８cmの礫多量含む）

[攪乱]
[凝石裏込め]
（盛土）
（地山整形）
壊丘



1 表土
2 10YR8/8 黄橙色砂泥（径３～８cmの礫多量含む）
3 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥（径３～８cmの礫多量含む）
4 7.5YR5/8 明褐色砂泥（径３～８cmの礫多量含む）
5 7.5YR5/8 明褐色砂泥（粘質を帯びる）

[地山]

1 表土
2 10YR5/8 黄褐色砂泥（径１～３cmの礫含む）
3 10YR4/6 褐色砂泥（径１～４cmの礫含む）
4 10YR8/8 黄褐色砂泥（径３～８cmの礫多量含む）
5 10YR6/6 明黄褐色砂泥（径１～３cmの礫含む）
6 10YR5/6 黄褐色泥砂（層の大半は径５～20cmの礫が占める）
7 7.5YR5/8 明褐色砂泥（粘質を帯びる）[地山]

図145　2トレンチ実測図および3・4トレンチ断面図（1：60）

表28　遺構概要表

時　代	遺　構	調査区（トレンチ）
古墳時代前期	墳丘盛土	1・2・6・7トレンチ
	葺石	2・5トレンチ

4トレンチ　後円部西側墳丘の裾部に設けた北向きの断面である。上層には10～20cmの表層があり、その下には後世の積み土が数層、約1mにわたって堆積している。その最下層には厚さ30cmにわたって、径10cm大の礫が堆積しているが、これも後世に葺石を片づけた際のものとみられる。その下層は明褐色砂泥の地山で墳丘の裾は確認できなかった。

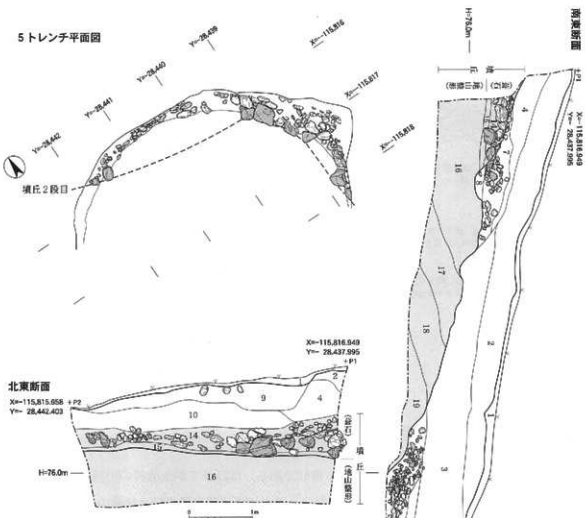
5トレンチ　くびれ部に存在した攪乱坑を利用した調査区である。当初より奥（北東）壁に径50cm前後の石が数個のぞいており、この石の性格を知ることを目的とした。調査の結果、この石は奥壁中央部のやや大きめの石を境に南側（前方部側）に数個が直線的に並び、北（後円部側）は攪乱で欠損するものの、後円部の丸みに沿って並んでいるらしいことが判明した。すなわち奥壁中央のやや大きめの石が第2段斜面基底石のくびれ部における要石で、これを境に前方部および後円部側に基底石が据えられていることがわかった。これらの標高は2トレンチで発見した第2段斜面葺石の基底石とほぼ同じある。その上方には葺石が葺かれている状況も認められる。

南東側の壁面は上層30～60cm表層が西下がりに堆積し、その下に80cm前後の積み土がある。東部にはその下に上述した葺石の基底石があり、これは明黄褐色砂泥層を介しつつ、褐色系の砂礫層である地山の上に乗っている。地山である砂礫層は基底石から西側に約1mほど平坦に延び、そこから西側に約20度の角度で下降し、約3mの地点で再び平坦になる。その裾には径10～20cmの円礫が堆積している。こうした土層の状況から、基底石西側に延びる平坦部は墳丘第1段平坦面、そこから西側へ下る傾斜は墳丘1段目傾斜面、下端の平坦部が墳丘基底平坦面と考えられる。裾部に堆積した礫は葺石が転落して堆積したものであると理解しており、その中に多数の円筒埴輪片が混入していることがそれを裏付けている。1段目平坦面はおよそ標高76.2m、基底平坦面はおよそ標高74.6mである。

トレンチ北西側の断面は竹の根などの影響で土層の堆積状況は判然としないが、ほぼ南東側の断面と似ている。

6トレンチ　5トレンチの北東部に設けた北西向きの断面である。上層には10～40cmの表層が西下がりに堆積している。その下には10cm前後の円礫を含む黄橙色砂泥層が約30度の角度で堆積しており、礫は墳丘第2段斜面の葺石とみられるが、原位置を保っているか否は判然としない。その下層には1トレンチと同様に明黄褐色系の土と黄橙色系の土が10～20cmの厚さでほぼ水平に3層堆積しており、人為的に積んだものとみている。その下層は黄褐色を主体とした地山である。地山面の標高は77.85mである。

7トレンチ　6トレンチの北東部に設けた北西向きの断面である。上層には10cm前後の表層が西下がりに堆積しておりその下には20～30cmの厚さで黄橙色砂泥が堆積している。さらにその下

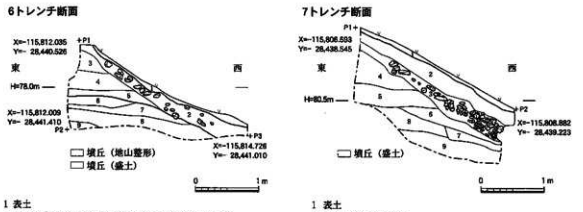


1	表土		
2	10YR5/8	黄褐色砂泥	(竹の根多量含む)
3	10YR4/6	褐色砂泥	(竹の根、径3～10cmの礫多量含む)
4	10YR5/6	黄褐色泥砂	(10cm大の礫少量含む)
5	10YR6/6	明黄褐色砂泥	(径5～20cmの礫多量含む、植輪片少量含む)
6	10YR6/3	にぶい黄橙色砂泥	
7	10YR7/6	明黄褐色砂泥	(径10～15cmの礫多量含む)
8	10YR6/4	にぶい黄橙色砂泥	(竹の根多量含む)
9	2.5Y5/6	黄褐色泥砂	(径5～10cmの礫多量含む、鹿骨土含む)
10	2.5Y5/8	明黄褐色砂泥	(径5～10cmの礫多量含む)
11	10YR5/6	黄褐色泥砂	(竹の根多量含む) [3層に対応]
12	10YR5/6	黄褐色砂泥	(径10～15cmの礫多量含む)
13	7.5YR5/6	明褐色砂泥	(10cm大の礫少量含む) [5層に対応]
14	10YR5/8	黄褐色砂泥	[貴石間の詰土]
15	10YR7/6	明黄褐色砂泥	[貴石の裏込め土]
16	7.5YR5/8	明褐色砂礫	(径3～8cmの礫多量含む)
17	7.5YR3/3	暗褐色砂礫	(径3～8cmの礫多量含む)
18	7.5YR4/6	褐色砂礫	(径3～5cmの礫多量含む)
19	10YR6/6	明黄褐色砂礫	(径2～3cmの礫多量含む、砂っぽい)

[地山]

図146　5トレンチ実測図（1：60）

にはにぶい黄橙色砂泥層に10～20cm大の円礫が多数含まれる層が約30度の角度で堆積している。この礫は墳丘第3段斜面の貴石とみられるが原位置を保っているか否は判然としない。その下層は1トレンチと同様に明黄褐色系の土と黄橙色系の土が10～30cmの厚さでほぼ水平に数層堆積しており、人為的に積んだものとみている。レベルからみてこの断面は墳丘3段目を形成しているとみられる。



1 表土
2 10YR7/6 明黄褐色砂泥［黄石とみられる径10cm大の礫含む，一部は元位置を保つ］
3 10YR6/8 明黄褐色砂泥
4 10YR6/6 明黄褐色砂泥
5 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥（締まりがよい）
6 10YR6/6 明黄褐色砂泥（径2～3cmの礫多量含む）
7 10YR7/6 明黄褐色砂泥
8 10YR8/6 黄橙色砂泥
9 7.5YR5/8 明褐色砂泥

（盛土）
［墳丘］
（地山整形）

1 表土
2 7.5YR6/8 橙色砂泥
3 7.5YR6/4 にぶい橙色砂泥［黄石とみられる径10～15cm大の礫含む，一部は元位置を保つ］
4 7.5YR6/6 橙色砂泥（径3～5cmの礫少量含む）
5 7.5YR5/6 明褐色砂泥（径3～5cmの礫少量含む）
6 7.5YR7/4 にぶい橙色砂泥
7 10YR7/8 黄橙色砂泥（径2～5cmの礫多量含む）
8 7.5YR5/8 明褐色砂泥（径2～5cmの礫多量含む）
9 5YR6/8 橙色砂泥（径3～5cmの礫多量含む）

図147　6・7トレンチ断面図（1：60）

5．遺　　物（図148・149）

調査で出土した遺物は、遺物コンテナ1箱分である。ほぼ全てが土師質の円筒埴輪片である。いずれも小片で、全体を復元できる資料はない。このほかに須恵器の壺と杯蓋の一部とみられる破片を採集している。以下、代表的な遺物について述べる

埴輪　1は二重口縁の朝顔形埴輪の破片である。口縁部下半の部分とみられ、外反する口縁部の基部には細い突帯が付く。全体に風化が著しく、器面の調整は観察できない。2トレンチから出土している。

2～9は通常型の円筒埴輪片である。

2は口縁部の破片で、大きく外反し、端部は下端をわずかにつまみ出す。内外面共に横方向のナデを施す。4トレンチから出土している。

3～5は突帯部分の破片である。いずれも直立する体部に断面台形の突帯が付くが、5は突帯

表29　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代前期	円筒埴輪	2箱	円筒埴輪9点	1箱	0箱
古墳時代後期	須恵器		須恵器2点	0箱	0箱
合　計		2箱	11点（1箱）	1箱	0箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

が脱落している。突帯の先端は上端がわずかに外上方へつまみ出される。3・4の体部外面は幅1㎜程度の細かいタテハケを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯部分は横ナデであるが、4の端面にはハケ状の工具を用いたナデの跡が認められる。4の体部内面は外面と同じ原体を用いたヨコハケが施される。5の内面は風化のため観察不能、外面は幅1.5～2㎜のやや粗いタテハケが施されているが、突帯が剥離した部分には、細かいタテハケが認められる。すなわち、突帯を貼り付ける前に細かいタテハケを施し、貼り付けた後にやや粗いタテハケを仕上げに施したものとみられる。また、同じく剥離した部分に一辺1㎝方形の刺突痕が認められる。突帯を貼り付ける部分の目印として施されたものとみられる[3]。3は5トレンチ、4は2トレンチ拡張部、5は4トレンチから出土している。

6・7は剥離した突帯である。共に断面台形で上端がわずかに外上方につまみ出される。6の剥離面には体部に施された細かいタテハケと方形の刺突痕が転写された状態で観察できる。7の剥離面には中央に幅2㎝、深さ0.2㎝の溝とその上下に細かいタテハケの転写されたものが観察できる。すなわち、突帯を貼り付ける際に体部側を溝状に削り込みんでいたものと考えられる。

8・9は基底部の破片である。共に2枚の粘土板を張り合わせて成形している。内外面共に風化が著しく表面の調整は不明瞭であるが6の内面にはわずかながら斜め方向のハケの痕跡が認められる。また9は一部接合部が外れており、接合面に施されたオサエの凸凹が観察できる。

須恵器　10は杯蓋の破片で、丸みをもった天井部と口縁部の一部が残存している。天井部と口縁部の境は不明瞭で、口縁部がわずかに内側に屈曲している。天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデを施す。ロクロは時計回りである。6世紀後半のものとみられ

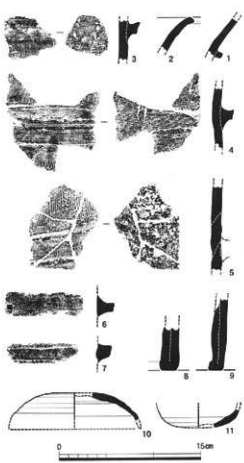


図148　遺物実測図（1：4）

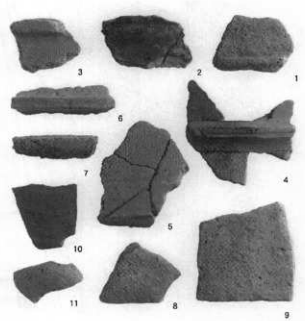


図149　出土遺物

る。5トレンチ出土。

11は小型の壺底部の破片である。底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデを施す。墳丘後円部で表採。

6．まとめ

今回の調査ではまず、現状の記録として3次元オルソによる地形測量を実施した。従来の地形測量が線形による図で表現したものであるに比べ、より正確で視覚的に捉えやすいものとなっている。今後の墳丘復元などに際して威力を発揮するものと考えられる。

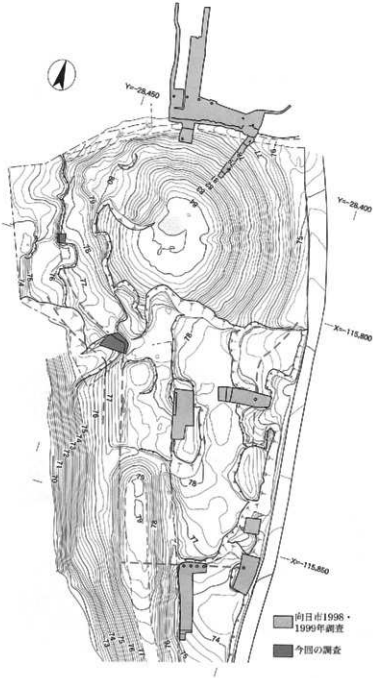


図150　墳丘復元図（1：800）

発掘調査は期間も調査範囲も極めて限定されたものであったが、基点となるべき遺構が確認でき、墳丘の形状を復元する上で重要な資料を得ることができた。また断面の観察からは墳丘の構築法、さらに葺石の状態についても知見を得ることができた。

まず、墳丘の形状については、2トレンチにおいて2段目の葺石の基底石列を確認することができた。これによって後円部1段目のテラスの位置を標高76.5m前後に復元することができた。また、5トレンチではくびれ部2段目葺石の基底石列を発見し、その中に前方部と後円部の接点とみられる部分を確認することができた。この位置はY=-28,439.15、X=-115,816.30、標高76.3mである。寺戸大塚古墳は前方部がほぼ平行にのびる柄鏡型に近い形状であるとされ

ているが[37]、現在では前方部の地形が改変されておりその形状を窺い知ることは困難である。今回、くびれ部の位置を特定できたことで形状の復元において重要な定点をおさえることができたといえる。

墳丘の構築法に関しては、断面観察の結果、墳丘第2段目の中程（標高77.85m）までは元々の丘陵を整形した、いわゆる地山削り出し整形で、その上は人工的に積み上げた盛土であることがわかった。図151はこの状況を示すために、今回の各調査区の断面を投影し、模式的に表したものである。こうした墳丘の構築法については既にこれまでの京都大学[32]や向日市[41]の調査で明らかにされていることで、今回西側についても同様の状況が追認できた。ただし地山削り出し部分についてはくびれ部では葺石の直下まで地山整形であり、後円部西側では地山と葺石の間にわずかなが

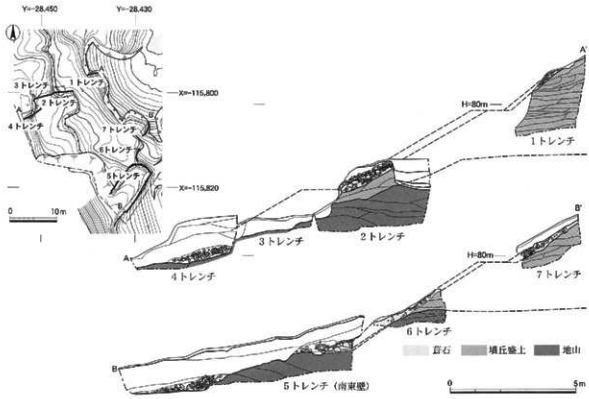


図151　墳丘断面模式図（1：150）

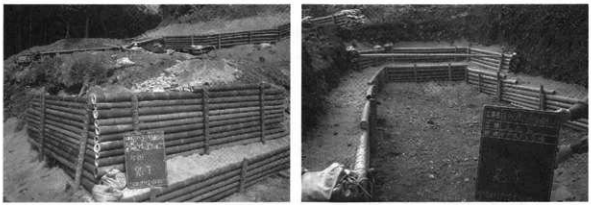


図152　墳丘の仮保存処置状況

ら人工的に盛られた部分が存在することがわかった。これは当初の地形によるものなのか、墳丘の構築法の違いによるものなのかは今回の調査ではわからなかった。上部の盛土部分に関しては1トレンチに代表されるように、明黄褐色系の堅く締まった土層と、橙色系のやや礫を含む砂質がかった層が約10～15㎝おきに互層に積み上げられている。いわゆる版築状に積み上げることによって墳丘を堅固にしていることが読みとれる。

次ぎに葺石に関しては2トレンチに代表されるように、最下部に径約50㎝の大きめの石を縦長に、やや急角度に並べ、その上にやや小ぶりな石を墳丘の傾斜に沿って並べている。また葺石の下には拳大の円礫を入れており、極めて丁寧な仕事を行っている。また、7トレンチでは、前方部と後円部の要の基底石を検出できた。この石は他の基底石よりさらに一回り大きく、しかも表面が平らになるように並べられていた。墳丘表面の要所には意識的にこうした石材が選ばれていたことを窺わせている。

遺物に関しては、円筒埴輪の突帯の接合方法に、従来確認されていた方形刺突によって位置を明示する方法に対して、壁面を溝状に彫り窪めた技法があることを新たに確認することができた。

また、調査では須恵器片を採集しており、その内の一つがくびれ部で出土したものであるため、この周辺で6世紀代に何らかの祭祀が行われた可能性が考えられよう。

遺構の仮保存処置に関しては、現状崖面となっている部分を完全に補修するためには、膨大な土木工事が必要となってくることが判明し、それを断念した。代わりに最小限の措置として、崖面底部に木杭を打ち、伐採した竹材を利用してしがらみを作り、その内側に真砂土を入れ、崖面下部の抉れを防止することとした。さらに、内側の真砂土にはススキの種子を蒔き、この根で真砂土の崩壊をおさえることにした（図152）。

最後に、調査前は対象とした後円部西側については筍栽培による造成のため、原形を留めていないのではないかと心配された。しかしながら調査の結果、わずかながらでも原状をとどめている部分が確認できたことは大きな収穫であった。地形測量の成果とも合わせて墳丘の復元には有効な資料を収集できたといえる。さらに、墳丘の崩壊にわずかながら歯止めの処置ができたことは、今後の復元整備に向けて明るい材料を提供できたと言えよう。

註

1）向日市が実施した1998年度調査の報告に方形刺突についての指摘がある。財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会「寺戸大塚古墳－第6次調査の成果－」『向日市埋蔵文化財調査報告書第49集』 1999年

2）京都府向日市「古墳時代」『向日市史 上巻』 1983年

3）都出比呂志「寺戸大塚古墳後円部墳丘の調査」（京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団）「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」史学研究会『史林』第54巻6号 1971年

4）註1および「寺戸大塚古墳・第7次発掘調査報告―後円部墳丘の調査―」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第50集』 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 2000年

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく
書名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西森正晃・市川豊治・山本雅和・能芝妙子・綱　伸也・上村和直・柏田有香・吉崎　伸
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108
発行年月日	西暦2008年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	京都市上京区竹屋町通千本東入主税町115番	26100	237	35度01分03秒	135度44分35秒	2007/6/6～6/28	80.13㎡	個人住宅建設
平安宮豊楽院跡・鳳凰遺跡	京都市中京区聚楽廻西町80	26100	236	35度01分05秒	135度44分24秒	2007/8/31～10/5	176㎡	範囲確認
平安宮西雅院跡	京都市上京区日暮通丸太町上る四人西院町747-12他	26100		35度01分09秒	135度44分50秒	2007/2/26～3/17	84㎡	小規模共同住宅建設
平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡	京都市中京区小川通六角下る元本能寺町391-1	26100	468	35度00分25秒	135度45分15秒	2007/8/22～9/14	100㎡	個人住宅兼共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	都城跡 集落跡	平安時代	昌福堂の基壇	土師器、須恵器、瓦	朝堂院昌福堂基壇の北端を検出
平安宮豊楽院跡・鳳凰遺跡	都城跡 集落跡	平安時代	清暑堂及び北廊の基壇	土師器、緑釉陶器、白色土器、鴟尾、軒瓦、瓦	清暑堂及び北廊の基壇を検出
平安宮西雅院跡	都城跡	中世～近世	土坑	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、染付、瓦	中世～近世の土坑を検出
平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡	都城跡 平城跡	室町時代	溝、土坑、柱穴	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、瓦、石製品、金属製品	本能寺に伴う溝、土坑を検出

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく
書名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西森正晃・布川豊治・山本雅和・能芝妙子・綱　伸也・上村和直・柚田有香・吉崎　伸
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108
発行年月日	西暦2008年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京西寺跡・唐橋遺跡	京都市南区唐橋西寺町35-12	26100	756	34度58分53秒	135度44分12秒	2007/2/16～3/2	31.4㎡	小規模共同住宅建設
法勝寺跡・岡崎遺跡	京都市左京区岡崎南御所町10、10-4、9-4、9-6、9-15、9-26	26100	417-1 418	35度00分53秒	135度47分09秒	2007/7/9～7/27	112.5㎡	個人住宅建設
中臣遺跡（84次調査）	京都市山科区勧修寺西金ケ渕390、391	26100	632	34度58分06秒	135度48分24秒	2006/12/18～2007/1/17	260㎡	小規模共同住宅建設
妙満寺窯跡	京都市左京区岩倉幡枝町743-28、743-29、1215-3、1215-6番地	26100	358-11	35度04分01秒	135度46分33秒	2007/6/25～7/27	152㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京西寺跡・唐橋遺跡	寺院跡 集落跡	平安時代	柱穴、土坑	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器	平安時代の柱穴、土坑を検出
法勝寺跡・岡崎遺跡	寺院跡 集落跡	平安時代		軒瓦	平安時代後期の瓦が出土
中臣遺跡（84次調査）	集落跡	飛鳥時代		土師器、須恵器	飛鳥時代の土師器、須恵器が出土
妙満寺窯跡	窯跡	飛鳥時代・平安時代		土師器、須恵器、軒瓦、瓦、窯壁	飛鳥時代・平安時代の土師器、須恵器、軒瓦、瓦、窯壁が出土

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく
書名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西森正晃・布川豊治・山本雅和・能芝妙子・網　伸也・上村和直・柏田有香・吉崎　伸
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　TEL 075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　TEL 075-222-3108
発行年月日	西暦2008年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
植物園北遺跡(1)（しょくぶつえんきたいせき）	京都市左京区松ヶ崎芝本町4番地1（きょうとしさきょうくまつがさきしばもとちょう）	26100	146	35度03分05秒	135度46分26秒	2007/５/29～7/２	120㎡	個人住宅兼共同住宅建設
植物園北遺跡(2)（しょくぶつえんきたいせき）	京都市北区上賀茂畔田町26番、39番（きょうとしきたくかみがもくろたちょう）	26100	146	35度03分23秒	135度45分48秒	2007/11/19～12/15	183㎡	小規模共同住宅建設
寺戸大塚古墳（てらどおおつかこふん）	京都市西京区大枝南福西町2丁目（きょうとしにしきょうくおおえだみなみふくにしちょう）	26100	1005	34度57分20秒	135度41分20秒	2007/１/22～3/20	62.9㎡	自然崩壊

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植物園北遺跡(1)	集落跡	古墳時代	竪穴住居、溝	土師器	古墳時代の竪穴住居を検出
植物園北遺跡(2)	集落跡	平安時代	建物、柱列、溝	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、軒瓦、瓦	平安時代の建物跡を検出
寺戸大塚古墳	古墳	古墳時代	墳丘盛土	円筒埴輪	古墳の墳丘盛土と葺石を検出

図　版

図版1　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡　遺構

1　全景（北から）

2　北拡張区全景（北西から）

1　昌福堂基壇延石（北から）

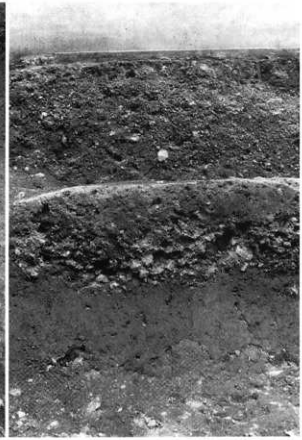
2　昌福堂基壇延石（西から）

1　延石地山掘り下げ（東から）

2　延石地山据え置き（西から）

3　延石嵩上げ（南から）

4　地覆石抜き取り痕瓦出土状況（北西から）



5　昌福堂基壇盛土断面（西から）

図版4　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡　遺構

1　化粧土掘り下げ（西から）

2　化粧土断面（西から）

3　裏込め土断面（南西から）

図版5　平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡　遺物

1

4

6

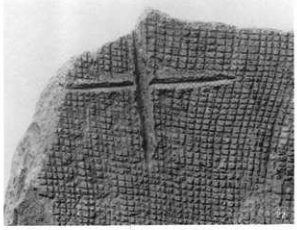
2

7

5

18

23



21

出土遺物

1　調査区全景　平安時代（東から）

2　調査区全景　江戸時代（東から）

1　北廊縦断面（溝2西壁）（北東から）

2　落込み51北肩と北廊（南東から）

図版8　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡　遺構

1　清暑堂基壇と西階段（南西から）

2　西階段（東から）

3　西階段延石・踏石（西から）

1　西階段断面（北西から）

2　西階段断面（南東から）

1　清暑堂中央間　北廂取り付き部（東から）

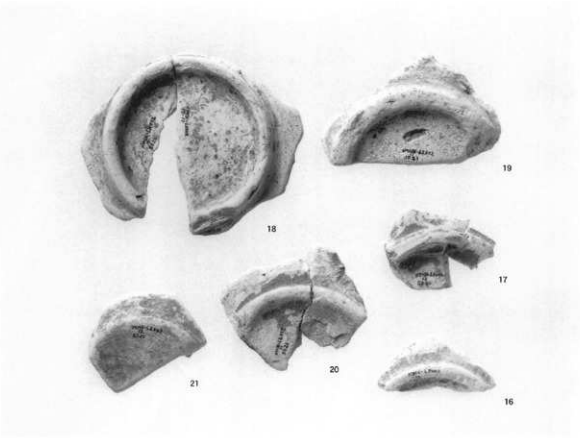
2　土坑49（北から）

3　北廂Ⅰ期側面瓦貼り付け状況（西から）

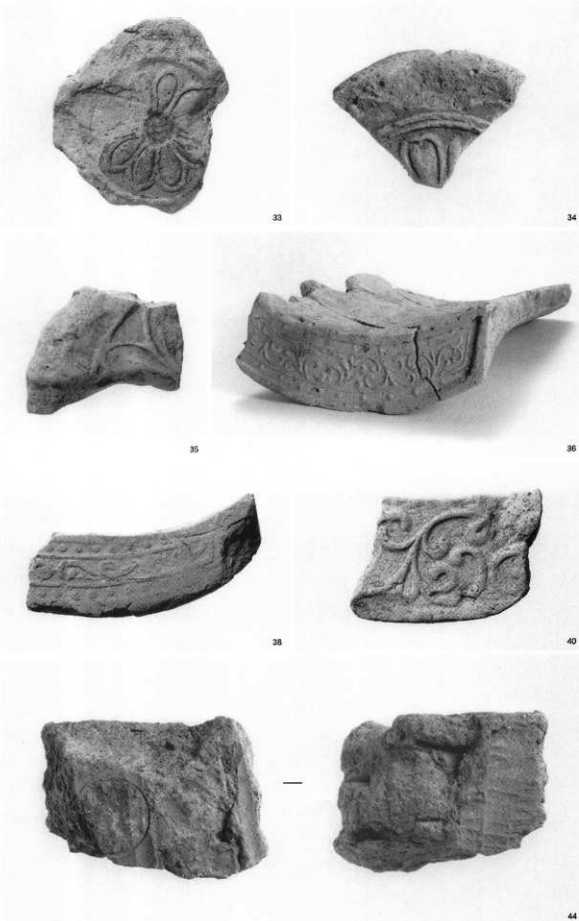
1　塀敷きと北廊版築状況（西から）

2　塀敷きと史跡豊楽殿北廊跡（北から）

3　北廊断割断面（南西から）



出土遺物


33
34
35
36
38
40
44

図版14　平安宮西雅院跡　遺構

1　調査区全景（北から）

2　北壁断面（南から）

3．流路断ち割り（北西から）

図版15　平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡　遺構

1　北壁断面（南東から）

2　第1面全景（東から）

1　土坑17・98・49・46、溝28（東から）

2　溝28（南から）

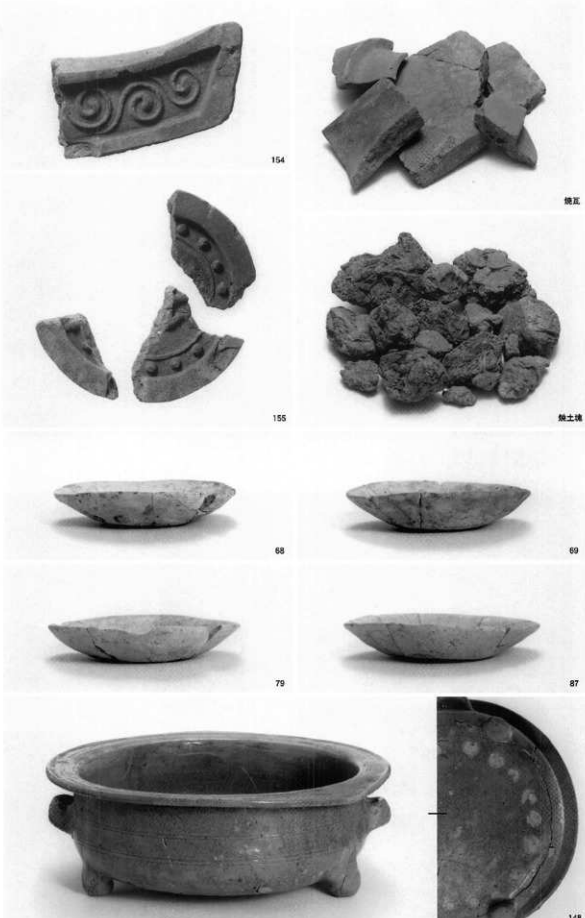
3　土坑6遺物出土状況（西から）

1　第2面全景（東から）

2　土坑87(南から)

3　柱穴109（南から）

4　柱穴23（南から）

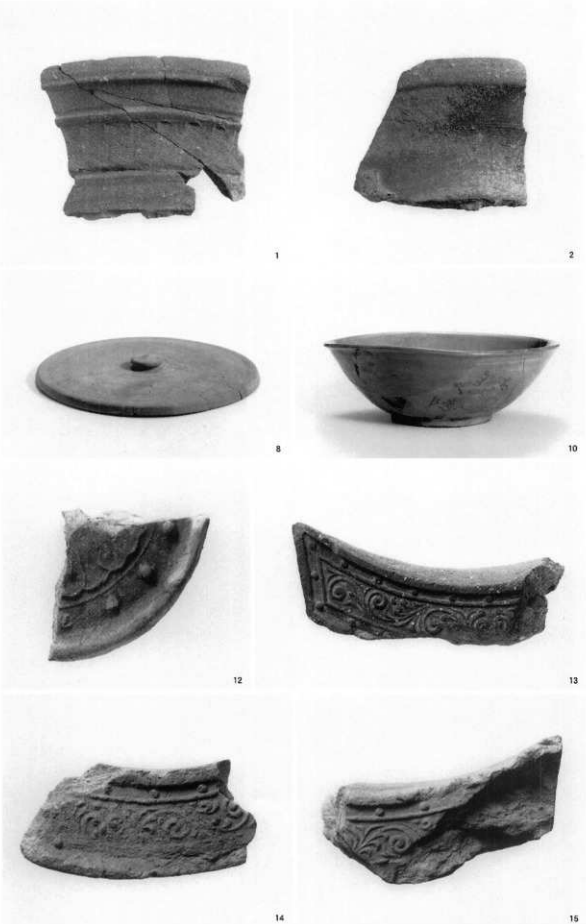


土坑6・土坑15出土土器、土坑26出土焼瓦・焼土塊

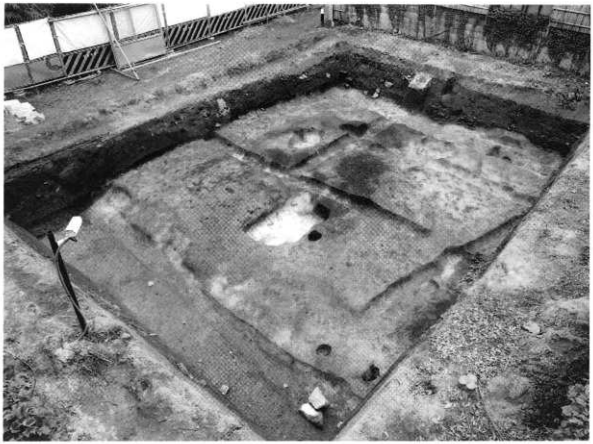
1　調査区全景（北から）

2　柱穴2（東から）

3　拡張部東壁（北西から）

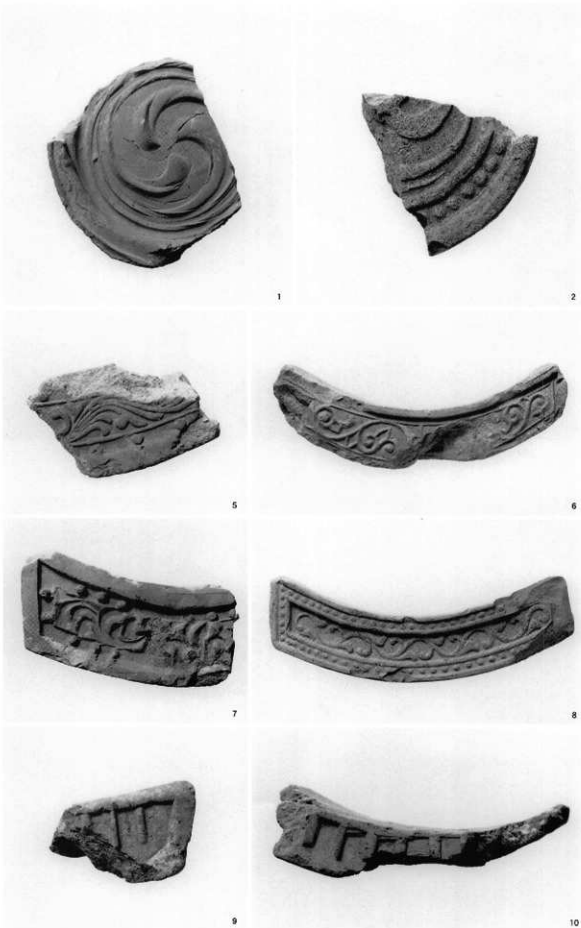


出土遺物

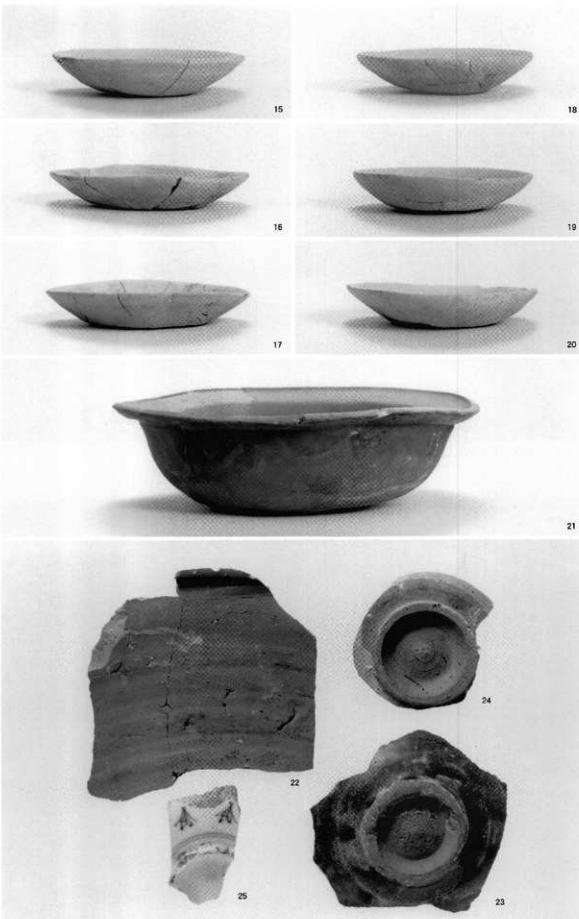


1　調査区全景（南西から）

2　SD9（北から）



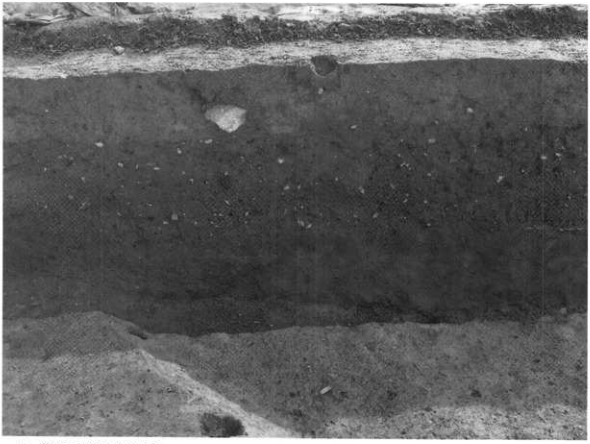
瓦類



土器類

図版24　中臣遺跡84次調査　遺構

1　調査区全景（西から）



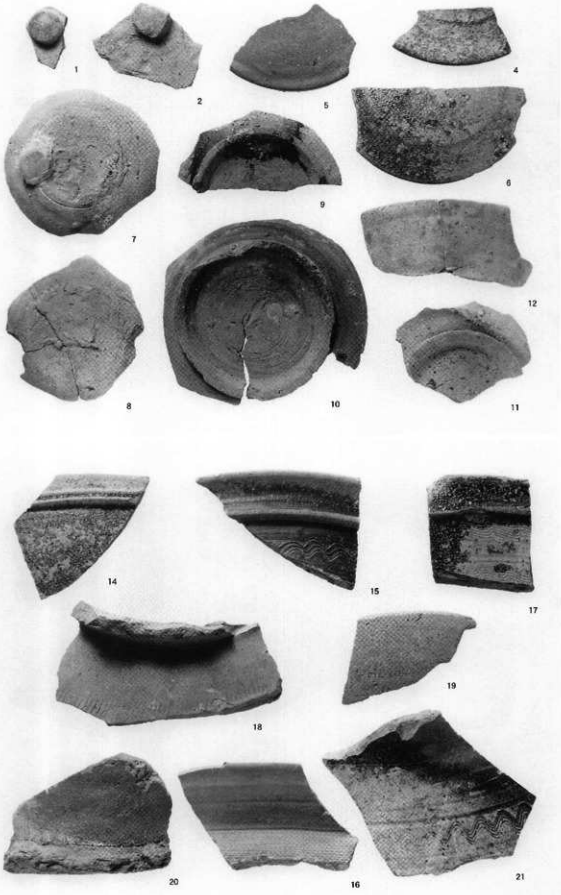
2　落込み6断面（北から）

1　調査地（南東から）

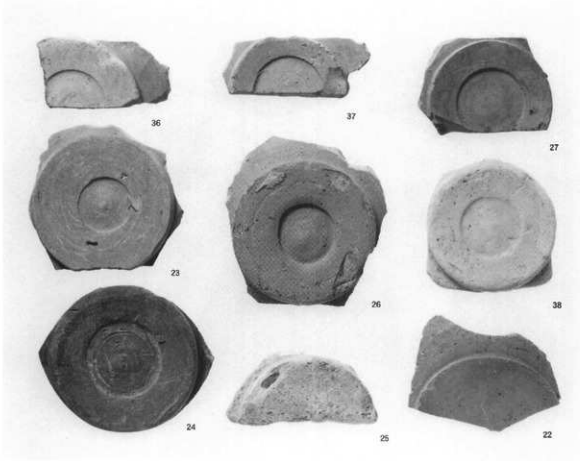
2　第1面全景（南から）

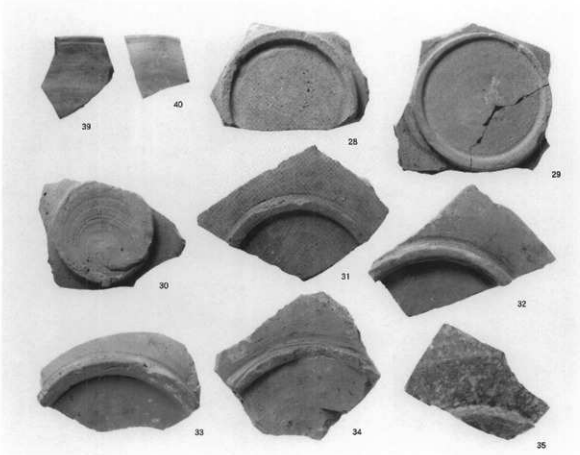
1　落込全景（北から）

2　調査区北壁断面（南東から）

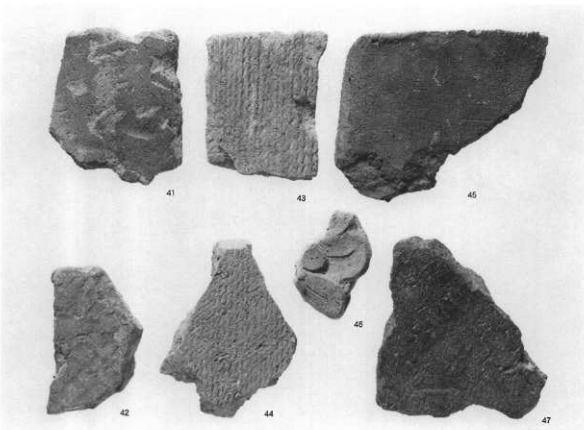


土器類1

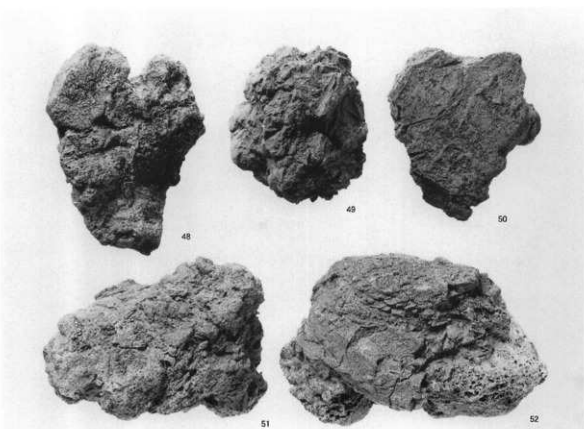




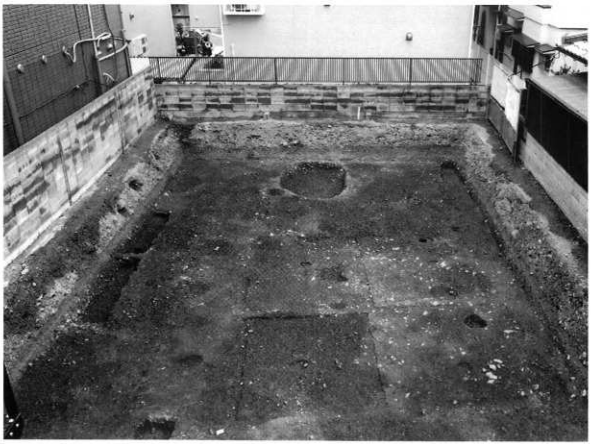
土器類2



1　瓦類



2　窯壁類

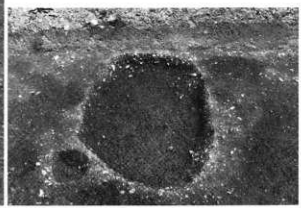


1　全景（北から）

2　竪穴住居10（東から）

1　竪穴住居20（北北西から）

2　竪穴住居25（東から）



3　土坑23（北から）

4　溝38・溝39（東から）

1　竪穴住居30（北から）

2　竪穴住居30炭化材検出状況（北から）

3　竪穴住居30北西側壁溝（北東から）

29

42

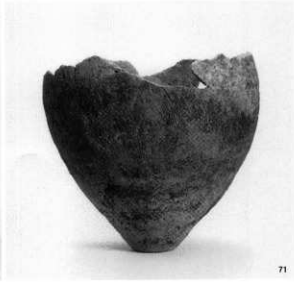
62

52

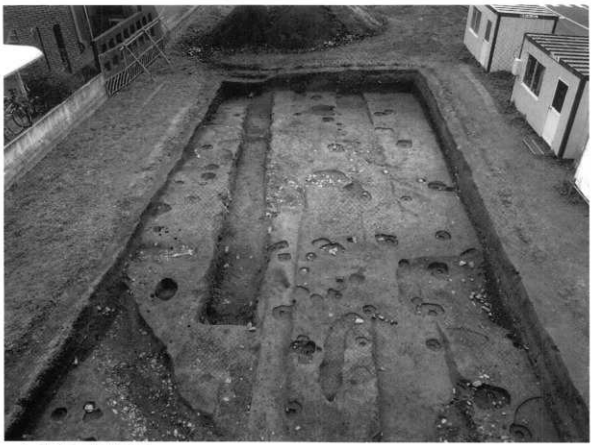
46

63

50


71

竪穴住居30・包含層出土土器



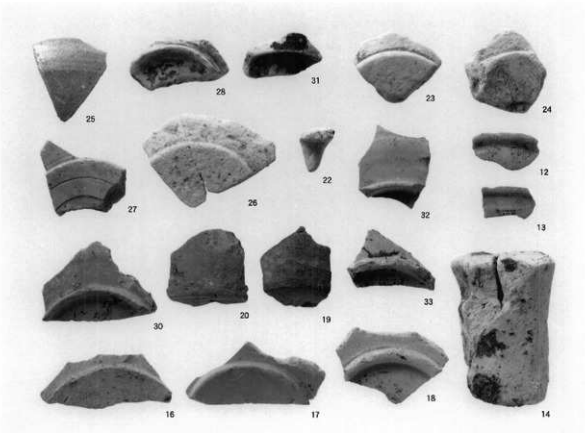
1　調査区全景（北から）

2　建物1（北から）

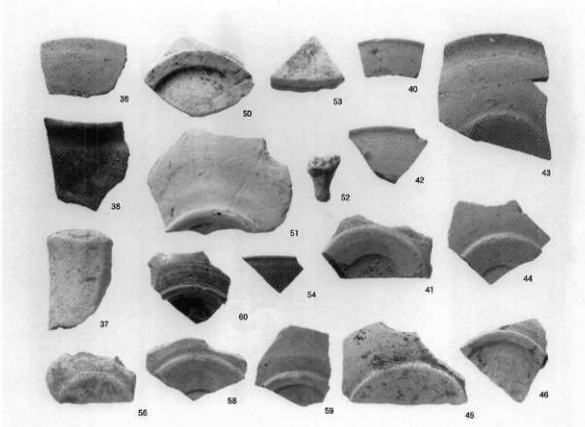
1　建物2（北から）

2　礫敷15（東から）

3　拡張区全景（南から）



1　土坑30出土土器



2　遺物包含層出土土器

1　1トレンチ断面（南から）

2　4トレンチ断面（北から）

3　2トレンチ葺石及び断面の状況（南西から）

1　5トレンチ南東断面（西から）

2　5トレンチくびれ部基底石検出状況（南西から）

3　6トレンチ断面（西から）

京都市内遺跡発掘調査報告
平成19年度

発行日　2008年3月31日
発　行　京都市文化市民局
住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編　集　(財)京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
〒602-8435　℡075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/
印　刷　三星商事印刷株式会社